

## 序

もう 20 年も前のことだ。本書の着想を我が尊敬する師、今は亡きユルバン・デュボワ<sup>1)</sup>先生に話したのは、先生は是非とも実現させなさいと強く勧めてくださった。けれども忙しさにかまけてしまい、漸く 1898 年になって、フィレアス・ジルベール<sup>2)</sup>君と話し合い協力をとりつけることが出来た。ところがまもなく、カールトンホテル開業のために私はロンドンに呼び戻され、その厨房の準備や運営に忙殺されることとなった<sup>3)</sup>。本書の計画を実現させるために落ち着いた時間を取り戻さねばならなくなってしまった。

1898 年から放置したままだった本書に再び着手出来たのは、多くの同僚たる料理人諸君の助力と、友人でもあるフィレアス・ジルベール君とエミール・フェチュ<sup>4)</sup>君の献身的な協力を得られたからに他ならない。この一大事業を完成させることが出来たのは、ひとえに皆の励ましと、とりわけ辛抱強く、粘り強く仕事を手伝ってくれた二人の共著者<sup>5)</sup>のおかげだ。

私が作りたいと思ったのは立派な書物というよりはむしろ実用的な本だ。だから、執筆協力者の皆には、作業手順を各自の考えにもとづいて自由にレシピを書いてもらい、私自身は、40 年にわたる現場経験に即して、少なくとも原理原則、料理における伝統的基礎を明確に説明するのに専念した。

本書は、かつて私が構想したとおりとは言い難い出来だが、いずれはそうなるべく努めねばなるまい。それでもなお、現状でも料理人諸君にとって大いに役立つものと信じている。だからこそ、本書を誰にでも、とりわけ若い料理人にも買える価格にした<sup>6)</sup>。そもそも若い料理人諸君にこそこの本を読んで貰いたい。今はまだ初心者であったとしても、20 年後には組織のトップに立つべき人材なのだから。

私はこの本を豪華な装丁<sup>7)</sup>、書棚の飾りのごときにはして欲しくない。そうではなく、いつでも、どんな時でも手元に置いて、分からないことを常に明らかにしてくれる盟友として欲しい。

本書には五千を越えるレシピが掲載されているが、それでも私は、この教本が完全だとは思って

1) Urbain Dubois (1818～1901)。19 世紀後半を代表する料理人。

2) Philéas Gilbert (1857～1942)。19 世紀末から 20 世紀初頭に活躍した料理人。料理雑誌「ポトフ」を主宰した。

3) エスコフィエはセザール・リッツの経営するホテルグループにおいて料理に関わる重要な役割を一手に担っていた。1890 年～1897 年にかけてロンドンのサヴォイホテルの総料理長を務めた後、1898 年にはパリのオテル・リッツの、1899 年にはロンドンのカールトンホテルの開業に携わり、1920 年までカールトンホテルで総料理長を務めた。

4) Emile Fétu 生没年不詳。

5) ジルベールとフェチュを指しているが、初版には、この二人の他にも共著者として 4 人の名が挙げられている。第二版以降は共著者としてジルベールとフェチュの名しかクレジットされていない。第二版は初版から構成も含め大幅な改訂が行われた。その作業を実際に行なったのがジルベールとフェチュだったために、他の共著者のクレジットが抹消されたと考えられる。なお、現行の第四版にはエスコフィエの名しかクレジットされていない。

6) 1903 年の初版の売価は、**フランス国立図書館蔵**のもの表紙には、フランス国内で 12 フランと記したシールが貼られている。また、**リーズ大学図書館蔵**の第二版にも同様に国内売価 12 フランのシールが貼られている。1912 年の第三版も同じく 12 フランだった(**フランス国立図書館蔵**のものに価格を示すシールはないが、訳者個人蔵のものには 12 フランと記されたシールが貼られている)。なお、辻静雄は「1903 年の初版発売当時は、800 ページでたった 8 フラン、全く破格の値段だった」(「エスコフィエ 偉大なる料理人の生涯」、『辻静雄著作集』、新潮社、1995 年、729～730 頁)と記しているが、その数字の典拠は示されていない。現在と当時の通貨価値、物価の違いが分りにくいため、この「破格に安い」という言葉にはやや疑問が残るだろう。1900 年当時の書籍広告において『料理の手引き』初版と同様の八折り版 800 ページの料理書が、フランス装 10 フラン、厚紙の表紙のものが 11 フランとあるため、初版の 12 フランという価格は、むしろ料理書としては一般的だったと考えられる。つまり、豪華本ではなく、普通に利用できる料理書だということを強調しているに過ぎないと解釈すべきところだろう。なお、八折り判というのは書籍の大きさを表す用語で、概ね縦 20～25cm、横 12～16cm 程度。この序文でことさらに「実用性」や入手しやすい価格であることが強調されているのは、何度も言及されているデュボワとベルナルの名著『古典料理』が四折り判(概ね縦 45cm、横 30cm)の豪華本であったことを意識していたためとも推測されよう。

7) かつてフランスでは、大判の紙の両面に印刷して折ったものを糸で綴じただけの状態(いわゆる「フランス装」)で販売された本を、書店で買い求めた者が別途、業者に製本、装丁させることが一般的に行なわれていた。

いない。たとえ今この瞬間に完璧であったとしても、明日にはそうではないかも知れぬ。料理は進化し、新しいレシピが日々創案されている。まことにもって不都合だが、版を重ねる毎に新しい料理を採り入れ、古くなってしまったものは改善せねばなるまい。

エルバン・デュボワ、エミール・ベルナル<sup>1)</sup>両氏の著作<sup>2)</sup>に昔から慣れ親しみ、その巨大な影がなお料理の地平を覆い尽している現在、私としては本書がその後継になって欲しいと思っている。カレーム以後、最高の料理の高みに達した二人に対し、ここであらためて心から敬意を表させていただきと思う。

調理現場を取り巻く諸事情により、私は、デュボワ、ベルナル両氏がもたらしたサービス（給仕）面での革新<sup>3)</sup>に対し、こんにちのようなとりわけスピードが重視される目まぐるしい生活リズムに合わせて、大きな変更を加えざるを得なかった。そもそも物理的理由から、料理を載せる飾り台<sup>4)</sup>をやめて、シンプルな盛り付けにする新たなメソッドと新たな道具を考案する必要があったのだ。デュボワ、ベルナル両氏が推奨した壮麗な盛り付けを私自身も行っていた頃はもちろん、今なお双方の思想にはまったく共感している。冗談でこんなことを言っているのではない。しかし、カレームを信奉する者たちは、装飾の才があるが故に、時代にもはや似わなくなってしまった作品に対して改良を加えようとはしなかった。時代に合わせて改良することこそ、まさに重要なことに。本書で奨励している盛り付けは、少なくともそれなりの期間、有用であり続けると思う。全ては変化する。姿を変える。それなのに、装飾芸術の役割が変化しないと主張するなどは蒙昧ではないか。芸術は流行によって栄えるものだし、流行のように移ろいやすいものだ。

だが、カレームの時代にはこんにちと同じく既にあり、料理が続く限りなくならないだろうものがある。それが料理のベースとなるフォンやストックだ。そもそも、料理が見た目にシンプルになっても料理そのものの価値は失なわれないが、その逆はどうだろう？ 人々の味覚は絶え間なく洗練され続け、それを満足させるために料理そのものも洗練されることになる。こんにちの余剰活動が精神におよぼす悪影響に打ち克つためには、料理そのものがいっそう科学的な、正確なものとなるべきなのだ。

その意味で料理が進歩すればする程、我々料理人たちにとって、19世紀、料理の行く末に大きく影響を与えた三人の料理人の存在は大きなものとなるだろう。カレームとデュボワ、ベルナルはともすれば技術的側面ばかり評価されるが、料理芸術の基礎において何よりも優れているのだ。

既に物故した名だけ挙げるが、確かにグフェ<sup>5)</sup>、ファーヴル<sup>6)</sup>、エルーイ<sup>7)</sup>、ルキュレ<sup>8)</sup>はとても素晴らしい著作を残した。だが、『古典料理』という稀代の名著に比肩し得るものはひとつとしてない。

1) Emile Bernard (1827～1897)。クラシシス兵隊の料理人を務めた。

2) デュボワとベルナルの共著は他にもあるが、ここでは『古典料理』（1856年）を指している。

3) 19世紀後半に一般化した「ロシア式サービス」のこと。中世以来、正式な宴席では卓上に大皿の料理が一度に何種も並べられ、食べる者がそれぞれ好きなように取り分けていた。これを食べる順に1種ずつ、大皿料理の場合は食べ手に見せて回ってから、給仕が取り分けて供する方式にしたのがロシア式サービスである。食卓に大皿を並べない代わりに、花を飾りナフキンを美しく折るなどの工夫により卓上が洗練されていった。19世紀パリに駐在していたロシア帝国の外交官クラークンが提唱した。デュボワとベルナルの『古典料理』序文において詳述されている。

4) socle ソークル。パンや米、ジュレなどで作った、料理を盛り付けるために銀の盆の上に据える飾り台。カレームの時代、つまり19世紀前半にはその装飾に凝ることが多かった。食べもので作られてはいるが、料理の一部ではなく、あくまで装飾の要素でしかなかった。この飾り台はロシア式サービスの時代になっても豪華絢爛たる宴席においては重要なものとして扱われており、デュボワとベルナル『古典料理』でも相応のページ数を割いて説明がなされている。

5) Jules Gouffé (1807～1877)。著書も多く、代表作『料理の本（1867年）』は前半が家庭料理、後半が高級料理の二部構成となっており、レシピの書き方も、まず材料表を掲げた後に調理手順を説明するという現代のものに近く、挿絵も比較的多くて分りやすい。フランス料理史における名著のひとつ。

6) Joseph Favre (1849～1903)。スイス生まれの料理人で、パリ、ドイツ、イギリス、ベルギー等において活躍した。著書『料理および食品衛生事典』（1884～1895年）。

7) Edouard Héloüis (生没年不詳)。イギリスのアルバート王配（ヴィクトリア女王の夫）(1819～1861) やイタリアのヴィットーリオ・エマヌエーレ二世 (1820～1878) に仕えたという。著書『王室の晩餐』（1878年）。

8) 『実践的料理』（1859年）の著者 C. Reculet のこと。

料理人諸君に、新たに本書を使っていたくにあたり、言うべきことがある。いろいろな料理書、雑誌を読み散らかすのもいいが、偉大な先達の不朽の名著はしっかり読み込むように、と。<sup>ことわざ</sup>諺にあるように「知り過ぎることなはい」のだ。学べば学ぶ程、さらに学ぶべきことは増えていく。そうすれば、柔軟な思考が出来るようになり、料理が上達するためのより効果的な方法を知ること出来るだろう。

本書を上梓<sup>じょうし</sup>するにあたって<sup>ただ</sup>唯ひとつ望むこと、切に願う<sup>ゆいいつ</sup>唯一のことは、上記の点において、本書の対象たる読者諸君が我が<sup>げん</sup>言に耳を傾け、実践するさまを見ることに尽きる。

A. エスコフィエ

1902 年 11 月 1 日

## 第二版序文

ここに第二版を上梓するに至ったわけだが、二人の共著者による熱意あふれる仕事のおかげで、私の強い期待をさらに越える本書の成功が約束されたも同然だろう。だからこそ、共著者両君および本書の読者諸君に心からの謝辞を申しあげる次第だ。また、ありがたいことに、称賛の言葉を寄せてくださった方々と、貴重な批判をくださった方々にも御礼申しあげる。批判については、それが正当なものと思われる場合については、本書に反映させるべく努めさせていただいた。

かくも多くの人々に本書を受け入れていただけたことへの謝意を表するには、本書における技術的な価値を高め、初版ではロジカルにレシピを分類しようとしたが故に生じた欠点を解消する他ないだろう。それは、調理理論とレシピを損なうことなしに、本書の計画段階において簡単に済まざるを得ないと思われたテーマについて能う限り肉薄することでもある。私たち本文の見直しをするとともに、多くのレシピを追加した。そのほとんどは調理法と盛り付けにおいて、こんにちの顧客のニーズを鑑みて着想したものであり、そのニーズが正当かつ実現可能な範囲において、顧客への給仕のペースが日増しに加速していく傾向をも考慮に入れたものだ。こういった傾向は数年来まさしく際立ってきているが故に、我々としも常に気を配っておかねばならぬ。

「料理芸術」というものは、その表現形態において、社会心理に左右されるものだ。社会から受ける衝撃に逆らわぬことも必要であり、抗えぬことでもある。快適で安楽な生活がいかなる心配事にも乱されることのないような社会であれば、未来が保証され、財をなす機会もいろいろあるような社会であれば、料理芸術はたゆまぬことなく驚異的な進歩を遂げるだろう。料理芸術とは、ひとが得られる喜びのうちでもっとも快適なものひとつに寄与しているのだから。

反対に、安穏とした生活の出来ぬ、商工業からもたらされる数多の不安で頭がいっぱいになるような社会において、料理芸術は心配事でいっぱいの人々の心のごく限られた部分にしか美味しさを届けられない。ほとんどの場合、諸事という渦巻きに巻き込まれた人々にとって、食事をするという必要な行為はもはや喜びではなく、辛い義務でしかないのだ。

斯くのごとき生活習慣は嘆いていい、否、嘆くべきことなのだ。食べ手の健康という観点からも、食べたものを胃が受け付けられないという結果になるとしたら、それは絶対に生活習慣が悪いのだ。そういう結果を抑える力は私に出来る範囲を越えている。そういう場合に調理科学が出来ることといえば、軽率な人々に能うかぎり最良の食べものを与えるという対症療法だけなのだ。

顧客は料理を早く出せと言う。それに対して私たち料理人としては、ご満足いただけるようにするか、失望させてしまうことのどちらかし出来ない。料理を早く出せという顧客の要求を拒む方法があるとするなら、それ以上の方法で顧客にご満足いただけるようにすることしかない。だから、私たちは顧客の気まぐれの前に折れざるを得ないのだ。これまで私たちが慣れ親しんできた仕事のやり方では、これまでの給仕のスタイルでは、顧客の気まぐれに應えることが出来ぬ。意を決して仕事の方法を改革すべきなのだ。だがひとつだけ、変えてはならぬ、手をつけてはならぬ領域がある。料理ひとつひとつのクオリティだ。それは、料理人にとって仕事のベースとなるフォンや事前に仕込んでおいたストック類がもたらすゆたかな風味に他ならぬ。私たちは既に、盛り付けの領域においては改革に着手した。足手まといにしかならぬ多くのものは既に姿を消したか、いままさに消え去らんとしている。料理の飾り台<sup>1)</sup>、料理の周囲の装飾<sup>2)</sup>、飾り串<sup>3)</sup>などのことだ。この方

1) socle ソークル、序 p.ii 訳注 4 参照。

2) bordure ボルデュール。本書においてもガルニチュールの扱いにおいてこの指示はあるが、19 世紀のものと比較するとかなりシンプルな内容になっている。

3) hâtelelet アトレ。一方の端に動物などの姿の装飾の施された銀製の串に、トリュフやクルヴェット(海老)などを事前に別

向性は推し進められると思う。これについては後述しよう。私たちはシンプルであるということを経験まで追究したい。それと同時に、料理の風味や栄養面での価値を増すことも目指している。料理はより軽い、弱った胃にも優しいものにしたいと考えている。私たちはこの点にのみ尽力したい。料理において役をなさない大部分はすっかり剥ぎ取ってしまいたいと考えているのだ。一言でまとめると、料理は芸術であり続けつつも、より科学的なものとなるだろうし、その作り方はいまだ経験則に基づいただけのものばかりであるが、ひとつのメソッド、偶然などに左右されない正確なものになっていくことだろう。

こんにちは料理の過渡期にある。古典料理メソッドの愛好者はいまなお多く、私たちもそれを理解し、その思想に心から共感するところもある。だが、食事というものがセレモニーであり、かつパーティであった時代を懐しんでどうするということだ？ 古典料理がこんにちの美食家に至福の時を与えるために力を発揮出来る場がどこにあるというのだ？ いったいどうすれば、美食と宴の神コモス<sup>1)</sup>に捧げ物を供えるという幸せな機会を毎回得られるのだろうか？ だから私たちは本書において、個人的な創作よりむしろ伝統的なフランス料理のレシピ集として、こんにちの料理のレパートリーから姿を消してしまったものも残すことに固執した。その名に値する料理人なら、機会さえ与えられたら王侯貴族も近代の大ブルジョワもひとしく満足させるためには、知っておくべきものなのだ。時間のこんなぞ気にもせぬ穏かな美食家の方々にも、時こそ全てと言わんばかりの金融家やビジネスマンたちにも満足していただくために。だから、本書が新しいメソッドに偏ったものだという非難にはあたらない。私はただ単に、料理芸術の進化の歩みをたどり、いまの時代に即しつつ、食べ手すなわち食事会の主催者と招待客の皆様の意向を絶対的なものとして、それに従いたいと願っているだけなのだ。食べ手の意向に対して私たち料理人は頭を垂れて従うことしか出来ぬのだから。

私たちは、料理の美味しさを損なうことなくより早く料理を提供できるような方法を、料理人各人が自らの嗜好を犠牲にすることなしに探求すべく誘うことこそが、料理人諸君にとって有益と信じている。全体として、私たちのメソッドはまだまだ日々のルーチンワークに依存し過ぎているものだ。顧客の求めに応えるため、私たちは既に仕事のやり方をシンプルなものにせざるを得なかった。だが、残念ながらもまだ途半ばに過ぎぬと感じている。私たちは自己の信念をしっかりと堅持しており、どうしてもない場合にのみ自説を曲げることもある。だから、装飾に満ちた飾り台を廃止した一方で、盛り付けに時間のかかる厄介で複雑なガルニチュールは残してある。こういったガルニチュールを濫用することはガストロノミーの観点から言って、常に間違っているのは事実だが、残しておくべきものと思われる。それを求める顧客あるいは食事会主催者に絶対に従う必要がある場合はとりわけそうだ。ごく稀にとはいえ、料理の美味しさを損なうことなくそれらを実現可能なこともあるからだ。時間と金銭、広くてスタッフの充実した会場、という3つの本質的要素を最大限活用可能な場合のことだが。

通常の厨房業務においては、ガルニチュールをかなりシンプルな、せいぜい3〜4種の構成要素からなるものに減らさざるを得なくなっている。そのガルニチュールを添える料理がアントレであれルルヴェ<sup>2)</sup>であれ、牛・羊肉料理であれ、家禽であれ魚料理であれ、そうせざるを得ない。その

の串（ブロシェット）で焼いてからこの飾り串に刺し直し、それを大きな塊肉や丸鶏、大型の魚1尾の料理に刺した。19世紀初頭、カレームの時代に全盛となり、その著書『パリ風料理』において詳述されている。19世紀末まではこの装飾がなされることが多かった。また、その飾り串そのものが美しい装飾品であるためにコレクションの対象になっていた。

1) フランス語 Comus コミュス。ラテン語では同じ綴りでコムスと読む。ギリシア、ローマ神話における、喜びと美食の神。18世紀の料理本作家マランの著書『コモス神の贈り物』がタイトル。

2) 19世紀前半まで主流であった「フランス式サービス」つまり、一度に多くの料理の皿を食卓に並べるといった給仕方式において、ポタージュを入れた大きな深皿が空くと、それを給仕が下げて、豪華な装飾を施した大きな塊肉の料理がポタージュを置いてあった場所に据えられた。これを relevé ルルヴェ（交代したものの、意）と呼んだ。エスコフィエの時代にはフランス式サービスではなくロシア式サービスに移っており、大きな塊肉の料理や大型の魚1尾まるごとを大皿で出し、給仕が切り分けて配膳するようになっていたが、名称はそのまま残った。Entrée アントレ（もとは「入口」の意）

ようにして構成要素を減らしたガルニチュールは、素早い皿出しが要求される場合には必ず、ソースと同様に別添で供するのがいい。その場合、盛り付けは奇抜というくらいシンプルなものとなるが……メインの料理はより冷めない状態で、より早く、よりきれいに供することが可能になる。給仕が料理を取り皿に分けてお客様に出すにせよ、お客様が大皿を自分たちで受け渡して取り分けるにせよ、サービス担当者は安心して仕事が出来し、そのほうが容易だ。メインの大皿が山盛りになることはないし、その上に盛り付けられたいろいろな素材のガルニチュールも簡単に取ることが出来るからだ。

こんにちの他のシステムだと、料理を載せるための台や装飾のための飾り串を作り、さらに料理の周囲にガルニチュールを配置するのに、看過出来ぬ程の時間を要していた。こういう盛り付けというのは、料理そのものがさして大きくないものであっても、食べ手の人数が少ない場合であっても、大面積の皿を用いる必要があった。だから、お客様が料理を自分たていで受け渡して取り分ける必要がある場合などは、お客様にとっても、サービス担当者にとってもまことに窮屈なものであった。これは、複雑な構成のガルニチュールの持つ大きな欠点のひとつとして無視できないことだ。他の欠点というのは、あらかじめ盛り付けを行なうことによって美味しさが減ってしまうこと、食べ手が少人数の場合には必然的に、料理を見せて回る間に冷めてしまうこと、などがある。こういう愉快とは言えぬことの結果は何とも情けないことになる。つまり、お客様に大皿に盛り付けた料理をお見せするのはほんの一瞬だけ、お客様は多少なりとも豪華で精密に盛り付けられた料理をちらりと見る暇があるかないか、ということだ。昔日のごとき豪華壮麗な料理を供することの可能な場所もこんにちでは少なくなってきたが、それ以外のところでもこういった悪習が頑固なまでに続けられているというのは、それが昔からの習慣だということではしか説明がつかぬ。

給仕のスピードを容易に上げるために、大きな塊肉の料理でない場合には毎回、下の図のごとき四角形の深皿を出来るだけ用いるよう是非ともお勧めしたい。温かい料理でも、冷製の料理でも、この皿は非常に優れたものであるから、その目的において厨房に備えておくべきものとして他の追随を許さないとと言える<sup>1)</sup>。

繰り返しになるが、本書が新しい方法を勧めているからといって、偏見で古典的なものを悪いと断じているのでは決してない。私たちは、料理人諸君に、顧客たちの生活習慣や味の好みを研究し、自らの仕事をそれらに適合させるよう誘いたいと思っているだけなのだ。我々料理人にとって高名な師とも呼ぶべきカレームは、ある日、同業たる料理人のひとりとおしゃべりをしていた際に、その料理人が仕えている主人の洗練さに欠けた食事の習慣や下卑た味覚を苦々しげに語るのを聞かされたという。その食事の習慣と味覚に憤慨して、自分が人生をかけて追究してきた知的な料理の原則を曲げてまで仕え続けるくらいなら、いっそ辞めてしまいたいと思っている、と。カレームはこう答えた。「そんなことをするのは君のほうが間違っているよ。料理において原則なんていくつも存在しないんだ。あるのはひとつだけ、仕えているお方に満足していただけるか、ということだけなんだよ」と。

今度は我々がその答を考える番だ。自分たちの習慣やこだわりを、料理を出す相手に押しつけるなどと言い張るとしたら、まったくもって馬鹿げたことだ。我々料理人は食べ手の味覚に合わせて料理することこそが第一でありもっとも本質的なことなのだと、私たちは確信している。

私たちがかくも安易に顧客の気まぐれにおもねったり、過度なまでに盛り付けをシンプルにする

---

は現代において「前菜」の意味で用いられているが、食卓に大皿で並べられた肉料理（場合によっては魚料理も含む）の総称としてこの語が用いられていた。本書はそれを踏襲している。本書においてルルヴェおよびアントレに分類されている料理の多くは現代においてコース料理の「メイン」に相当するものが多く、実際、英語ではコース料理のメインのことを現在でもこの語で表わすことが多い（前菜は *appetizer* アペタイザーと呼ぶ）。

1) この段落は、初版の序文の後にある「盛り付け方法をシンプルにすることについて」という挿絵付きの節の内容を短かく縮めたために、ややわかりにくいものになっている。ただし、第二版および第三版においては序文の最後に皿の挿絵が添えられている。



せいで、料理芸術の価値を下げ、単なる仕事のひとつにしてしまっている、と非難する向きもあるだろう。—だがそれは間違いだ。シンプルであることは美しさを排するものではない。

ここで、本書の初版において盛り付けについて述べた部分を繰り返すことをお許しいただきたい。

「どんなにささやかな作品にも自らの最高の印をつけられる才というのは、その作品をエレガントで歪みのないものに見せられるわけで、技術というものに不可欠だと私は信じている。

だが、職人が美しい盛り付けを行なうことで自らに課すべき目的とは、食材を他に類のない方法で節度をもって用いつつ大胆に配置することによってのみ、実現されるのだ。未来の盛り付けにおいて絶対を守るべきこととして、食べられないものを使わないこと、シンプルな趣味のよさこそが未来の盛り付けに特徴的な原則となるだろうことを、認めるべきなのだ。

そのような仕事を成し遂げるために、能力ある職人にはいくつもの手段がある。トリュフ、マッシュルーム、固茹で卵の白身、野菜、舌肉などの食べられるものだけを用いて、素晴らしい装飾を組み合わせ、無限に展開できるのだ。

王政復古期<sup>1)</sup>に料理人たちによって流行した複雑な盛り付けの時代は終わった。だが、特殊な例になるが、古い方法で盛り付けをしなければならない場合もあり、そういう時は何よりもまず、盛り付けにかかる時間と利用できる手段を見積らなくてはならない。土台の形状を犠牲にしくなくても、装飾の繊細さを忘れなくても、風味ゆたかな素材を軽んじたり劣化させてしまっは、価値のないものにしかならないのだ」。

以上の見解はずっと変わっていない。料理は進歩する（社会がそうであるように）。だが常に芸術であり続けるのだ。

例えば、1850 年から人々の生活習慣、習俗が変化したことを皆が認めるにやぶさかでないように、料理もまた変化するのだ。デュボワとベルナールの素晴らしい業績は当時のニーズに応えたものだ。だが、たとえ二人がその著書と同じく永遠の存在であったとしても、彼らが称揚した形態は、料理の知識として、我々の時代の要求に応えうるものではない。

私たちは二人の名著を尊重し、敬愛し、研究しなくてはならない。二人の著書はカレームの著作とともに、我々料理人の仕事の基礎たるものだ。だが、そこに書いてあることを盲目的に真似るのではなく、我々自身で新たな道を切り拓<sup>ひら</sup>き、我々もまたこの時代の習俗や慣習に合わせた教本を残すべきなのだと考える次第である。

1907 年 2 月 1 日

1) 1814 年ナポレオンが退位して国外へ亡命、ルイ 18 世を戴く王政へ回歸した時期。1830 年まで続いたが 7 月革命でブルボン家は断絶し、その後オルレアン朝による七月王政が 1848 年まで続いた。

## 第三版序文

『料理の手引き』第三版を同業たる料理人諸賢に向けて上梓するにあたり、絶えず本書を好意的に支持してくださったことと、多くの方々から著者一同にお寄せくださった励ましのお言葉に対し、あらためて深く御礼申しあげる次第だ。

第二版序文の内容につけ加えるべきことは何もない。というのも、第二版序文で料理という仕事について申しあげたことは、1907年当時も今も変わっていない事実だからだし、今後も長くそうであり続けるだろう。とはいえ、この第三版は内容を精査し、かなりの部分を改訂してある。かつては予測でしかなかったことを実証し、この『料理の手引き』初版の序文においてエスコフィエ氏<sup>1)</sup>が以下のように書かれた約束も果たしたと思う。「本書には五千近くもの<sup>2)</sup>レシピが掲載されているが、それでも私は、この教本が完全だとは思っていない。たとえ今この瞬間に完璧であったとしても、明日にはそうではないかも知れぬ。料理は進化し、新しいレシピが日々創案されているのだ。まことに不都合なことだが、版を重ねる毎に新しい料理を採り入れ、古くなってしまったものは改良を加えねばなるまい。」

この言葉が、前回の第二版から300ページを増やしたことの説明となっているわけで、この新版でいくつかの変更を我々が必要と考えた理由でもある。

1. 判型の変更……あえて判型を大きくすることで、より扱いやすいものとしたこと<sup>3)</sup>
2. 巻末の目次の組みなおし……当初は料理の種類別であったが、本書全体の項目をアルファベット順にまとめたこと<sup>4)</sup>
3. 時代遅れになったと思われるレシピを相当数削除し、その代わりとしてこの数年の間に創案され好評を博したレシピを追加したこと

既に大著であって本書にこれらの変更を加えるために、我々は第二版の巻末に付されていた献立のページを削除せざるを得なかった。

献立についても内容を一新し、多くの献立例を追加して、『メニューの本』という独立した書籍として、この第三版と同時に刊行する予定となっている。この『メニューの本』において我々は献立とその説明文はもちろんのこと、大規模な厨房における日々の業務配分を示す表を入れておいた。

このように別冊とすることで、献立の作成という非常に重要な問題を適切に展開し、ゆとりを持って論じることが可能となったわけだ。

この新刊『メニューの本』は料理人諸賢だけではなくメートルドテル、食事施設の責任者に必携のものとなった。さらには必要なものを奇抜なまでに単純化してしまう家庭の主婦にとっても必携となろう。我々は上記の改良点が、これまで多くの好意的見解をお寄せくださった料理関わる皆様方に、好意的に受け容れていただけると信じている。また、料理芸術の栄光のもと未来に続くモニュメントを建てるべく努めた我々のささやかなる尽力が、料理芸術に利をもたらさんことを信じる次第だ。

1912年5月1日

1) この表現から、第三版序文がエスコフィエ自身ではなく、フィリアス・ジルベールかエミール・フェチュのいずれか、あるいは二人によって書かれたと判断される。

2) 初版において掲載レシピ数は5千に満たなかったため。初版および第二版では「五千近い」の表現となっており、第三版において「五千以上」と表現が変更された。

3) 初版および第二版はいわゆる「八折り版」約21.5cm×13.5cmであったのに対し、第三版は約24cm×16cm、つまり現代のB5版よりほんの少し小さめの判型。

4) 原文ではTable des Matières「目次」とあるが、これは巻頭の章を示す目次のことではなく、巻末の「索引」に相当するものを意味している。残念ながら「索引」としてはあまり使い勝手のよくない不完全なものに留まっている。



## 第四版序文

『料理の手引き』第三版刊行当時（1912年5月）から後、他の職業、産業と同様に料理界もまた大いなる危機に見舞われた<sup>1)</sup>。こんにちもなお料理は厳しい試練にさらされている。しかしながら、料理界はその試練に耐えてきたし、戦後のこの辛い時期に終止符を打ち、料理界がさらに前進し始めるのもさして遠いことではないと信じている。だが、目下のところ、あらゆる食材の異常なまでの高騰により、料理長諸賢が責務を果たすことがひどく難しくなっている。料理長がその責務を果たすということの困難さを経験上よく知っているからこそ、今回の版において我々は、多くのレシピ、とりわけガルニチュールについて、その本質的なところを曲げることなしに、よりシンプルなものにすることにこだわった。

さらに、もはやあまり興味を持たれないであろうレシピは全て削除して、その代わりに近年創案されたレシピを収録することとした。

したがって、料理人諸賢および料理に関心を持つ皆様方に向けてこの『料理の手引き』第四版を上梓するにあたり、旧版同様、皆様に温かく受け容れていただけると信じる次第である<sup>2)</sup>。

1921年1月

### 【参考】盛り付けをシンプルにするということ（初版のみ）

本書では、かつては料理の盛り付けによく用いられた飾り串<sup>3)</sup>、縁飾り<sup>4)</sup>、クルトン<sup>5)</sup>、チョップ花<sup>6)</sup>などを扱う指示がほとんど出てこない。著者としては、盛り付け方法を近代化すると同時に、ほぼ完全に上記のものどもを削除なくしてしまいたいと考えたくらいだ。

我が先達が考えていたような盛り付けには、長所がたったひとつしかない。皿を荘厳に、魅力的な姿にすることで、料理を味わう前に、食べ手の目を楽しませ、喜んでいただくということだ。

だが、そうした盛り付けの作業は複雑で難しいものであり、かなりの時間を必要とする。比較的小人数の宴席でないかぎりでは、こうした盛り付けは事前に用意しておく必要がある。そのようにして作られた料理は、それを置いておく場所のことを考えに入れなくても、必ずといっていい程、冷めてしまっている。また、料理を載せる台や縁飾り、飾り串に費す時間も考えなくてはならないし、そういった装飾にかかる費用も考えなくてはならない。忘れてはならないことだが、そのように装飾した皿の見た目の調和がとれている時間というのは、その皿をお客様にお見せする間だけなのだ。メートルドテルのスプーンが料理に触れるやいなや、かくも無惨な姿となりお客様の目には不快なものとなってしまう。こういう不都合はなんとしても改善しなければならなかったのだ。

ここで図に示すような四角形の皿を採用したことで、上記のような問題は解決したと考えている。この皿はパリのリッツホテルで初めて用いられ、ロンドンのカールトンホテルにおいて正式に採用されることとなったものだ。この皿を用いることの利点は絶大で、これを用いない盛り付けなどもはや考えられない程だ。この皿は場所をとらず、皿の内側に盛り付けられた料理は冷めることがない。蓋との距離が近いから保温されているわけだ。魚や肉の切り身は上に重ねて盛るのではなく、ガルニチュールとともに並べて盛り付けることが出来る。そうすることで、最初に給仕されるお客様から最後に給仕される方まで、料理は美味しそうな見た目を保つことが出来るのだ。その結果、クルトンやチョップ花、皿の上にしつらえる料理を載せる台や縁飾り、飾り

1) 第一次世界大戦（1914～1918）による社会的影響を指している。フランスは戦中から戦後にかけて激しいインフレに見舞われた。なお、この第四版から出版社がそれまでのラール・キュリネールからフラマリオン社に変わった。

2) 原書の文体から、この序文も第三版序文と同様に、ジルベールとフェチュによって書かれた可能性も考えられる。

3) hâtelet アトレ。

4) bordure ボルデュール。

5) 菱形やハート形にしたパンを揚げたもの。

6) papillote パピヨット。紙製で、骨付き肉の先端を飾るもの。

串、昔の給仕で用いられた面倒なクロッシュ<sup>1)</sup>は不要なものとなる。

この皿は冷製料理にもまた便利に使うことが出来る。周囲に氷を積み重ねて囲うか、薄い氷のブロックの上に盛り付ければ、飾りには、ごく繊細なジュレだけでいい。そのような繊細なジュレを使うのは昔の方法では不可能だった。かくして、邪魔にさえ思える飾り台も、皿の底の飾りも、アトレも必要なくなった。ショフロワは1切れずつ並べて、周囲を琥珀色のとろけるようなジュレで満たしてやればいい。ムースはもはや「つなぎ」をまったく、あるいはほとんど必要としない。こういうことが、冷製料理の芸術的な見た目を、豪華さや美しさという点でいっかな失なうことなく可能となるのだ。

この新式の仕器とそれによって実現可能となる料理に習熟することについて料理人諸君にお知らせすることは我々の義務であるとする。利点がとても大きいので、あえて申しあげるが、これを使うことが、給仕を素早く、きれいに、経済的に、そして文句ないまでに実践的なものにする唯一の方法である。

## 【参考】初版はしがき

本書はある特定の階層の料理人を対象としているものではなく、全ての料理人が対象であるため、本書のレシピは、経済的観点や料理人が実際に利用可能な手段に応じて、改変できるものだとすることを述べておきたい。

本書に収められたレシピはすべて、グランドメゾンでの仕事における原則にもとづいて組み立てて調整してある。だから、より格下の店舗などでも、必然的に量を減らせば作れるだろうし、適価で提供出来るようになるだろう。

ひとつひとつの項目において、いろいろな飲食を提供する形態を網羅するようにレシピを書くことが不可能だったということは理解されよう。料理人自身が自主性をもって本書の内容を補えるし、そうすべきなのだ。ある者たちにとって非常に大切なことが、大多数の者にとってはそこそこの興味しか引かず、一般的に見たら無益で幼稚に思われることだってあるのだ。

だから、本書に収録したレシピは最大の分量でまとめられたものを考えるべきであり、必要に応じて、各人の判断および物理的に出来る範囲に合わせて、量を減らして作るといい。

---

1) cloche 主に金属製で半球形の保温を目的としたディッシュカバー。

# I. ソース SAUCES

## フォン、その他のストック

### LES FONDS DE CUISINE

本書は実際に厨房で働く料理人を対象としたものだが、まず最初に料理のベースとして仕込んでストックしておくもの<sup>1)</sup>について少々述べておきたい<sup>2)</sup>。我々料理人にとって重要なものだからだ。

ここで述べる料理のベースとして仕込んでストックしておくものは、実際、料理の土台そのものであり、それなしでは美味しい料理を作ることの出来ない、まず最初に必要なものだ。だからこそ、料理のベースとして仕込んでおくストックはとても重要であり、いい仕事をしたいと努めている料理人ほどこれらを重視している。

これらは、料理において常に立ち戻るべき出発点となるものだが、料理人がいい仕事をしたいと望んでも、才能があっても、それだけでいいものを作ることは出来ない。料理のベースを作るにも材料が必要なのだ。だから、必要な材料は良質のものを自由に使えるようにしなければならない。

筆者としては、むやみな贅沢には反対だが、それと同じくらい、食材コストを抑え過ぎるのも良くないと考えている。そんなことをしては、伸びる筈の才能の芽を摘んでしまうばかりか、意識の高い料理人ならモチベーションの維持すら出来ないだろう。

どんなに優秀な料理人だって、無から何かを作り出すことは不可能だ。期待される結果に対して、素材の質が劣っていたり量が足りないことがあれば、それでも料理人にいい仕事をしろと要求するなど言語道断である。

料理のベースとして仕込んでおくストックに関するの重要ポイントは、必要な材料は質、量ともに充分に、惜しげもなく使えるようにすることだ。

ある調理現場で可能なことが、別の調理現場では不可能な場合があるのは言うまでもない。料理人の仕事内容は顧客層によっても変わる。到達すべき目標によって手段も変わるということだ。

そういう意味で、何事も相対的なものであるとはいえ、こと料理のベースとして仕込んでストックすべきものに関しては絶対に外してはならないポイントがあるわけだ。組織のトップがこの点で出費を惜しんだり、コスト面で過度に目くらまをするようでは、美味しい料理なんて出来るわけがないのだから、現実には厨房を仕切っている料理長を批判する資格もない。そんなのが根拠のない言い掛かりなのは明らかだ。素材の質が悪かったり、量が足りないのであれば、料理長が素晴らしい料理を出せないのは言うまでもあるまい。ぶどうの搾りかすに水を加えて醗酵させた安ワインを立派な瓶に詰めてしまえば高級ワインになると思う程に馬鹿げたことはないのだ。

料理人は、必要なものを何でも使っていえばいいから、料理のベースとして仕込んでおくストックにとりわけ力を入れるべきであり、文句のつけようのない出来るよう気を使うべきだ。そこに手間隙かけていけばそれだけ厨房全体の仕事がきちんと進むのだから、注文を受けた料理をきちんと作れるかどうかは、結局のところ、料理のベースとなる仕込み類にどれだけ手間隙をかけるかということなのだ。

1) 本書での fonds の語は fond (基礎、土台)、fonds (資産、資本)、そして料理用語として一般に用いられている フォン、のトリプルミーニングになっている。そのまま「フォン」と訳したいところだが、日本語の場合「出汁」としての意味合いが強いため、本文中では分りやすさを重視してやや冗長に「料理のベースとして仕込んでストックしておくもの」のように訳している。

2) この部分は経営者に向けて書かれているようにも読めるが、エスコフィエの時代以降、料理人がオーナーシェフとして経営に携わるケースが増えたことを考えると、その先見の明に驚かざるを得ない。

## 主要なフォンとストック

### PRINCIPAUX FONDS DE CUISINE

料理のベースとして仕込んでおくべきものは主として……

- ・ **コンソメ・サンプルとコンソメ・ドゥーブル**
- ・ **茶色いフォン、白いフォン、鶏のフォン、ジビエのフォン、魚のフォン……**これらはとろみを付けたジュ、基本ソースのベースになる
- ・ **フュメ、エッセンス……**派生ソースに用いる
- ・ **グラスドヴィアンド、鶏のグラス、ジビエのグラス**
- ・ **茶色いルー、ブロンドのルー、白いルー**
- ・ **基本ソース……**エスパニョル、ヴルテ、ベシャメル、トマト
- ・ **肉料理用ジュレ、魚料理用ジュレ**

以下も日常的に使う料理のベースとして仕込んでおくものとして扱う。

- ・ **ミルボワ、マティニオン**
- ・ **クールブイヨン、肉および野菜用のブラン**
- ・ **マリナード、ソミュール**
- ・ **肉料理用ファルス、魚料理用ファルス**
- ・ **ガルニチュールに用いるアパレイユ、など……**

本書は上記を順に説明していく構成にはなっていない。グリル、ロースト、グラタン等の調理技法についても順を追っていくわけではない。料理の種類ごとに一定の位置、つまりは関連の深い料理の章の冒頭において説明していくことになる。

そのようなわけで、本書においては以下のようなになる……

- ・ フォン、フュメ、エッセンス、グラス、マリナード、ジュレの説明…… **第1章 ソース**
- ・ コンソメおよびそのクラリフィエ、ポタージュの浮き実についての説明…… **第3章 ポタージュ**
- ・ ファルスとガルニチュール用アパレイユの作り方…… **第2章 ガルニチュール**
- ・ クールブイヨン、魚料理用ファルス等…… **第6章 魚料理**
- ・ グリル、ブレイゼ、ポワレの調理理論…… **第7章 肉料理**

## 基本ソース

### GRANDES SAUCES DE BASE

- ・ およびそれらを組み合わせたり煮詰めるなどの方法で作る派生ソース
- ・ イギリス風ソース（温製および冷製）
- ・ いろいろな冷製ソース
- ・ プール・コンボゼ（ミックスバター）
- ・ マリナード
- ・ ジュレ

## 概説

ソースは料理においてもっとも主要な位置にある。フランス料理が世界に冠たるものであるのもひとえにソースの存在によるのだ。だから、ソースは出来るかぎり手間をかけ、細心の注意を払って作るようにしなければならない。

ソースを作るうえでその基礎となるのが何らかの「ジュ」である<sup>1)</sup>。すなわち、茶色いソースは「茶色いジュ」（エストゥファード）から作る。ヴルテには「澄んだジュ（白いフォン<sup>2)</sup>）を使う。ソースを担当する料理人はまず第一に、完璧なジュを作るところから始めなければならない。キューシー侯爵<sup>3)</sup>が言うように、ソース担当の料理人は「頭脳明晰な化学者<sup>4)</sup>でありかつ天才的なクリエイターで、卓越した料理という建造物のいわば大黒柱たる存在」なのだ。

昔のフランス料理<sup>5)</sup>では、素材に串を刺してあぶり焼きするローストを別にすれば、どんな料理も「ブレゼ」か「エチュヴェ<sup>かなめ</sup>」のようなものばかりだった。だが、その時代には既に、フォンが料理という大建築の丸天井の要だったし、材料コストが重視されるこんにちの我々と比べたら想像も出来ないくらい贅沢に材料を使ってフォンをとっていたのだ。実際、アンヌ・ドートリッシュ<sup>6)</sup>がスペインからルイ 13 世に嫁いだ際に随行してきたスペインの料理人たちによってフランス料理にルーを用いる方法が伝えられたが<sup>7)</sup>、当時はほとんど看過された。ジュそれ自体で充分だったからだ。ところが時代が下り、料理におけるコストの問題が重視されるようになった。ジュはその結果、貧相なものになってしまった。その美味しさを補うものとして、ルーを用いて作るソース・エスパニョルが欠くべからざる存在となった。

ソース・エスパニョルはその完成度の高さゆえに成功をおさめたわけだ。だが、すぐに当初の目的を越えた使い方をされるようになった。19 世紀末には本当にこのソースが必要な場合以外にも使われたわけだ。ソース・エスパニョルの濫用によって、どんな料理も固有の香りのない、全部の風味の混ざりあったのっぺりとした調子のもものばかりになってしまった。

ようやく近年になって、料理の風味がどれも同じようなものであることに批判が集まってきて、

1) ここではジュといわゆるフォンが同じ意味で使われている。

2) 日本の調理現場で「白いフォン」を意味する「フォン・ブラン」は主として鶏のフォンを指すことが多いが、本書で扱われている白いフォンのうち標準的なものは仔牛肉、家禽類をベースとしており、鶏のフォンは別途説明されている。

3) 1767-1841。19 世紀の著名な美食家。著書に『食卓の古典』（1843）がある。料理名にキューシーの名を冠したものも多い。

4) 原文 chimiste。現代は分子ガストロノミーが盛んだが、料理を作る過程で起きる現象や結果を「化学」で説明しようとする試みは少なくともカレームまで遡ることが出来る。茶色いフォンのレシピにおいて言及されるオスマゾームという想像上の物質もその範疇に含まれるだろう。また、化学の前身たる「錬金術」の概念は中世以来いくつかの料理書において散見される。

5) 本書において「昔の料理」と表現される場合は概ね 17、18 世紀末と考えていい。

6) 17 世紀に絶対王政を確立したルイ 14 世の母。

7) ルーがスペインからもたらされたというのは逸話、伝承の域を出ない。

その結果として激しい揺り戻しが起きたのだった。グランドキュージーヌでは、透き通ったような薄い色合いでしかも風味のしっかりした仔牛のフォンが見直されつつある。そのようなわけで、ソース・エスパニョルそれ自体の重要性はだんだん減っていくだろうと思われる。

ソース・エスパニョルが基本ソースとして扱われるべき理由は何か？ ソース・エスパニョルそれ自体に固有の色合いや風味というものはなく、これらはどんなフォンを用いて作るかで決まる。まさにこの点にソース・エスパニョルの長所が存するのだ。補助材料としてルーを加えるが、ルーにはとろみを付けるという意味しかなく、風味にはまったく寄与しない。そもそも、ソースを完璧に仕上げるためには、とろみ以外のルーに含まれる成分はソースからほぼ完全に取り除いてしまっても差し支えはない。不純物を丁寧に取り除いたソースにはルーに含まれていたでんぷん質だけが残っているわけだ。だから、ソースの口あたりを滑らかなものにするために必要なのがでんぷん質だけなら、純粋なでんぷんだけを用いる方がずっと簡単で、作業時間も大幅に短縮されるし、その結果として、ソースを火にかけ過ぎてしまうようなミスも防げる。将来的には、小麦粉ではなく純粋なでんぷんでルーを作るようになるかも知れない。

料理界の現状を鑑みるに、ソース・エスパニョルととろみを付けたジュをそれぞれ使い分けざるを得ない。これにはさまざまな理由があるが、大きな仕立てのプレゼや、羊や仔羊以外を材料にしたラグーでは、肉汁が煮汁に染み出してきて美味しくなるわけだから、トマトを加えたソース・エスパニョルを用いるのがいい。なお、ソース・エスパニョルをさらに丁寧に仕上げるとソース・ドゥミグラスとなる。これはいろいろなソテーに不可欠なもので、今後も変わることはないだろう。

一方、牛や羊、家禽を使った繊細で軽い仕立ての料理にはとろみを付けたジュの方が好まれる。デグラセの際に少量だけ、料理の主素材と同じものからとったジュを用いる。

こんにちのフランス料理においては、肉とソースの調和がとれているべきという、まことに理に適った厳守すべき決まりがある。

だから、ジビエ料理にはジビエのフォンを用いるか、とりたてて際立った個性を持たないフォンを用いて作ったソースを添える。牛や羊のフォンは用いない。ジビエのフォンというのは、さほど濃厚なものを作ることは出来ないが、素材の個性的な風味を表現するには最適だ。こういった事情は魚料理にも当て嵌る。ソースそれ自体が際立った風味を持たないもの場合には必ず魚のフュメを加えてやるのだ。このようにしてそれぞれの料理に個性的な風味を実現させることになる。

もちろん、ここまで述べた原則を実現しようにも、コストの問題がしばしば起こることは承知している。けれども、熱意のある、他者の評価を意識している料理人なら問題点を熟考して、完璧とは言わぬまでも満足のいく結果を得ることが出来るだろう。



## ソースのベース作り

### TRAITEMENT DES ÉLÉMENTS DE BASE DANS LE TRAVAIL DES SAUCES

#### 茶色いフォン (エストウファード) FONDS BRUN OU ESTOUFFADE

(仕上がり 10L 分)

- ・ **主素材**……牛すね 6kg、仔牛のすね 6kg または仔牛の端肉で脂身を含まないもの 6kg、骨付きハムのすねの部分 1 本（前もって下茹でしておくこと）、塩漬けていない豚皮を下茹でしたもの 650g。
- ・ **香味素材**……にんじん 650g、玉ねぎ 650g、ブーケガルニ（パセリの枝 100g、タイム 10g、ローリエ 5g、にんにく 1 片）。
- ・ **作業手順**……肉を骨から外す。

骨は細かく砕き、オーブンに入れて軽く焼き色を付ける。野菜は焼き色が付くまで炒める。これらを鍋に入れて 14L の水を注ぎ、ゆっくりと、最低 12 時間煮込む。水位が下がらぬように、適宜沸騰した湯を足すこと。

大きめのさいの目に切った牛すね肉を別鍋で焼き色が付くまで炒める。先に煮込んでいたフォンを少量加えて煮詰める。この作業を 2〜3 回行ない、フォンの残りを注ぐ。

鍋を沸騰させて、浮いてくる泡を取り除く。浮き脂も丁寧に取り除く。蓋をして弱火で完全に火が通るまで煮込んだら、布で漉してストックしておく。

【原注】フォンの材料に牛の骨などが含まれている場合には、事前にその骨だけで 12〜15 時間かけてとろ火でフォンをとるといい。  
フォンの材料を鍋に焦げ付くくらいまで強く焼き色を付ける<sup>1)</sup>のはよろしくない。経験からいって、丁度いい色合いのフォンに仕上げるには、肉に含まれているオスマゾーム<sup>2)</sup>の働きだけで充分。

#### 白いフォン

##### FONDS BLANC ORDINAIRE

(仕上がり 10L 分)

- ・ **主素材**……仔牛のすね、および端肉 10kg、鶏の手羽とさか、足など、または鶏がら 4 羽分、
- ・ **香味素材**……にんじん 800g、玉ねぎ 400g、ポワロ 300g、セロリ 100g、ブーケガルニ（パセリの枝 100g、タイム 1 枝、ローリエの葉 1 枚、クローブ 4 本）。
- ・ **使用する液体と味付け**……水 12L、塩 60g。
- ・ **作業手順**……肉は骨を外し、紐で縛る。骨は細か

く砕く。鍋に肉と骨を入れ、水を注ぎ塩を加える。火にかけ、浮いてくるアクを取り除き香味素材を加える。

- ・ **加熱時間**……弱火で 3 時間。

【原注】このフォンは火加減を抑えて、出来るだけ澄んだ仕上がりにすること。アクや浮き脂は丁寧に取り除くこと。

茶色いフォンの場合と同様に、始めに細かく砕いた骨だけを煮てから指定量の水を注ぎ、弱火で 5 時間煮る方法もある。

この骨を煮た汁で肉を煮るわけだ。その作業内容は上記茶色いフォンの場合と同様。この方法は、骨からゼラチン質を完全に抽出出来るという利点がある。当然のことだが、煮ている間に蒸発して失われてしまった分は湯を足してやり、全体重量を 12L にしてから肉を煮ること。

#### 鶏のフォン (フォンドヴォライユ)

##### FONDS DE VOLAILLE

白いフォンと同じ主素材、香味素材、水の量で、さらに鶏のとさかや手羽、ガラを適宜増量し、廃鶏 3 羽を加えて作る。

#### 仔牛の茶色いフォン (仔牛の茶色いジュ)

##### FONDS, OU JUS DE VEAU BRUN

(仕上がり 10L 分)

- ・ **主素材**……骨を取り除いた仔牛のすね肉と肩肉（紐で縛っておく）6kg、細かく砕いた仔牛の骨 5kg。
- ・ **香味素材**……にんじん 600g、玉ねぎ 400g、パセリの枝 100g、ローリエの葉 2 枚、タイム 2 枝。
- ・ **使用する液体**……白いフォンまたは水 12L。水を用いる場合は 1L あたり 3g の塩を加える。
- ・ **作業手順**……厚手の片手鍋または寸胴鍋の底に輪切りにしたにんじんと玉ねぎを敷きつめる。その他の香味素材と、あらかじめオーブンで焼き色を付けておいた骨と肉を鍋に加える。  
蓋をして約 10 分間、蓋をして弱火にかけた野菜から水分が汗をかくように出るイメージで蒸し焼き状態にし、素材の味を引き出す<sup>3)</sup>。フォンまたは水少量を加え、煮詰める。この作業をさらに 1〜2 回行なう。残りのフォンまたは水を注ぎ、蓋をし、沸騰させる。アクを丁寧に取り。微沸騰の状態で 6 時間煮る。  
布で漉し、ストックしておく。使用目的や必要に応

1) バンセ pincer と呼ばれる手法。原義は「抓む」。材料が鍋底に張り付いて、トンクなどでしっかり「抓ま」ないと取れないくらい強く焼き付けることからそう呼ばれるようになった。古い料理書では推奨するものも多かった。

2) 19 世紀頃、赤身肉の美味しさの本質であると考えられていた想像上の物質。赤褐色をした窒素化合物の一種で水に溶ける性質があるとされた。なお、当時のヨーロッパではグルタミン酸はもとよりイノシン酸が「うま味」の要素であるという概念すらなく、「コクがある」corsé とか「肉汁たっぷり」onctueux や succulent などの表現で肉料理やソースの美味しさが表現された。

3) suer スュエ、シュエ。

じて、さらに煮詰めてからストックしてもいい。

### ジビエのフォン FONDS DE GIBIER

(仕上がり 5L 分)

- ・ **主素材**……ノロ鹿の頸、胸肉および端肉 3kg (老いたノロ鹿がいいが、新鮮なものを使うこと)、野うさぎの端肉 1kg、老うさぎ 2羽、山うずら 2羽、老きじ 1羽。
- ・ **香味素材**……にんじん 250g、玉ねぎ 250g、セージ 1枝、ジュンバーベリー<sup>1)</sup> 15粒、標準的なブーケガルニ。
- ・ **使用する液体**……水 6L および白ワイン 1瓶。
- ・ **加熱時間**……3時間。
- ・ **作業手順**……ジビエは事前にオープンで焼き色を付けておき、野菜と香草を敷き詰めた鍋に入れる。野菜類も事前に焼き色を付けておくこと。ジビエを焼くのに用いた天板を白ワインでデグラセし、これを鍋に注ぐ。同量の水も加え、ほぼ水分がなくなるまで煮詰める。この作業の後で、残りの水全量を注ぎ、沸騰させる。丁寧にアクを引きながらごく弱火で煮る<sup>2)</sup>。

### 魚のフュメ<sup>3)</sup> (フュメドボワソン) FONDS, OU FUMET DE POISSON

(仕上がり 10L 分)

- ・ **主素材**……舌びらめ、メルラン<sup>4)</sup>やバルビュ<sup>5)</sup>のあら 10kg。
- ・ **香味素材**……薄切りにした玉ねぎ 500g、パセリの根<sup>6)</sup>と茎 100g、マッシュルームの切りくず 250g、レモンの搾り汁 1個分、粒こしょう 15g (これはフュメを漉す 10分前に投入する)。
- ・ **使用する液体と調味料**……水 10L、白ワイン 1瓶。液体 1L あたり 3〜4g の塩。
- ・ **加熱時間**……30分。
- ・ **作業手順**……鍋底に香味野菜を敷き詰め、魚のあらを入れる。水と白ワインを注ぎ、強火にかける。丁寧にアクを引き、微沸騰の状態を保つようにする。30分煮たら目の細かい網で漉す。

【原注】 質の悪い白ワインを使うと灰色がかったフュメになってしまう。品質の疑わしいワインは使わないほうがいい。

このフュメはソースを作る際に加える液体として用いる。魚料理用ソース・エスパニョールを作ることをご想定する場合には、魚のあらをバターでエチューベしてから水と白ワインを注いで煮るといい。

### 赤ワインを用いた魚のフォン FONDS DE POISSON AU VIN ROUGE

このフォンそれ自体を用意することは滅多にない。というのも、例えばマトロットのような料理の魚の煮汁そのものだからだ。

とはいえ、こんにちでは魚のアラをすっかり取り除いた状態で料理を提供する必要がある。だが、どんな種類の魚を使う場合でも作り方は同じだ。

原則として、このフォンの仕込みには、料理として提供するので同じ種類の魚のアラを用いて、その香りの特徴を生かす必要がある。だが、どんな種類の魚を使う場合でも作り方は同じだ。

(仕上がり 5L 分)

- ・ **主素材**……料理に用いるのと同じ魚種の頭とアラ 2.5kg。
  - ・ **香味素材**……薄切りにして下茹でした玉ねぎ 300g、パセリの枝 100g、タイムの小枝 1本、小さめのローリエの葉 2枚、にんにく 5片、マッシュルームの切りくず 100g。
  - ・ **使用する液体と調味料**……水 3.5L、良質の赤ワイン 2L、塩 15g。
  - ・ **加熱時間**……30分。
  - ・ **作業手順**……「魚の白いフォン<sup>7)</sup>」と同様にする。
- 【原注】 このフォンは魚の白いフォンよりも濃く煮詰めることが可能。とはいえ、保存のために煮詰めないでいいように、その都度、必要な量だけ仕込むことを勧める。

### 魚のエッセンス ESSENCE DE POISSON

- ・ **主素材**……メルラン<sup>8)</sup>および舌びらめの頭、アラ 2kg。
- ・ **香味素材**……薄切りにした玉ねぎ 125g、マッシュルームの切りくず 300g、パセリの枝 50g、レモンの搾り汁 1個分。
- ・ **使用する液体**……煮詰めていないフュメドボワソン<sup>1)</sup> 2L、良質の白ワイン 3dL。
- ・ **所要時間**……45分。
- ・ **作業手順**……鍋にバター 100g と玉ねぎ、パセリの枝、マッシュルームの切りくずを入れ、強火で色づかないようさっと炒める。蓋をして約 15 分弱火で蒸し煮する<sup>9)</sup>。その間、小まめに混ぜてやること。白ワインを注ぎ、半量になるまで煮詰める。最後にフュ

1) セイヨウネズノ樹の実。

2) 最後に布で漉す必要があるが、当然のこととして明記されていないので注意。

3) 本質的には前出の「フォン」と同様のものだが、魚(およびジビエ)を素材としたフォンは香りがポイントとなるため、フュメ fumet (香氣、良い香りの意)の名称のほうが一般的に使われている。

4) タラの近縁種。

5) ヒラメの近縁種。

6) パセリには根がにんじん形に肥大する品種もある (persil tubéreux 根パセリ)。葉は平らでイタリアンパセリのように使う。

7) 前項のフュメドボワソンのこと。

8) タラの近縁種。

9) 素材を入れた鍋に蓋をして弱火にかけ、少量の水分で蒸し煮状態にすることを étuver エチューベという。このフランス語をそのまま用いている調理現場も少なくない。

メドボワソンを注ぎ、レモン汁と塩 2g を加える。  
再び火にかけて、とろ火で 15 分程煮込んだら、布で漉す。

【**濃注**】魚のエッセンスは、舌びらめやチュルボ、チュルボタン、パルビュ<sup>1)</sup>などのフィレ<sup>2)</sup>をポシェする際に用いる。

さらに、このエッセンスを煮詰めて、上記でポシェした魚のソースに加えて風味を強くするのに使う。

## エッセンスについて ESSENCES DIVERSES

その名のとおり、エッセンスとはごく少量になるまで煮詰めて非常に強い風味を持たせたフォンのこと。エッセンスは普通のフォンと本質的には同じものだが、素材の風味をしっかり出すために、使用する液体の量はずっと少ない。したがって、仕上げにエッセンスを加える指示がある料理の場合でも、そもそも十分に風味ゆたかなフォンを用いていれば、エッセンスは必要ないことが分かるだろう。

まず最初に、美味しく風味ゆたかなフォンを用いるほうが、あまり出来のよくないフォンで調理し、後からエッセンスで欠点を補うよりもずっと簡単なのだ。その方がいい結果が得られるし、時間と材料の節約にもなる。

セロリ、マッシュルーム、モリユ<sup>3)</sup>、トリュフなど、とりわけ明確な風味の素材のエッセンスを、必要に応じて用いるにとどめるのがいい。

また、十中八九、フォンを仕込む際に素材そのものを加えた方が、エッセンスを仕込むよりもいい結果が得られることは頭に入れておくこと。

そのようなわけで、エッセンスについてこれ以上長々と述べる必要もないと思われる。ベースとなるフォンがコクと風味がゆたかなものならであるなら、エッセンスはまったく無用の長物と言える。

## グラスについて GLACES DIVERSES

グラスドヴィアンド、鶏のグラス（グラスドヴォライユ）、ジビエのジビエ、魚のグラスの用途は多岐にわたる。これらは、上記いずれかの素材でとったフォンをシロップ状になるまで煮詰めたもののことだ。これらの使い途は、料理の仕上げに表面に塗ってしっとりとした艶を出させるのに用いる場合もある。ソースの味や色合いを濃くするために用いたり、あるいは、あまりに出来のよくないフォンで作った料理の場合にはコクを与えるために使うこともある。また、料理によっては適量のバターやクリームを加えてグラスそのものをソースとして用いることもある。

グラスとエッセンスの違いだが、エッセンスが料理の風味そのものを強くすることだけが目的であるのに対して、グラスは素材の持つコクと風味をごく少

量にまで濃縮したものだ。

だからほとんどの場合、エッセンスよりもグラスを使うほうがいい。

とはいえ昔の料理長たちの中には、グラスの使用を絶対に認めない者もいた。その理由は、料理を作る度に毎回その料理のためのフォンをとるべきであり、それだけで料理として充分なものにすべき、ということだった。

確かに時間と費用の点で制限がなければその理屈は正しい。だが、こんにちでは、そのようなことの出来る調理現場はほとんどない。そもそもグラスは、正しく適量を用いるのであれば、そのグラスが丁寧に作られたものであるなら、素晴らしい結果が得られる。だから多くの場合、グラスはまことに有用なものと言える。

## グラスドヴィアンド GLACE DE VIANDE

茶色いフォン（エスツッファード）を煮詰めて作る。煮詰めて濃くなっていく途中、何度か布で漉して、より小さな鍋に移しかえていく。煮詰めている際に、丁寧にアクを引くことが、澄んだグラスを作るポイント。

煮詰めている際には、フォンの濃縮具合に応じて、火加減を弱めていくこと。最初は強火でいいが、作業の最後の方は弱火にしてゆっくり煮詰めてやること。

スプーンを入れてみて、引き上げた際に、艶のあるグラスの層でスプーンが覆われ、しっかり張り付いているくらいが丁度いい。要するに、スプーンがグラスでコーティングされた状態になればいいということだ。

【**原注**】色が薄くて軽い仕上りのグラスが必要な場合には、茶色いフォンではなく、標準的な仔牛のフォンを用いる。

## 鶏のグラス（グラスドヴォライユ） GLACE DE VOLAILLE

\index{くらす@グラス!うおらいゆ@ドヴォライユ  
鶏のフォン（フォンドヴォライユ）を用いて、グラスドヴィアンドと同様にして作る。

## ジビエのグラス GLACE DE GIBIER

ジビエのフォンを煮詰めて作る。ある特定のジビエの風味を生かしたグラスを作るには、そのジビエだけでとったフォンを用いること。

## 魚のグラス GLACE DE POISSON

このグラスを用いることはあまり多くない。日常的な業務においては「魚のエッセンス」を用いることが好まれる。そのほうが魚の風味も繊細になる。魚のエッセンスで魚をポシェした後に煮詰めてソースに加える。

1) いずれも鱈、ひらめの近縁種。チュルボタンはチュルボの小さいものを言う。

2) 3 枚おろし、または 5 枚おろしにして、頭とアラを取り除いた状態。

3) morille キノコ的一种。和名アマガサタケ。

## ルー

### Roux

ルーはいろいろな派生ソースのベースとなる基本ソースにとろみを付ける役目を持つ。ルーの仕込みは、一見したところさほど重要に思われぬだろうが、実際には正反対だ。丁寧に注意深く作業すること。

茶色いルーは加熱に時間がかかるので、大規模な調理現場では前もって仕込んでおく。ブロンドのルーと白いルーはその都度用意すればいい。

#### 茶色いルー

##### ROUX BRUN

(仕上がり 1kg 分)

1. 澄ましバター……500g
2. ふるった小麦粉……600g

**ルーの火入れについて**……加熱時間は使用する熱源の強さで変わってくる。だから数字で何分とは言えない。ただし、火力が強過ぎるよりは弱いくらいの方がいい。というのも、温度が高すぎると小麦粉の細胞が硬化して中身を閉じ込めてしまい、そうなることでフォンなどの液体を加えた際に上手く混ざらず、滑らかなとろみの付いたソースにならない。乾燥豆をいきなり熱湯で茹でると同じようなことが起きるわけだ。低い温度から始めてだんだんと熱くしていけば、小麦粉の細胞壁がゆるんで細胞中のでんぶが膨張し、熱によって発酵状態の初期のようになる。このようにして、でんぶをデキストリンに変化させる<sup>1)</sup>。デキストリンは水溶性の物質で、これが「とろみ」の主な要素なのだ。茶色いルーは淡褐色の美しい色合いで滑らかな仕上りにする。だがあってはいけな

い。ルーを作る際には必ず、澄ましバターを使うこと<sup>2)</sup>。生のバターには相当量のカゼインが含まれている。カゼインがあると火を均質に通すことが出来なくなってしまう。とはいえ、以下を覚えておくといい。ソースとして仕上げた段階で、ルーで使ったバターは風味という点でほとんど意味が失なわれている。そもそもソースの仕上げに不純物を取り除く<sup>3)</sup>段階でバターも完全に取り除かれてしまうわけだ。だからルーに用いるバターは小麦粉に熱を通すため

だけのものと考えていい。

ルーはソース作りの出発点だ。だから次の点も記憶に留めること。小麦粉にでんぶが含まれているからこそソースに「とろみ」が付く。だから純粋なでんぶ（特性が小麦のでんぶと同じでも異なったものでも）でルーを作っても、小麦粉の場合と同様の結果が得られるだろう。ただしその場合は小麦粉でルーを作る場合より注意して作業する必要がある。また、小麦粉と違って余計な物質が含まれていないために、全体の分量比率を考え直すことになる。

【原注】本文中で述べたように、茶色いルーを作る際には澄ましバターを用いる。他の動物性油脂はよほど経済的事情が逼迫していない限り使わないこと。材料コストが問題になる場合でも、ソースの仕上げに不純物を取り除く際に多少の注意を払えば、ルーに用いたバターを回収するのはさして難しいことではない。それを後で他の用途で使えばいいだろう。

#### ブロンドのルー

##### ROUX BLOND

(仕上がり 1kg 分)

材料の比率は茶色いルーと同じ。すなわちバター 500g と、ふるった小麦粉 600g。  
火入れは、ルーがほんのりブロンド色になるまで、ごく弱火で行なう。

#### 白いルー

##### ROUX BLANC

500g のバターと、ふるった小麦粉 600g。

このルーの火入れは数分、つまり粉っぽさがなくなるまでの時間でいい。

1) 現代の科学的見地からすると必ずしも正確な記述ではないので注意。

2) 初版～第三版では「澄ましバターまたは十分に澄ましたグレスドマルミット」となっている。グレスドマルミットとは、コンソメなどを作る際に、浮いてくる油脂を取り除く必要があるが、それを捨てずにまとめてから漉して澄ませたもののこと。基本的に獣脂と考えていい。なお、同時代の料理書—例えばベラブラ『近代料理技術』(1935年)—には、ルーを作るのにバターを使う必要はなく、グレスドマルミットで充分、としているものもある。

3) *dépouiller* デブイエ。ソースや煮込み料理を仕上げる際に、浮き上がってくる不純物を徹底的に取り除き、目の細かい布などで濾すこと。現代では品種改良や農法の変化によって野菜のアクも少なくなり、小麦粉も精製度の高いものを利用出来ると、食材および調味料の多くで純度の高いものを使用する場合はほとんどであり、このデブイエという作業は 20 世紀後半にはほとんど行なわれなくなった。

## 基本ソース

### GRANDES SAUCES DE BASE

#### ソース・エスパニョル<sup>1)</sup>

##### SAUCE ESPAGNOLE

(仕上がり 5 L 分)

- ・ とうもろ付けのためのルー……625g。
- ・ 茶色いフォン（ソースを仕上げるのに必要な量）……12L。
- ・ ミルポワ<sup>2)</sup>（香味素材）……小さなさいの目に切った塩漬け豚ばら肉 150g、2mm 程度のさいの目<sup>3)</sup>に切ったにんじん 250g と玉ねぎ 150g、タイム 2 枝、ローリエの葉 2 枝。
- ・ 作業手順

1. フォン 8L を鍋で沸かす。あらかじめ柔らかくしておいたルーを加え、木杓子か泡立て器で混ぜながら沸騰させる。  
弱火にして<sup>4)</sup>微沸騰の状態を保つ。
2. 以下のようにしてあらかじめ用意しておいたミルポワを投入する。ソテー鍋に塩漬け豚ばら肉を入れて火にかけて脂を溶かす。そこに、細かく刻んだにんじんと玉ねぎ、タイム、ローリエの葉を加える。野菜が軽く色づくまで強火で炒める。丁寧に、余分な脂を捨てて。これをソースに加える。野菜を炒めたソテー鍋に白ワイン約 100ml を加えてデグラセし、それを半量まで煮詰める。これも同様にソースの鍋に加える。こまめに浮いてくる夾雑物を徹底的に取

り除き<sup>5)</sup>ながら弱火で約 1 時間煮込む。

3. ソースをシノワ<sup>6)</sup>で、ミルポワ野菜を軽く押しながら漉し、別の片手鍋に移す。フォン 2L を注ぎ足す。さらに二時間、微沸騰の状態を保ちながら煮込む。その後、陶製の鍋に移し、ゆっくり混ぜながら冷ます。
4. 翌日、再び厚手の片手鍋に移してから、フォン 2L とトマトビュレ 1L または同等の生のトマトつまり 2kg を加える。

トマトビュレを用いる場合は、あらかじめオープンでほとんど茶色になるまで焼いておくといい。そうするとトマトビュレの酸味を抜くことが出来る。そうすればソースを澄ませる作業が楽になるし、ソースの色合いも温かそうで美しいものになる。ソースをへうか泡立て器で混ぜながら強火で沸騰させる。弱火にして 1 時間微沸騰の状態を保つ。最後に、表面に浮いている不純物を、細心の注意を払いながら徹底的に取り除く。布で漉し、完全に冷めるまで、ゆっくり混ぜ続けること。

【原注】ソース・エスパニョルで仕上げに不純物を取り除くのにかかる時間はいちがいには言えない。これは、ソースに用いるフォンの質次第で変わるからだ。

ソースにするフォンが上質なものであればある程、

- 1) 「スペイン（風）」の意だが、スペイン料理起源というわけではない。スペインを想起させるトマトを使うから、あるいは、ソースが茶褐色なのがムア系スペイン人を想起させるから、など諸説ある。  
カレーム『19 世紀フランス料理』第 3 巻に収められたソース・エスパニョルの作り方は、フォンをとるところから始まり 4 ページにわたって詳細なものとなっている（pp.8-11）。  
その中で、肉を入れた鍋に少量のブイオンを注いで煮詰めることを繰り返す。ここまでは 18 世紀の料理書で一般的な手法であるが、その後大量のブイオンを注いだ後、いきなり強火にかけるのではなく、弱火で加熱していくやり方を「スペイン式の方法」と述べている。カレームにおいては、これがソースの名称の根拠のひとつになっていると考えていいだろう。もちろん、ソース・エスパニョルという名称のソースはカレーム以前からあり、1806 年刊のヴィアール『帝国料理の本』にもカレームのレシピより簡単ではあるがほぼ同様のものが基本ソースとして採り上げられている。  
また、それ以前にもソース・エスパニョルに類する名称のソースはあったが、たとえば 1739 年刊ムノン『新料理研究』第 2 巻にある「スペイン風ソース」はかなり趣きが異なる（コリアンダーひと把みを加えるのが特徴的）。同じ料理名でも時代や料理書の著者によってまったく違う料理になっていることは、食文化史において珍しいことではない。エスコフィエにおけるソース・エスパニョルの源流は 19 世紀初頭のヴィアールからと捉えていいだろう。
- 2) mirepoix ミルポワ。ソースやフォンにコクを与える目的で、細かきさいの目に切った香味野菜や塩漬け豚ばら肉を合わせたもの。18 世紀にミルポワ公爵の料理人が考案したという説が有力。同様のものにマティニョン matignon があるが、ミルポワより大きめのさいの目に切るのが一般的とされるが、調理現場によってはあまり区別せずミルポワとのみ呼称するケースも多い。
- 3) brunoise ブリュノワーズ。1~2 mm のさいの目に切る。couper en mirepoix ミルポワに切るとも言う。
- 4) 原文から直訳すると「鍋を火の脇に置く」だが、現代の調理環境では単純に「弱火にする」と解釈している。
- 5) 原文 dépouiller デブイエ。もともとは動物などの皮を剥ぐ、剥くことの意で、野うさぎの皮を剥ぐ、うなぎの皮を剥く、という意味で用いる。ソースの場合は表面に凝固した蛋白質や油脂の膜が出来、それを「剥くように」取り除くことから、あるいは表面に浮いてくる不純物を徹底的に取り除いてきれいなソースに仕上げることを、動物の皮を剥いてきれいな身だけにすることになぞらえて、この用語が用いられるようになったようだ。現代の調理現場では écumer エキュメ、すなわち浮いてくる泡、アクを取る、という用語だけで済ませていることも多い。なお、本書において écumer が単に浮いてくる泡やアクを取る、という作業であるのに対して、dépouiller は「徹底的に不純物を取り除いて美しく仕上げる」という意味合いが込められている。
- 6) 小さな穴が多く空けられた円錐形で、取っ手の付いた漉し器の一種。金属製のものが主流。



仕上げに不純物を取り除く作業は早く済む。そういう場合には、ソース・エスパニョルを5時間で作ることも無理ではない。

### 魚料理用<sup>1)</sup>ソース・エスパニョル SAUCE ESPAGNOLE MAIGRE

(仕上がり 5L 分)

- ・ バターを用いて<sup>2)</sup>作ったルー……500g。
- ・ 魚のフュメ (フュメドボワソン) (ソースを仕上げるために必要な全量) ……10L。
- ・ ミルボワ……標準的なソース・エスパニョルと同じ [ミルボワ] 野菜を同量と、塩漬豚ばら肉の代わりにバターを用い、マッシュルームまたはマッシュルームの切りくず 250g を加える。
- ・ 作業手順……標準的なソース・エスパニョルとまったく同様に作る。
- ・ 加熱時間と不純物を取り除くのに必要な時間……5 時間。

仕上げに漉してから、標準的なソース・エスパニョルとまったく同様に、完全に冷めるまでゆっくり混ぜ続けること。

**魚料理用ソース・エスパニョル補足** このソースを日常的な料理のベースとなる仕込みに含めるかどうかについては意見が分れるところだ。

普通のソース・エスパニョルは、つまるところ風味の点ではほとんどニュートラルなものだから、それに魚のフュメを加えれば、魚料理用ソース・エスパニョルとして充分に通用するだろう。どうしても上で挙げた魚料理用ソース・エスパニョルが必要になるのは、宗教的に厳格に小斎の決まりを守って料理を作る場合のみで、さすがにその場合は代用品などない。

### ソース・ドゥミグラス<sup>3)</sup> SAUCE DEMI-GLACE

一般に「ドゥミグラス」と呼ばれているものは、いったん仕上がったソース・エスパニョルをさらに、も

うこれ以上は無理という位に徹底的に不純物を取り除いたもののことだ。

最後の仕上げに**グラスドヴィアンド**などを加える。風味付けに何らかのワインを加えれば、当然ながらソースの性格も変わるので、最終的な使い途に応じて決めること。

【原注】ソースの色合いを決めるワインを仕上げる際には、「火から外して」行なうこと。沸騰しているとワインの香りがとんでしまうからだ。

### とろみを付けた仔牛のジュ JUS DE VEAU LIE

(仕上がり 1L 分)

- ・ 仔牛のフォン……仔牛の茶色いフォン 4L。
- ・ とろみ付け材料……アロールート<sup>4)</sup> 30g。
- ・ 作業手順……よく澄んだ仔牛のフォン 4L を強火にかけ、1/4 量つまり 1L になるまで煮詰める。大さじ数杯分の冷たいフォンでアロールートを溶く。これを沸騰している鍋に加える。1 分程度だけ火にかけ続けたら、布で漉す。

【原注】この、とろみを付けた仔牛のジュは、本書では頻繁に使う指示をしているが、必ず、しっかりと味で透き通った、きれいな薄茶色に仕上げること。

### ヴルテ<sup>5)</sup> (標準的な白いソース) VELOUTE OU SAUCE BLANCHE GRASSE

(仕上がり 5L 分)

- ・ とろみ付けの材料……バターを用いて作った<sup>6)</sup>ブロードのルー 625g。
- ・ よく澄んだ仔牛の白いフォン……5L。
- ・ 作業手順……ルーをフォンに溶かし込む。フォンは冷たくても熱くてもいいが、フォンが熱い場合にはソースが充分なめらかになるよう注意して溶かすこと。混ぜながら沸騰させる。微沸騰の状態を保ちながら、浮いてくる不純物を完全に取り除いていく<sup>7)</sup>。この作業はとりわけ細心の注意を払って行なうこと。

1) フランス語のソース名にある *maigre* はこの場合、一般的に「魚用、魚料理用」と訳すが、厳密には「小斎の際の料理用」となる。小斎とは、カトリックで古くから特定の期間、曜日に肉類を断つ食事をする宗教的食習慣。日本の「お精進」とニュアンスは近いが、小斎においては忌避されるのは鳥獣肉のみであり、魚介や乳製品はいいとされた。こじつけのように、水鳥は水のものでから魚介扱いであり、またイルカも魚類として扱われていた。小斎が行なわれるのは復活祭の前 46 日間 (四旬節、逆に言えばカーニバルの最終日マルディグラの翌日から 46 日) と、週に一度 (多くの場合は金曜) であった。合計すると小斎が行なわれるのは年間 100 日近くもあり、中世から 18 世紀の料理人たちは小斎の宴席に供する料理に工夫を凝らしていた。この習慣は 19 世紀になるとだんだん廃れていき、エスコフィエの時代には、料理人に対して小斎のための料理を要求することは少なくなっていた。

2) 初版～第三版にかけては、茶色いルーを作るのに「バターまたは、きれいなグレスドマルミット (コンソメなどを作る際に表面に浮いてくる脂をすくい取って、不純物を漉し取ったものであり、基本的に獣脂) を用いる、とある。上述のように、カトリックにおける「小斎」の場合、獣脂は忌避されたがバターなどの乳製品は許容された。そのため特に「バターを用いて作ったルー」という指定がなされ、第四版では茶色いルーに澄ましバターのみを使う旨が強調されたが、ここでは初版以来の記述がそのまま残っているために、やや冗長に思われる表現となっている。

3) 日本の洋食などで一般的な「デミグラス」とはかなり異なる仕上りのソースであることに注意。ソース・エスパニョルの仕上げにあたって、徹底的に不純物を取り除くことを何度も強調しているのは、透き通った茶色がかった色合いの、なめらかなソースを目指すからであり、それをさらに徹底させるということは、透明度、なめらかさの面でさらに徹底させることを意味するからだ。

4) *allow-root* 南米産のクズウコンを原料とした良質のでんぷん。日本では入手が難しいこともあり、コーンスターチが用いられることが多い

5) *velouté* 原義は「ピロードのように柔らかな、なめらかな」。日本ではベシャメルソースと混同されやすいが、内容がまったく異なるソースなので注意。

6) 魚料理用ソース・エスパニョル、訳注参照。

7) デブイエのこと。ソース・エスパニョル、訳注参照。



- ・ **加熱時間と不純物を取り除く作業に必要な時間**……1時間半。  
その後、ヴルテを布で漉す<sup>1)</sup>。陶製の鍋に移してゆっくり混ぜながら完全に冷ます。

## 鶏のヴルテ

### VELOUTE DE VOLAILLE

このヴルテの作り方が、上述の標準的なヴルテと、材料比率と作業はまったく同じ。使用する液体として鶏の白いフォン（フォンドヴォライユ）を使う。

## 魚料理用ヴルテ

### VELOUTE DE POISSON

ルと液体の分量は標準的なヴルテとまったく同じだが、仔牛のフォンではなく魚のフュメを用いて作る。  
ただし、魚を素材として用いるストックはどれもそうだが、手早く作業すること。不純物を取り除く作業も 20 分程度にとどめること。その後、布で漉し、陶製の鍋に移してゆっくり混ぜながら完全に冷ます。

## ソース・アルマンド（パリ風ソース<sup>2)</sup>）

### SAUCE PARISIENNE (ex-Allemande)

（仕上がり 1L 分）

標準的なヴルテに卵黄でとろみを付けたソース。

- ・ **標準的なヴルテ**……1L。
- ・ **追加素材**……卵黄 5 個、白いフォン（冷たいもの）1/2L、粗く砕いたこしょう 1 ひとつまみ、すりおろしたナツメグ少々、マッシュルームの煮汁 2dl、レモン汁少々。
- ・ **作業手順**……厚手のソテー鍋にマッシュルームの茹で汁と白いフォン、卵黄、粗く砕いたこしょう、ナツメグ、レモン汁を入れる。泡立て器でよく混ぜ、そこにヴルテを加える。火にかけて沸騰させ、強火で 2/3 量になるまで、ヘラで混ぜながら煮詰める。ヘラの表面がソースでコーティングされる状態になるまで煮詰めた後、布で漉す。  
膜が張らないよう、表面にバターのかけらをいくつ

か載せてやり、湯煎にかけておく。

- ・ **仕上げ**……提供直前に、バター 100g を加えて仕上げる。

【原注】ソース・アルマンド（ドイツ風）とも呼ばれるが、本書では「パリ風」の名称を採用した。そもそも「アルマンド」というの名称に正当性がないからだ。習慣としてそう呼ばれてきただけであって、明らかに理屈に合わない名称だ<sup>3)</sup>。1883 年に雑誌「料理技術」にタヴェルネとかいう人が寄せた記事には、当時ある優秀な料理人がアルマンドなどという理屈に合わない名称を使うのはやめたという話が出ている。

こんにち既に「パリ風ソース」の名称を採用している料理長もいる。そう呼んだほうが好ましいわけだが、残念なことにまだ一般的にはなっていない<sup>4)</sup>。

## ソース・シュブレーン<sup>5)</sup>

### SAUCE SUPREME

鶏のヴルテに生クリーム<sup>6)</sup>を加えてなめらかに仕上げ<sup>7)</sup>たもの。ソース・シュブレーンは、正しく作った場合「白さの際だったとても繊細な」仕上りのものでなくてはならない。

（仕上がり 1L 分）

- ・ **鶏のヴルテ**……1L。
- ・ **追加素材**……鶏の白いフォン 1L、マッシュルームの茹で汁 1dl、良質な生クリーム 2 1/2 dl。
- ・ **作業手順**……鍋に鶏のフォンとマッシュルームの茹で汁、鶏のヴルテを入れて強火にかけ、ヘラで混ぜながら、生クリームを少しずつ加え、煮詰めていく。このヴルテと生クリームを煮詰めたものの分量は、上で示した仕上がり 1L のソース・シュブレーンを作るには、1/3 量まで煮詰まっていなくてはならない。  
布で漉し、仕上げて 1 dl の生クリームとバター 80 g を加えてゆっくり混ぜながら冷ますと、丁度最初のヴルテと同量になる。

1) ある程度濃度のある液体やビュレを布で漉す場合、昔は「二人がかりで行なう必要があり、それぞれが巻いた布の端を左手に持ち、右手に持った木杓子を使って押し搾る」（『ラルース・ガストロノミーク』初版、1938 年）という方法が一般的だった。

2) 原書では「パリ風ソース（元ソース・アルマンド）」となっているが、後述のように、こんにちでもソース・アルマンドの名称のほうが一般的であるため、ここでは Sauce Parisienne の「訳語」としてソース・アルマンドをあてることとした。

3) エスコフィエは普仏戦争に従軍した経歴があり、ドイツ嫌いとして知られている。

4) エスコフィエの願いもむしく、現代においてもソース・アルマンドの名称で定着している。なお、「ドイツ風」というソース名の由来については、ソースの淡い黄色がドイツ人に多い金髪を想起させるからだとかレーンは述べている。

5) *suprême* 原義は「至高の」だが、料理においてはしばしば鶏や鴨の胸肉、白身魚のフィレなどを意味する。また、このソースのように、とくに意味もなくこの名を料理につけられているケースも多い。

6) フランスの生クリームのうち、料理でよく使われるのは、日本の生クリームにやや近い「クレーム・フレッシュ・パストゥーゼ」（低温殺菌した生クリームで乳脂肪分 30～38 %）のほか、「クレーム・フレッシュ・エペス」（低温殺菌後に乳酸醗酵させたもので日本で一般的な生クリームより濃度がある）、「クレーム・ドゥーブル」（殺菌後に乳酸醗酵させたもので乳脂肪分 40 % 程度でかなり濃度がある）などがある。

7) *monter* モンテ。原義は「上げる、ホイップする」だが、ソースの仕上げの際などに、バターや生クリームを加えて、なめらかに仕上げることも「モンテ」の語を使用する場合が多い。

1) 17 世紀にルイ 14 世のメートルデルを務めたこともあるルイ・ベシャメイユ Louis Béchameil (1630～1703) の名が冠されているこのソースは、彼自身の創案あるいは彼に仕えていた料理人によるものという説もあったが真偽は疑わしい。17 世紀頃の成立であることは確かだが、おそらくは古くからあったソースを改良したものに過ぎず、また、19 世紀前半のカレームのレシピはヴルテを煮詰めて、卵黄と煮詰めた生クリームでとろみを付けるというものだった。同様に 1867 年刊グフェ『料理の本』のレシピも、炒めた仔牛肉と野菜に小麦粉を振りかけてからブイヨン注ぎ、これを煮詰めて、漉してから生クリームを加えるというものだった。

## ベシャメルソース<sup>1)</sup> SAUCE BECHAMEL

(仕上がり 5L 分)

- **白いルー**……650g。
- **使用する液体**……沸かした牛乳 5L。
- **追加素材**……白身で脂肪のない仔牛肉 300g をさいの目に切り、みじん切りにした玉ねぎ (小) 2 個分とタイム 1 枝、粗く砕いたこしょう 1 つまみ、塩 25 g とバターを鍋に入れて蓋をし、色付かないように弱火で蒸し煮したもの。
- **作業手順**……沸かした牛乳でルーを溶く。混ぜながら沸騰させる。ここに、先に蒸し煮しておいた野菜と調味料、仔牛肉を加える。弱火で 1 時間煮込む。布で漉し<sup>2)</sup>、表面にバターのかけらをいくつか載せて膜が張らないようにする。肉類を絶対に使わない<sup>3)</sup>で調理する必要がある場合は、仔牛肉を省き、香味野菜などは上記のとおりに作る。このソースは次のようなやり方をすると手早く作ることも出来る。沸かした牛乳に塩、薄切りにした玉ねぎ、タイム、粗く砕いたこしょう、ナツメグを加える。蓋をして弱火で 10 分煮る。これを漉してルーを入れた鍋の中に入れ、強火にかけて沸騰させる。その後 15～20 分だけ煮込めばいい。

## トマトソース SAUCE TOMATE

(仕上がり 5L 分)

- **主素材**……トマトピューレ 4 L、または生のトマト 6 kg。
- **ミルポワ**……さいの目に切って下茹でしておいた塩漬け豚ばら肉 140g、1～2 mm 角のさいの目に刻んだにんじん 200 g と玉ねぎ 150 g、ローリエの葉 1 枚、タイム 1 枝、バター 100 g。
- **追加素材**……小麦粉 150g、白いフォン 2L、にんにく 2 片。
- **調味料**……塩 20g、砂糖 30g、こしょう 1 つまみ。
- **作業手順**……厚手の片手鍋で、塩漬け豚ばら肉を軽く色付くまで炒める。ミルポワの野菜を加え、野菜も色よく炒める。小麦粉を振りかける。ブロンド色になるまで炒めてから、トマトピューレまたは漬した生トマトと白いフォン、砕いたにんにく、塩、砂糖、こしょうを加える。

火にかけて混ぜながら沸騰させる。鍋に蓋をして弱火のオープンに入れ 1 時間半～2 時間加熱する。目の細かい漉し器または布で漉す。再度、火にかけて数分間沸騰させる。保存用の器に移し、ソースが空気に触れて表面に膜が張らないよう、バターのかけらを載せてやる。

【原注】 トマトピューレを使い、小麦粉は使わず、その他は上記のとおりに作ってもいい。漉し器か布で漉してから、十分な濃度になるまでしっかり煮詰めてやること。

2) **ヴルテ** 訳注参照。

3) 小斉のこと。**魚料理用ソース・エスパニョル** 訳注参照。

## ブラウン系の派生ソース

### PETITES SAUCES BRUNES COMPOSÉES

#### ソース・ビガラード<sup>1)</sup>

##### Sauce Bigarade

**仔鴨のブレゼ<sup>2)</sup>用** ……仔鴨をブレゼした際の煮汁を濾してから浮き脂を取り除き<sup>3)</sup>、煮詰める。煮詰まったらさらに目の細かい布で濾し、ソース 1 L あたりオレンジ 4 個とレモン 1 個の搾り汁でのばす。

**仔鴨のボワレ<sup>4)</sup>用** ……仔鴨をボワレのフォンから浮き脂を取り除き、でんぷんで軽くとろみ付けする。砂糖 20g に大さじ 1/2 杯のヴィネガーを加えて火にかけカaramel 状にしたものを加える。ブレゼ用と同様に、オレンジとレモンの搾り汁でのばす。

仔鴨のブレゼ用、ボワレ用いずれの場合も、細かい千切りにしてよく下茹でしておいたオレンジの皮大さじ 2 とレモンの皮<sup>5)</sup>大さじ 1 を加えて仕上げる。

#### ボルドー風ソース

##### Sauce Bordelaise

赤ワイン 3 dl にエシャロットのみじん切り大さじ 2、粗く砕いたこしょう、タイム、ローリエの葉 1/2 枚を加えて火にかけ、1/4 量になるまで煮詰める。ソース・エスパニョール 1 dl を加えて火にかけ、浮いてくる夾雑物を丁寧に取り除きながら弱火で 15 分間煮る。目の細かい布で濾す。

溶かした**グラスドヴィアント**大さじ 1 杯とレモン汁 1/4 個分、細かいさいの目か輪切りにしてポシシておいた牛骨髄を加えて仕上げる。

……牛、羊の赤身肉のグリル用

【原注】ここにちではボルドー風ソースをこのように赤ワインを用いて作るが、本来的には誤りである。

元来は白ワインが用いられていた。これは**ボルドー風ソース・ボヌフォワ**として後述。

#### ブルゴニュ風ソース

##### Sauce Bourguignonne

上質の赤ワイン 1 1/2 L に、エシャロット 5 個の薄切りとパセリの枝、タイム、ローリエの葉 1/2 枚、マッシュルームの切りくず<sup>6)</sup>25g を加えて、半量になるまで煮詰める。布で濾し、ブールマニエ 80g (バター 45g と小麦粉 35g) を加えてとろみを付ける。提供直前にバター 150g を溶かし込み、カイエンヌ<sup>7)</sup>ごく少量で加えて風味よく仕上げる。

……いろいろな卵料理や、家庭料理に好適なソース。

#### ブルターニュ風ソース

##### Sauce Bretonne

中位の玉ねぎ 2 個をみじん切りにして、バターでブロン色になるまで炒める。白ワイン 2 1/2 dl を注ぎ、半量になるまで煮詰める。ここにソース・エスパニョール 3 1/2 dl およびトマトソース同量を加える。7~8 分間煮立てから、刻んだパセリを加えて仕上げる。

【原注】このソースは [白いんげん豆のブルターニュ風] 以外にはほとんど使われない。

#### ソース・スリーズ<sup>8)</sup>

##### Sauce aux Cerises

ポルト酒 2dl にイギリス風ミックススパイス<sup>9)</sup>1 つまみと、すりおろしたオレンジの皮を大さじ 1 1/2 杯加えて 2/3 量になるまで煮詰める。グロゼイユのジュレ 2 1/2 dl を加え、仕上げにオレンジ果汁を加える。

1) ビガラードは本来、南フランスで栽培されるビターオレンジの一種。

2) 料理の仕立てとしてのブレゼはたんに「蒸し煮」することではない。原則的な手順をごく簡単に述べておく。厚めに輪切りにしたにんじんと玉ねぎをバターまたはラードで炒め、ブーケガルネとともに鍋に入れる。表面を色よく焼き固めた肉を、脂身の少ない肉の場合には豚背脂のシートで包んで素材がびったり入る大きさの鍋に入れ、**茶色いフォン**を注ぎ、蓋をしてオープンに入れ、微沸騰の状態を保つようにして煮込む。火が通ったら肉を取り出し、鍋に残った煮汁でソースを作る。詳細については第 7 章 肉料理参照。

3) dégraisser デグレセ。

4) ボワレについても簡単に述べておく。本書においてボワレは「フライパンで焼く」という意味で用いられることは決していない (フライパンで魚などを焼くことをボワレと呼ぶようになったのは 20 世紀後半のこと)。本書では「ローストの一種」と定義されており (この点がカレーとはまったく異なる)、3~4mm 角に切った香味野菜 (マティニオン) を生のまま鍋の底に入れ、その上に味付けをした肉を置く。溶かしバターをかけてから、蓋をして中火のオープンに入れて蒸し焼きにする。時々様子を見て溶かしバターをかけてやること。肉に火が通ったら鍋から取り出し、**茶色い仔牛のフォン**を注いで弱火にかけて 10 分程煮込み、マティニオンとして用いた野菜から風味を引き出してソースにする。これがレシピにある「ボワレのフォン」となる。

5) 柑橘類の表皮を薄く剥いてごく細い千切りにしたり、器具を用いておろしたものをゼスト *zeste* と呼ぶ。千切りにしたものは苦味を取り除くために下茹ですることが多い。

6) 料理に使うマッシュルームは通常、トゥルネ (包丁を持った側の手は動かさずに材料を回して切ることからついた用語) すなわち螺旋状に切って供するが、その際に少くない量の切りくずが出るのでこれを使う。

7) 赤唐辛子の粉末だがカイエンヌは本来、品種名。日本のタカノツメと比べると辛さもややマイルドで、風味も異なる。

8) スリーズ *cerises* はさくらんぼのこと。このレシピでグロゼイユ (すぐり) のジュレを用いるが、古くはさくらんぼを用いていたことからこの名称となったと言われている。

9) Mixed spice のこと。Pudding spice とも呼ばれる。シナモン、ナツメグ、オールスパイスの組み合わせが典型的。これにクローブ、生姜、コリアンダーシード、キャラウェイシードなどが加わっていることも多い。

……大型ジビエの料理用だが、鴨のポワレやブレゼにも用いられる。

### ソース・シャンピニオン<sup>1)</sup>

#### Sauce aux Champignons

index|しゃんひによん@シャンピニオン!そすふらうんけいはせい@ソース・ー (ブラウン系)  
マッシュルームの茹で汁 2 $\frac{1}{2}$  dl を半量になるまで煮詰める。ソース・ドゥミグラス 8 dl を加えて数分間煮立てる。布で漉し、バター 50 g を投入して味を調え、あらかじめ下茹でしておいた小さめのマッシュルームの笠 100 g を加えて仕上げる。

### ソース・シャルキュティエール<sup>2)</sup>

#### Sauce Charcutière

提供直前に、ソース・ロペール 1 L に細さ 2mm 程度で短かめの千切り<sup>3)</sup>にしたもの 100 g を加える(ソース・ロペール参照)。

### ソース・シャスール<sup>4)</sup>

#### Sauce Chasseur

生のマッシュルームを薄切りにしたもの 150g をバターで炒める。エシャロット<sup>5)</sup>のみじん切り大さじ 2 $\frac{1}{2}$  杯を加えてさらに軽く炒め、白ワイン 3 dl を注ぎ、半量になるまで煮詰める。トマトソース 3 dl とソース・ドゥミグラス 2 dl を加える。数分間沸騰させたら、バター 150 g と、セルフィユ<sup>6)</sup>とエストラゴン<sup>7)</sup>をみじん切りにしたもの大さじ 1 $\frac{1}{2}$  杯を加えて仕上げる。

### ソース・シャスール (エスコフィエ流)

#### Sauce Chasseur (Procédé Escoffier)

生のマッシュルームを薄切りにしたもの 150g を、バターと植物油で軽く色付くまで炒める。みじん切りにしたエシャロット大さじ 1 杯を加え、なるべくすぐに余分な油をきる。白ワイン 2dl とコニャック 約 50ml を注ぎ、半量になるまで煮詰める。ソース・ドゥミグラス 4 dl とトマトソース 2 dl、グラスドヴィアンド大さじ 1 $\frac{1}{2}$  杯を加える。

5分間沸騰させたら、仕上げにパセリのみじん切り少々を加える。

### 茶色いソース・ショフロワ<sup>8)</sup>

#### Sauce Chaud-froid brune

(仕上がり 1L 分)

ソース・ドゥミグラス<sup>3)</sup> 4 L とトリュフエッセンス 1 dl、ジュレ 6~7 dl を用意する。  
ソース・ドゥミグラスにトリュフエッセンスを加えて、強火で煮詰めるが、この時に鍋から離れないこと。煮詰めながらジュレを少量ずつ加えていく。最終的に $\frac{2}{3}$  量程度まで煮詰める。

味見をして、ソースがショフロワに使うのに丁度いい濃さになっているか確認すること。

マデラ酒またはポルト酒<sup>1)</sup> 2dl を加える。布で漉し、ショフロワの主素材の表面に塗り付けるのに丁度いい固さになるまで、丁寧にゆっくり混ぜながら冷ます。

### 茶色いソース・ショフロワ (鴨用)

#### Sauce Chaud-froid brune pour Canards

作り方は上記、茶色いソース・ショフロワと同様だが、トリュフエッセンスではなく、鴨のガラでとったフュメ<sup>1)</sup> 1 $\frac{1}{2}$  dl を用いること。また、上記のレシピよりややしっかり煮詰めること。

ソースを布で漉したら、オレンジ 3 個分の搾り汁、とオレンジの皮をごく薄く剥いて細かい千切りにしたもの<sup>9)</sup> 大さじ 2 杯を加える。オレンジの皮の千切りはしっかりと下茹でしてよく水気をきっておくこと。

### 茶色いソース・ショフロワ (ジビエ用)

#### Sauce Chaud-froid brune pour Gibier

作り方は上記標準的なソース・ショフロワと同じだが、トリュフエッセンスではなく、ショフロワとして供するジビエのガラでとったフュメ<sup>10)</sup> 2dl を用いること。

1) champignons キノコ全般を意味する語だが、単独で用いられる場合はいわゆるマッシュルームを指す。

2) シャルキュトリ (豚肉加工業) 風、の意。Charcutrie の語源は char (肉) +cuite (調理された) +rie (業)。ハムやソーセージなどと定番の組合せであるマスタードを使うソース・ロペールと、おなじく定番のつけ合わせであるコルニション (小さいうちに収穫してヴィネガー漬けにしたきゅうり。専用品種がある) を使うことに由来。

3) 1~2mm 程度の細さの千切りにした野菜などをジュリエヌ julienne と呼ぶ。

4) 狩人風、の意。古くは獣獣肉をすり潰したのを使った料理を指したという説もある。マッシュルームとエシャロット、白ワインを使うのが特徴であり、このソースを使った料理にも「シャスール」の名が付けられる。

5) échalote 玉ねぎによく似ているが、小ぶりで水分が少なく、香味野菜としてよく用いられる。伝統的な品種は種子ではなく種球を植えて栽培する。なお、日本でしばしば「エシャレット」の名称で流通しているものはラッキョウの若どりであり、フランス料理で用いるエシャロットとはまったく異なる。

6) cerfeuil 日本ではチャービルとも呼ばれるセリ科のハーブ。

7) estragon 日本ではタラゴンとも呼ばれるヨモギ科のハーブ。フランス料理ではとても好まれる重要なハーブのひとつ。フレンチタラゴンとロシアンタラゴンの 2 種がある。料理に用いるのはフレンチタラゴンであり、この品種は種子ではなく株分けや挿し芽で殖やして栽培される。寒さには比較的強いが、日本の梅雨の湿度や夏の暑さには弱い。

8) chaud ショ「熱い、温かい」と froid フロワ「冷たい」の合成語で、火を通した肉や魚を冷まし、表面にこのソース・ショフロワを覆うように塗り付け、さらにジュレを覆いかけた料理。料理の発祥については諸説あり、なかでもルイ 15 世に仕えていた料理長ショフロワ Chauffroix が考案したという説を支持してなのか、英語ではこの料理を Chauffroix と綴ることも多い。Chaud-froid の表記は 19 世紀後半には文献に見られる。なお、複数形は chauds-froids と綴る。トリュフの薄切りやエストラゴンなどのハーブその他で表面に華麗な装飾を施すことが 19 世紀には盛んに行なわれていた。現代でも装飾に凝った仕立てにするケースは多い。

9) zeste ゼスト。オレンジやレモンなどの皮の表面を器具を用いてすりおろすか、ナイフでごく薄く表皮を向き、細かい千切りにしたもの。ここでは後者を使う指定になっている。

10) ジビエのフォン参照。

## トマト入りソース・ショフロワ

### Sauce Chaud-froid tomate

良質で、既によく煮詰めてあるトマトピューレ1Lを、さらに煮詰めながら7〜8dlのジュレを少しずつ加えていく。全体量が1L以下になるまで煮詰めること。

布で漉し、使いやすい固さになるまで、ゆっくり混ぜながら冷ます。

## ソース・シュヴルイユ

### Sauce Chevreuil

標準的なソース・ポワヴァード)と同様に作るが、

1. マリネした牛・羊肉の料理に添える場合<sup>1)</sup>は、ハム入りのミルポワを加える。
2. ジビエ料理に添える場合は、そのジビエの端肉を加える。

素材をヘラなどで強く押し付けるようにして漉す<sup>2)</sup>。良質の赤ワイン1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>dlをスプーン1杯ずつ加えながら煮て、浮き上がってくる不純物を丁寧に取り除いていく<sup>3)</sup>。

最後に、カイエンヌごく少量と砂糖1つまみを加えて味を調え、布で漉す。

## ソース・コルペール<sup>4)</sup>

### Sauce Colbert

メートルドテルバターにグラスドヴィアントを加えたものことだが、正しくは「ブルー・コルペール」と呼ぶべきものだ<sup>5)</sup>。

また、ブルー・コルペールとソース・シャトブリアンとの違いを明確にさせようとして、メートルドテルバターにエストラゴンを加える者もある。だが、必ずそうすべきということではない。実際、ブルー・コルペールとソース・シャトブリアンは明らかに違うものだからだ。ソース・シャトブリアンは軽く仕上げたグラスドヴィアントにバターとパセリのみじん切りを加えたものである。一方、ブルー・コ

ルペールあるいはソース・コルペールと呼ばれているものはあくまでもバターが主であって、グラスドヴィアントは補助的なものに過ぎない。

## ソース・ディアーブル<sup>6)</sup>

### Sauce Diable

このソースはごく少量ずつ作るのが一般的だが、ここではそれを守らずに、仕上り2<sup>1</sup>/<sub>2</sub>dlとして説明する

白ワイン3dlにエシャロット3個分のみじん切りを加え、1<sup>1</sup>/<sub>3</sub>量以下になるまで煮詰める。

ソース・ドゥミグラス2dlを加えて数分間煮立たせ、仕上げにカイエンヌの粉末をたっぷり効かせる<sup>7)</sup>。

……鶏と鳩のグリルに合わせる。

【原注】白ワインではなくヴィネガーを煮詰め、仕上げにハーブを加えて作る調理現場もあるが、著者としては本書で示しているの作り方がいいと思う。

## ソース・ディアーブル・エスコフィエ

### Sauce Diable Escoffier

このソースは完成品が市販<sup>8)</sup>されている。同量の柔くしたバターを混ぜ合わせるだけでいい。

## ソース・ディアーヌ<sup>9)</sup>

### Sauce Diane

不純物を充分に取り除き、コクと風味ゆたかなソース・ポワヴァード5dlを用意する。提供直前に、泡立てた生クリーム4dl(生クリーム2dlを泡立てて倍量にする)と、小さな三日月の形にしたトリュフのスライスと固茹で卵の白身を加える。

……大型ジビエの骨付き牛肉および、その中心部を円筒形に切り出したもの<sup>10)</sup>、フィレ料理用。

## ソース・デュクセル<sup>11)</sup>

### Sauce Duxelles

白ワイン2dlとマッシュルームの茹で汁2dlにエシャロットのみじん切り大さじ2杯を加えて、1<sup>1</sup>/<sub>3</sub>量まで煮詰める。ソース・ドゥミグラス1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>Lとトマト

1) chevreuil シュヴルイユはノロ鹿のことだが、このように事前にマリネした牛・羊肉を用いた料理にもこのソースを使い「シュヴルイユ(風)」と謳う。1806年刊ヴィアール『帝国料理の本』においてノロ鹿のフィレは香辛料を加えたワインヴィネガーで48時間マリネしてから調理すると書かれている。オド『女性料理人のための本』では、確認出来た1834年の第4版から1900年の第78版に至るまで、ノロ鹿の項において「一週間もヴィネガーたっぷりの漬け汁でマリネするのはやりすぎだが、強い味が好みなら1〜4日間」香辛料と赤ワインあるいはヴィネガーでマリネするといひ、と説明されている。つまり、ノロ鹿とは必ずマリネしてから調理するものという一種のコンセンサスがあったために、マリネした牛・羊肉の料理にも「シュヴルイユ(風)」の名称が謳われるようになったと考えられる。

2) シノワ(ソース・エスパニョール訳注参照)などを用いる。

3) dépouiller デブイエ ⇨ écumer エキュメ

4) 17世紀の政治家、ジャン・バティスト・コルペール(1619〜1683)の名を冠したもの。

5) 具体的なレシピはブルー・コルペール参照のこと。

6) 悪魔の意。

7) 「たっぷり」という表現に惑わされないよう注意。

8) 現在は市販されていないと思われる。フランスにおいては未確認だが、1980年代までアメリカ合衆国ではナビスコがソース・ロペール・エスコフィエとともに瓶詰めを生産、販売していた。初版ではこれら2つの製品への言及がなく、第二版で追加されたことから、1903年〜1907年の間に製品化された可能性もある。また、第二版(1907年)と同年の英訳版、第三版(1912年)にはソース・スリーズ・エスコフィエの記述が見られるが、これは第四版で削除されており、生産中止になったと思われる。エスコフィエ・ブランドの既製品ソースはさらに他にもあったようだが詳細は不明。なお、エスコフィエは1922年頃、ジュリユス・マジがブイオンキューブ(日本では「マギーブイオン」の商品名)を開発する際にも協力した。

9) ローマ神話の女神ディアーナのこと。ギリシア神話のアルテミスに相当し、狩猟、貞潔の女神。また月の女神ルーナ(セレーネ)と同一視された。ここでは大型ジビエ料理用のソースであるから、狩猟の女神という意味合いが強い。

10) noisette ノワゼット。

11) デュクセル・セッシュ(第二章ガリニチュール参照)を用いることからこの名称が用いられている。

ビュレ 1 $\frac{1}{2}$  dl、デュクセル・セッシュ大さじ 4 杯を加える。5 分間煮立たせ、パセリのみじん切り大さじ  $\frac{1}{2}$  を加える。

……グラタンその他、いろいろな料理に用いられる。

【原注】 ソース・デュクセルはイタリア風ソースと混同されることが多いが、ソース・デュクセルにはハムも、赤く漬けた舌肉も入れないので、まったく別のものだ。

### ソース・エストラゴン<sup>1)</sup>

#### Sauce Estragon

(仕上り 2 $\frac{1}{2}$  dl 分)

白ワイン 2 dl を沸かし、エストラゴンの枝 20 g を投入する。蓋をして 10 分間、煎じる<sup>2)</sup>。2 $\frac{1}{2}$  dl のソース・ドゥミグラスまたは、**とろみを付けた仔牛のジュ**を加え、約  $\frac{2}{3}$  量になるまで煮詰める。布で漉し、みじん切りにしたエストラゴン小さじ 1 杯を加えて仕上げる。

……仔牛や仔羊の背肉の中心を円筒形に切り出した料理や家禽料理用。

### ソース・フィナンシエール<sup>3)</sup>

#### Sauce Financière

ソース・マデール 1 $\frac{1}{2}$  dl を  $\frac{3}{4}$  量以下になるまで煮詰め、火から外してトリュフエッセンス 1 dl を加える。布で漉して仕上げる。

……ガルニチュール・フィナンシエール用だが、その他の肉料理にも用いられる。

### 香草ソース

#### Sauce aux Fines Herbes<sup>4)</sup>

白ワイン 3 dl を沸かし、パセリの葉、セルフイユ、エストラゴン、シブレットを各 1 つまみ強、投入する。

約 20 分間煎じる。布で漉し、ソース・ドゥミグラスまたは**とろみを付けた仔牛のジュ** 6 dl を加える。仕上げるに、煎じるのに使ったのと同じ香草を細かく刻んだもの計、大さじ  $\frac{2}{3}$  杯とレモンの搾り汁少々を加える。

【原注】 古典料理ではこの「香草ソース」とソース・デュクセルが混同されることもあったが、こんにちではまったく違うものとして扱われている。

### ジュネーヴ風ソース

#### Sauce Genevoise

鍋にバターを熱し、細かく刻んだミルポワを色付かないよう強火でさっと炒める。ミルポワの材料は、にんじん 100 g、玉ねぎ 80 g、タイムとローリエ少々、パセリの枝 20 g。そこにサーモンの頭 1 kg と粗く砕いたこしょう 1 つまみを入れ、蓋をして弱火で 15 分程蒸し煮する。

鍋に残ったバターを捨て、赤ワイン 1 L を注ぐ。半量になるまで煮詰める。そこに**魚料理用ソース・エスパニョール**  $\frac{1}{2}$  L を加える。弱火で 1 時間煮込む。漉し器を使い、材料を押しつけながら漉す。しばらく休ませてから、表面に浮いた油脂を取り除く<sup>5)</sup>

さらに赤ワイン  $\frac{1}{2}$  L と、魚のフユ  $\frac{1}{2}$  L を加える。ソースの表面に浮いてくる不純物を徹底的に取り除き<sup>6)</sup>、丁度いい濃さになるまで煮詰める。

これを布で漉し、静かに混ぜながら、アンチョヴィのエッセンス大さじ 1 杯とバター 150 g を加えて仕上げる。

……サーモン、鰯料理用。

【原注】 このソースはもともとカレームが「ジェノヴァ風」<sup>7)</sup>と名付けたものだが、その後ルキュレ、グ

1) ヨモギ科のハーブ。ソース・シャスール訳注参照。

2) infuser アンフュゼ。

3) Financier 徴税官(財務官)風の意。フランス革命以前の徴税官は、王に代わって徴税を行なう大貴族が就く役職であり、膨大な利権によりきわめて裕福であったという。このソースと組み合わせるガルニチュール・フィナンシエールが、雄鶏のとさかと辜丸、仔羊の胸腺肉、トリュフなどの比較的手困難あるいは高級とされる食材で構成されていることが名称の由来と思われる。ブリヤ・サヴァランは『美味礼讃』(味覚の生理学)において、徴税官たちは旬のはしりの食材を真っ先に食べられる、いわば特権階級だと述べている。なお、カレーム『19 世紀フランス料理』においては、ソースとガルニチュールを分離せず、「ラグー・アラ・フィナンシエール」として採りあげられているが、全ての素材を別々に加熱調理してソースと合わせるものであり、いわゆる「煮込み」とは呼びがたいものとなっている。フランス料理の影響が比較的强大だった北イタリアにこの原型に近いと思われるラグー「ピエモンテ風フィナンツィエラ」がある。鶏のとさか、肉垂、辜丸、鶏レバーおよび仔牛の胸腺肉などを煮込んだものだが、レシピを読む限りにおいては比較的庶民的あるいは農民的料理に変化したものと思われる(cf. Anna Gosetti della Salda, *Le Ricette Regionali Italiane*, Milano, Solares, 1967, p.57)。ちなみに焼き菓子のフィナンシエ financier も同語源だが、何故その名称になったかは不明。

4) 料理名としていわゆる「ハーブ」についてかつては fines herbes の表現が多かった。とはいえ、こんにちでは特定のハーブ名をソースや料理名に添えて言うことが多い。例えば Côtelette de veau au thym コトレットドヴォオタン(仔牛の骨付き背肉、タイム風味)、や Filet de bar poêlé, compote de tomate au basilic フィレドバルボワレ コンポットドトマトバジリック(スズキのフィレとトマトのコンポート、バジル風味)など。また、栽培レベルで「香草、ハーブ」の総称としては herbes aromatiques エルプロマティック、あるいはたんに aromatiques アロマティックが一般的。

5) dégraisser デグレセ。レードルなどを用いて浮いてきた余計な油脂を取り除く作業。

6) dépouiller デブイェ エキューム エキュム。

7) Sauce à la génoise au vin de Bordeaux ボルドー産ワインを用いたジェノヴァ風ソース(『19 世紀フランス料理』第 3 巻、80 頁)。本書のこのレシピと同様に魚料理用ソースだ。ボルドーの赤ワインにみじん切りにして下茹でしたマッシュルーム、トリュフ、エシャロットを加えてオールスパイスとこしょう少々を入れ、適度に煮詰める。ソース・エスパニョールと赤ワインを加え、湯煎にかけておく。提供直前にバター少量を加えて仕上げる、というもの。本書においてこのソースを「原型」とするのは疑問が残るところだろう。

1) グフェ『料理の本』(1867 年)の 420 ページにあるジュネーヴ風ソースは、薄切りにした玉ねぎ、エシャロット、粗挽きこしょう、にんにく、バターを鍋に入れて色付くまで炒め、そこにブルゴーニュ産赤ワインを注ぐ。弱火で玉ねぎに火が通るまで煮る。ソース・エスパニョールと仔牛のプロンドのジュを加えて煮詰め、布で漉す。提供直前にマダラ酒の風味を加えて茹でたトリュフのみじん切りとアンチョビバターを加える、というもの。赤ワインと玉ねぎ、仕上げにアン



フェ<sup>1)</sup>が立て続けに「ジュネーヴ風」の名称を用いた。だが、ジュネーヴは赤ワインの産地ではないから理屈としてはおかしい<sup>2)</sup>。  
間違っているとはいえ、ジュネーヴ風という名称で定着してしまっているので、本書でもそのままにしている。だが、ジュネーヴ風であれジェノヴァ風であれ、カレーム、ルキュレ、デュボワ、グフェはいずれもこのソースに赤ワインを用いるよう指示している。つまり赤ワインを用いることがこのソースのポイント。

### ソース・ゴダール<sup>3)</sup>

#### Sauce Godard<sup>4)</sup>

シャンパーニュまたは辛口の白ワイン 4 dl にハム入りの細かく刻んだミルポワ、ソース・ドゥミグラス 1 L とマッシュルームのエッセンス 2 dl を加える。弱火に 10 分かけ、シノワ<sup>5)</sup>で漉す。  
2/3 量になるまで煮詰め、布で漉す。  
……ガルニチュール ゴダール用。

### ソース・グランヴヌール<sup>6)</sup>

#### Sauce Grand-Veneur

大型ジビエのフュメで澄んだ色合いに作ったソース・ポワヴラードに、ソース 1 L あたり野うさぎの血 1 dl をマリネ液 1 dl で薄めたものを加える。  
火をごく弱くして、血が沸騰しないよう気をつけながら数分間煮る。布で漉す。

### ソース・グランヴヌール (エスコフィエ流)

#### Sauce Grand-Veneur (Procédé Escoffier)

軽く仕上げたソース・ポワヴラード 1 L あたり [グロセイユのジュレ] 大さじ 2 杯と生クリーム 2 1/2 dl を加える。  
……上記 2 つのソースは鹿、猪などの大きな塊肉の料理に用いる。

### ソース・グラタン<sup>7)</sup>

#### Sauce Gratin

白ワインと、このソースを合わせる魚のアラなどでとった魚のフュメ各 3 dl にエシャロットのみじん切り大さじ 1 1/2 杯を加え、半量以下になるまで煮詰める。  
デュクセル・セッシュ大さじ 3 杯と、魚料理用ソース・エスパニョールまたはソース・ドゥミグラス 5 dl を加える。5〜6 分間煮立たせる。提供直前に、パセリのみじん切り大さじ 1/2 を加えて仕上げる。  
……舌びらめ、メルラン<sup>8)</sup>、バルビュ<sup>9)</sup>のフィレなどのグラタン用。

### ソース・アシェ<sup>10)</sup>

#### Sauce Hachée

玉ねぎの細かきみじん切り 100 g と、エシャロットの細かきみじん切り大さじ 1 1/2 杯をバターで色付かないよう炒める。ヴィネガー 3 dl を注ぎ、半量まで煮詰める。ソース・エスパニョール 4 dl とトマトソース 1 1/2 dl を加える。5〜6 分煮立たせる。  
ハムの脂身のない部分を細かく刻んだもの大さじ 1 1/2 杯と小ぶりのケイパー大さじ 1 1/2 杯、[デュクセル・セッシュ] 大さじ 1 1/2 杯、パセリのみじん切り大さじ 1/2 杯を加えて仕上げる  
……このソースはソース・ピカントと等価のものと考えていい。用途も同じ。

### 魚料理用ソース・アシェ

#### Sauce Hachée maigre

上記と同様に、玉ねぎとエシャロットを色付かないようバターで炒め、ヴィネガーを注いで煮詰める。  
魚のクールブイヨン 5 dl を注ぎ、茶色いルー 45 g またはブルマニエ 50 g でとろみを付ける。弱火で 8〜10 分間煮込む。  
提供直前に、細かく刻んだハーブミックス大さじ 1 杯と [デュクセル・セッシュ] 大さじ 1 1/2 杯、小粒のケイパー大さじ 1 1/2 杯、アンチョヴィソース大さ

チョビを加える点は共通しているが、グフェのが肉料理用であるのに対して、本書のこのソースは明らかに魚料理用であり、まったく同じソースと呼べるかは疑問の残るところだろう。

- 料理名に冠された地名は、由来が明確にあるものがある一方で、まったく意味不明か、あるいはいい加減な思いつきで付けられたのではないかとさえ思われるものも少なくない。(à la) russe 「ロシア風」や (à la) moscovite 「モスクワ風」などはロシア料理起源か、あるいは 18 世紀末〜19 世紀前半にかけてロシア帝国の宮廷や貴族がこぞってフランスから料理人を招聘し、帰国した彼らが創案した料理などはある程度しっかりとした由来がわかるものも多い。一方で、(à l')espagnole 「スペイン風」(à l')italienne 「イタリア風」(à la) romaine 「ローマ風」(à la grecque) 「ギリシア風」(à l')allemande 「ドイツ風」(à l')hollandaise 「オランダ風」などは由来の不明なケースが非常に多い。ソース・エスパニョールなどはその典型例とも言うべきものだろう。

この原注では由来に非常にこだわっているが、そもそもカレームのレシピは上述のように「ポルドー産ワインを用いたジェノバ風ソース」であるから、赤ワインの産地かどうかということは実はさしたる問題にはならない。重要なのは後半の、赤ワインを用いることがこのソースのポイントということ。

- ガルニチュール・ゴダールの構成要素がガルニチュール・フィナンシエールとよく似ている点などから、おそらくは 18 世紀の徴税官 (つまりフィナンシエ) であり作家としても活動したクロード・ゴダール・ドクール Claude Godard d'Aucour (1716〜1795) の名を冠したものと考えられる。
- 底本とした現行版 (第四版) では最後が d ではなく t となっているが、初版から第三版にいたるまで d となっており、現行版は明らかな誤植。
- ソース・エスパニョール訳注参照。
- 王家や貴族に仕える狩猟長のことをグランヴヌールと呼ぶ。
- 魚のグラタン用ソースだが、グラタンの技術的ポイントについては第 7 章「肉料理」参照。
- タラの近縁種。
- 鱈の近縁種。この場合のフィレはいわゆる「五枚おろし」にしたもの。
- 細かく刻んだもの、の意。

じ 1/2 杯とバター 60 g、または 80~100 g のアンチョヴィバターを加えて仕上げる。  
……エイのような、あまり高級ではない茹でた魚<sup>1)</sup>用。

### ソース・ユサルド<sup>2)</sup> Sauce Hussarde

玉ねぎ 2 個とエシャロット 2 個を細かくみじん切りにして、バターで色よく炒める。白ワイン 4 dl を注ぎ、半量になるまで煮詰める。ソース・ドゥミグラス 4 dl とトマトビュレ大さじ 2 杯、白いフォン 2 dl、生ハムの脂身のないところ 80 g、潰したにんにく 1 片、ブーケガルニを加える。弱火で 25~30 分煮込む。ハムを取り出して、ソースをスプーンで押すようにして布で漉す。火にかけて温め、小さなさいの目<sup>3)</sup>に刻んだハムと、おろしたレフォール<sup>4)</sup>少々、パセリのみじん切りをたっぷり 1 つまみ加えて仕上げる。  
……牛、羊肉のグリルまたは串を刺してローストしてアントレ<sup>5)</sup>として供する際に用いる。

### イタリア風ソース Sauce Italienne

トマトの風味の効いたソース・ドゥミグラス 3/4 L に、デュクセル・セッシュ大さじ 4 杯と、加熱ハムの脂身のないところを小さなさいの目に切ったもの 125 g を加える。5~6 分間煮る。提供直前に、パセリとセルフィユ、エスゴラゴンのみじん切り大さじ 1 杯を加えて仕上げる。  
……いろいろな肉料理に合わせる。

【原注】このソースを魚料理に合わせる場合、ハムは使わずに魚のフュメを煮詰めて加える。

### とろみを付けたジュ エストラゴン風味 Jus lié à l'Estragon

仔牛のフォンまたは鵝のフォンに、エストラゴン 50 g を加えて香りを煮出し<sup>6)</sup>たもの。  
布で漉してから、アロールト<sup>7)</sup>または、でんぶん 30 g でとろみを付ける。

……白身肉のノワゼットや家禽のフィレなどに添える。

### とろみを付けたジュ トマト風味 Jus lié tomate

仔牛のフォン 1 L あたりトマトエッセンス 3 dl を加え、4/5 量まで煮詰める。  
……牛、羊肉料理用。

### リヨン風ソース Sauce Lyonnaise

中位の大きさの玉ねぎ 3 個のみじん切りにし、バターでじっくり、ごく弱火でブロンド色になるまで炒める。白ワイン 2 dl とヴィネガー 2 dl を注ぐ。1/3 量まで煮詰め、ソース・ドゥミグラス 3/4 L を加える。5~6 分かけて表面に浮いてくる不純物を丁寧に取り除き<sup>8)</sup>、布で漉す。

【原注】このソースを合わせる料理によっては、ソースを布で漉さずに玉ねぎを残してもいい。

### ソース・マデール Sauce Madère

ソース・ドゥミグラスを煮詰め<sup>9)</sup>、火から外して、ソース 1 L あたりマデラ酒 1 dl の割合で加え、普通の濃度にする。

### ソース・マトロット<sup>10)</sup> Sauce Matelote

魚をポシェするのに使った赤ワイン入りの魚用クールブイヨン 3 dl にマッシュルームの切りくず 25 g を加え、1/3 量になるまで煮詰める。  
煮詰めたら魚料理用ソース・エスパニョール 8 dl を加えてひと煮立ちさせる。布で漉し、バター 150 g とごく少量のカイエンヌの粉末を加えて仕上げる。

### ソース・モワル Sauce Moelle<sup>11)</sup>

ソースの作り方はボルドー風ソースとまったく同じだが、バターを加えるのは何らかの野菜料理に添える場合のみであり、その場合のバターの量は通常どおりとする。

- 1) 原文 poissons bouillis。このフランス語の表現だと加熱する際に沸騰させているニュアンスがあるが、本書の「魚料理」の章において、魚を塩を加えて茹でる、あるいはクールブイオンで煮る際に、沸騰しない程度の温度で加熱（ポシェ pocher）すべきと強調されている。この表現は初版からのものであり、恐らくはこのソースの部分を実際に執筆した者と、魚料理の説明部分を執筆した者が異なることによるわりなくさ、という可能性も排除出来ない。いずれにしても、このソースの場合は、合わせる魚をクールブイオンで沸騰しない程度の温度で加熱（ポシェ）し、そのクールブイオンの一部をソースに加えていることから、単に「茹でた魚」と言っても、本書における魚の加熱方法に則った調理をすべきと解されよう。
- 2) もとはハンガリーで農家 20 戸につき 1 人の割合で招集された騎兵 hussard を指す。この語は 16 世紀まで遡ることが出来るが、のちに「乱暴者」といったニュアンスでも使われるようになった。à la hussarde は「乱暴に、粗野に」の意味でも用いられるが、料理においてはレフォールを使ったものに名付けられることが多い。
- 3) brunoise ブリュノワーズ。
- 4) raifort いわゆる西洋わさび。
- 5) 通常、ローストは料理区分としてアントレに含められることはないが、牛フィレは牛の部位のなかでも比較的小さいものとして、まるごと 1 本のローストであっても原則的にはアントレに分類される。このソースを用いる「牛フィレ ユサルド」は牛フィレの塊に串を刺してローストし、ボム・デュシェスとマッシュルームを合わせる。
- 6) imfuser アンフューゼ。
- 7) コーンスターチで代用する。
- 8) dépouiller デブイエ。現代ではエキユメと呼ぶ現場が多い。
- 9) ソース・ドゥミグラスは既に煮詰めて仕上がった状態のもので、9 割程度にまでしか煮詰めないことに注意。
- 10) 水夫風、船員風、の意。トゥーレーヌ地方の郷土料理 Matelote d'anguille マトロットダンギュー（うなぎの赤ワイン煮込み）が有名だが、赤ワイン煮込みにとどまらず、マトロットの名称を持つ料理は他にも複数存在する。
- 11) 骨髓のこと。

どんな場合にせよ、仕上げるに、小さなさいの目に切ってポシェしておいた骨髄をソース 1 L あたり 150 ~ 180 g および刻んで下茹でしたパセリの葉小さじ 1 杯を加える。

## モスクワ風<sup>1)</sup>ソース

### Sauce Moscovite

大型ジビエのフメで作ったソース・ポワヴラードを 3/4 L 用意する。提供直前にマラガ酒 1 dl とジュニパーベリーを煎じた汁 7 cl、焼いた松の実かスライスして焼いたアーモンド 40 g、大きさを揃えてぬるま湯でもどしておいたコリント産干しぶどう<sup>2)</sup> 40 g を加えて仕上げる。  
……大型ジビエ<sup>3)</sup>の塊肉の料理用。

## ソース・ペリグー<sup>4)</sup>

### Sauce Périgourneux

やや濃いめに煮詰めたソース・ドゥミグラス 3/4 L に、トリュフエッセンス 1 1/2 dl と細かく刻んだトリュフ 100 g を加える。  
……いろいろな肉料理、タンバル、温製パテに合わせる。

## ソース・ペリグルディーン<sup>5)</sup>

### Sauce Périgourdine

ソース・ペリグーのバリエーション。トリュフを細かく刻むのではなく、オリーブ形か小さな真珠のような形状にナイフで成形<sup>6)</sup>したものを加える。トリュフを厚めにスライスして加える場合もある。

## ソース・ピカント

### Sauce Piquante<sup>7)</sup>

白ワイン 3 dl と良質のヴィネガー 3 dl にエシャロットのみじん切り大さじ 2 1/2 杯を合わせて半量に煮詰める。

ソース・エスパニョル 6 dl を加え、浮いてくる不純物を取り除きながら<sup>8)</sup> 10 分間煮る。

火から外し、コルニション<sup>9)</sup>、パセリ、セルフィユ、エストラゴンを細かく刻んだもの大さじ 2 杯を加えて仕上げる。

……豚肉のグリル焼き、ブイイ<sup>10)</sup>、ローストによく合わせるソース。牛肉のブイイや牛や羊のエマンセにも合わせることが出来る。

## ソース・ポワヴラード<sup>11)</sup>(標準)

### Sauce Poivrade ordinaire

細かいさいの目に切ったにんじん 100 g と玉ねぎ 80 g、刻んだパセリの茎、タイム少々、ローリエの葉少々からなるミルポワを油で色付くまで炒める。

ヴィネガー 1 dl とマリナード 2 dl を注ぎ、1/3 量になるまで煮詰める。ソース・エスパニョル 1 L を注ぎ、約 45 分間煮込む。

ソースを漉す 10 分前に、大粒のこしょう 8 個を叩きつぶして加える。ソースにこしょうを入れてからの時間がこれ以上少しくとも長いと、こしょうの風味が支配的になり過ぎることになるので注意。

漉し器で香味素材を軽く押すようにして漉す。マリ

1) モスクワ風の名称を持つ料理や菓子は多い。18 世紀後半から 19 世紀前半にかけて、ロシアの宮廷や貴族らの間でフランスの食文化が流行し、多くのフランス人料理人が招聘され、彼らはロシア料理のレシピをフランスに持ち帰った。クーリビヤックなどが代表的な例だろう。また、19 世紀後半になると、とりわけフランス料理においてもロシア料理からの影響が多く見られるようになる。キャビアとウオトカを食前に愉しむのが流行したのもその時代からである。フランスとロシアの食文化は相互に影響関係にあったと言えるよう。

2) 小粒で黒いギリシア産干しぶどう。

3) venaison ヴネゾン。ジビエのうちとりわけ大型のものを指す。実際はノロ鹿や猪を指すことがほとんど。

4) トリュフの産地として有名なペリゴール地方の町の名。

5) ペリゴール地方風の意。

6) tourner トゥルネ。包丁を持っている側の手は動かさずに材料を回すようにして形を整えること。

7) piquant 一般的には唐辛子などが「辛い」の意だが、このソースでは唐辛子の類は使われておらず、むしろ酸味の効いたソースと言える。

8) dépouiller デブイエ。エキユム écumer と呼ぶ現場も多い。

9) 専用品種のきゅうりを小さなうちに収穫して酢漬けにしたもの。同様のピクルス用きゅうりとしてガーキンスという品種系統があるがもっぱらアメリカのハンバーガーに挟まれるようなサイズで収穫して漬けたものであり、フランス料理では用いない。

10) bouilli 茹で肉。

11) このソースは遅くとも 16 世紀末で遡ることが出来る。1505 年に出版された『フランス語版ブラティナ』が poivrade というフランス語の初出。この本において「ジビエ用こしょうのソース、ポワヴラード」Sauce de poyvre ou poyvrade pour saulvagie としてレシピが見られる。パンをよく焼いてヴィネガーに浸してすり潰す。水でもどした干しぶどうと獣の血を加えて混ぜ、玉ねぎと未熟ぶどう果汁、パンを浸した残りのヴィネガーを加えて漉し器か布で漉す。これを鍋に入れ、こしょう、生姜、シナモンを入れて炭火の上で 30 分程煮込む。獣の肉を獣脂を熱したフライパンで焼き、皿に盛る。上からポワヴラードをかけて供する、という内容 (FLXII)。またこの本には、魚料理用のポワヴラードも掲載されている。ただし、これが現代まで続くソース・ポワヴラードの原型と捉えるのは早計に過ぎる。ここで注目すべきは、最終的に肉あるいは魚のような主素材とソースが一体化したものは中世〜ルネサンス期にはポタージュと呼ばれていたのに対し、ここではソースを別のものと捉えている点である。ポワヴラードという語そのものは「こしょうを効かせたもの」という意味に過ぎず、1660 年刊ピエール・ド・リュヌ Pierre de Lune『新フランス料理』における Poivrade de pigeonneaux 若鳩のポワヴラードは、背開きにした若鳩を平たくのばし、塩、こしょうをして弱火でグリルする。薔薇の香りもしくははんにんにく風味のヴィネガーを添えて供する、というもの (p.190)。ピエール・ド・リュヌのレシピにおいてソースに相当するものはヴィネガーであり、むしろ味付けでこしょうを効かせているということが料理名の根拠となっているに過ぎない。ちなみに、生食可能な小さなサイズのアーティチョークも古くからポワヴラードと呼ばれている。

1) ヴィネガーやワイン、香味素材、塩などを合わせて肉を漬け込む液体。マリネ液と呼ぶこともある。

2) 明記されていないが、ここでは約 1 L。

ナード<sup>1)</sup>2 dl でソースをのばす。火にかけて 35 分間、所定の量<sup>2)</sup>になるまで煮詰めながら、表面に浮いてくる不純物を徹底的に取り除く<sup>3)</sup>。  
さらに布で漉し、バター 50 g を加えて仕上げる<sup>4)</sup>。

### ソース・ポヴラード (ジビエ用) Sauce Poivrade pour Gibier

細かいさいの目に切ったにんじん 125 g と玉ねぎ 125 g、タイムの枝と鳥類ではないジビエ<sup>5)</sup>の端肉 1 kg からなる **ミルポワ** を油で色よく炒める。  
ミルポワが色付いてきたら、鍋の油を捨てる。ヴィネガー 3 dl と白ワイン 2 dl を注ぎ、完全に煮詰める。ソース・エスパニョール 1 L と **ジビエの茶色いフォン** 2 L、マリナード 1 L を加える。  
鍋に蓋をして弱火にかける。可能ならオーブンがよい。3 時間半〜4 時間加熱する。

ソースを漉す 8 分前に、大粒のこしょう 12 個を叩きつぶして加える。

漉し器で材料を押すようにして漉す。

これをジビエのフォン 1/4 L とマリナード 1/4 L でのばし、再び火にかけて 40 分間、表面に浮いてくる不純物を丁寧に取り除きながら、1 L になるまで煮詰める。

これを布で漉し、バター 75 g を加えて仕上げる。

【原注】一般的にはジビエ料理のソースにはバターを加えないことになっているが、本書では軽くバターを加えることを推奨する。そうすると、ソースの色の赤みは薄まるが、繊細で滑らかな口あたりに仕上がる。

### ソース・ポルト Sauce au Porto

マデラ酒ではなくポルト酒を用いて、**ソース・マデール**と同様になる。

### ポルトガル風<sup>6)</sup>ソース Sauce Portugaise

(仕上り 1 L 分)

大きめの玉ねぎ 1 個を細かくみじん切りにする。鍋に油を熱し、強火で玉ねぎを炒める。玉ねぎがブロンド色になったら、皮を剥いて種子を取り除き、粗みじん切りにしたトマト 750 g と、つぶしたにんにく 1 片、塩、こしょうを加える。トマトの酸味が強い場合は砂糖少々も加える。鍋に蓋をして、弱火で煮る。**トマトエッセンス**少々、薄めにしたトマトソースを適量<sup>7)</sup>、温めて溶かした**グラスドヴィア****ンド** 1 dl、新鮮なパセリの葉のみじん切り大さじ 1 杯を加えて仕上げる。

### プロヴァンス風ソース Sauce Provençale

大ぶりのトマト 12 個の皮を剥き、つぶして種子は取り除いて、粗く刻む<sup>8)</sup>。ソテー鍋に 2<sup>1</sup>/<sub>2</sub> dl の油を熱し、そこにトマトを入れる。塩、こしょう、粉砂糖 1 つまみで味を調える。しっかりつぶしたにんにく (小) 1 片と細かく刻んだパセリ小さじ 1 杯を加える。

蓋をして弱火で 30 分間程、煮溶かす。

【原注】このソースについてはさまざまな解釈があるが、本書ではブルジョワ料理における本物の「プロヴァンス風ソース」のレシピ、つまりはトマトを煮溶かしたもの、を収録した。

3) *dépouiller* デパイエ。現代では *écumer* エキュメの語を使う現場が多い。

4) 現代では、バターでモンテする *monter au beurre* という表現を用いる現場も多い。

5) *gibier à poil* 逐語訳すると「毛の生えているジビエ」すなわち 鹿、猪、野うさぎなどを指す。

6) 日本でもフランス語のままソース・ポルチュゲーズと呼ばれることは多い。フランス料理においてポルトガル風の名称を付けた料理はトマトをベースとしたものがほとんど。ただし、トマトを使うからといってポルトガル風の名が必ず付くということはまったくない。なお、このソースとまったく関係ないが、*Lettres Portugaises* レットル・ポルチュゲーズ『ぼるとがる文 [ぶみ]』という題名の本が 17 世紀にフランスで出版され人々の感動を誘った。リルケや佐藤春夫が自国語に翻訳、翻案したのも非常に有名。実在したポルトガルの修道女マリアナ・アルコフォラドがポルトガルに駐屯していたフランス軍人シャシー公爵に宛てた 5 通の恋文をまとめた、事実にもとづく書簡集だと長い間信じられていた。しかし、20 世紀になってから、ガブリエル・ド・ギユラージュという男性文筆家によるまったくの創作であることが証明された。とはいえ作品の文学的価値はまったく減じることのない名作であり、書簡体小説の嚆矢とも言うべきもの。この小説形式は 18 世紀に隆盛を迎え、ラクロ『危険な関係』やルソー『新エロイズ』、ゲーテ『若きウェルテルの悩み』など多くの傑作がものされた。19 世紀バルザック『二人の若妻の手記』やドストエフスキー『貧しき人々』がこの小説形式の流行の最後を飾る傑作だろう。なお、トマトは 16 世紀に既にフランスにもたらされており、オリヴィエ・ド・セルは 1600 年に刊行した『農業経営論』において、見た目には美しいが食べても美味しくないとして断じている。食材として広く普及したのは 19 世紀以降であり、ヴィアール、カレームなどの料理書でも材料として用いられるようになる。トマトペーストの製品化は 19 世紀前半に実現されており、グリモ・ド・ラ・レニエールの「アルmana」において言及がある。とりわけ 19 世紀後半はトマトを用いた料理が増えたのが特徴であり、オマール・アメリケースや舌びらめのデュグレレなどは当時のトマトブームの反映と考えていい。また 19 世紀後半の小説家フロベールの遺作『ブヴァールとベキュシェ』においても、主人公二人が当時流行であったトマトの栽培に挑戦するが「芽掻き」をしなかったために失敗してしまうという場面が描かれている。

7) 仕上りの全体量が 1 L なので、トマトソースを加える量は、グラスドヴィアンドを加える前の段階で 0.9 L 程度になるよう調整する。

8) *concasser* コンカセ。

1) 摂政時代、すなわちオルレアン公フィリップが幼少だったルイ 15 世の摂政を務めた時代 (1715~1723 年) のこと。オルレアン公は美食家として有名で、とりわけシャンパーニュを好んだという。この時代はフランス宮廷料理の絶頂期でもあった。

## ソース・レジヤンス<sup>1)</sup>

### Sauce Régence

ライン産ワイン 3 dl に、細かく刻んであらかじめ日を通しておいだ **ミルポワ** 1 dl と生トリュフの切りくず 25g を加え、半量になるまで煮詰める。トリュフのシーズンでない時はトリュフエッセンスを使う。ソース・ドゥミグラス 8 dl を加え、数分間弱火にかけて浮いてくる不純物を丁寧に取り除き<sup>2)</sup>、布で漉す。

……牛、羊の大きな塊肉の料理用。

## ソース・ロベール<sup>3)</sup>

### Sauce Robert

(仕上り 5 dl 分)

大きめの玉ねぎを細かくみじん切りにし、バターで色付かないよう強火でさっと炒める。

白ワイン 2 dl を注ぎ、 $\frac{1}{3}$  量になるまで煮詰める。

ソース・ドゥミグラス 3 dl を加え、弱火で 10 分間煮る。

シノワ<sup>4)</sup>で漉し（これは任意。漉さなくてもいい）、火から外して、粉砂糖 1 つまみとマスタード大さじ 1 杯を加えて仕上げる。

## ソース・ロベール・エスコフィエ<sup>5)</sup>

### Sauce Robert Escoffier

このソースは完成品が市販されている。

温かい料理にも冷たい料理にもよく合う。温かい料理に合わせる場合は、同量の**仔牛の茶色いフォン**と混ぜること。

……豚、牛仔、鶏、魚のグリル焼きに特によく合う。

## ローマ風<sup>6)</sup>ソース

### Sauce Romaine

砂糖 50 g を火にかけてブロンド色にカラメリゼ<sup>7)</sup>する。これをヴィネガー  $\frac{1}{2}$  dl でのばす。砂糖を完全に溶かし込めたら、ソース・エスパニョル 6 dl と**ジビエのフォン** 3 dl を加える。これを  $\frac{3}{4}$  量弱まで煮詰める。布で漉し、松の実 20 g をローストしたものと、大きさが揃う選別したスミヌル干しぶどう<sup>8)</sup> 20 g およびコリント干しぶどう<sup>9)</sup> 20 g を温湯でもどしたものを加えて仕上げる。

【**原注**】上記のとおり作る場合、このソースは大型ジビエ料理用だが、ジビエのフォンではなく通常の**茶色いフォン**を使えば、マリネした牛、羊肉の料理に合わせることも可能。

## ルーアン風<sup>10)</sup>ソース

### Sauce Rouennaise

(仕上り 5 dl 分)

**ポルドー風ソース** 4 dl を用意する。ただし、良質な赤ワインを使って作ること。(ポルドー風ソース参照)。

中位の大きさの鴨のレバー 3 個を裏漉しする。こうして出来たレバーのピュレをソースに加え、沸騰させない程度の温度で火を通す<sup>11)</sup>。絶対に沸騰させないこと。沸騰させてしまうと途端にレバーのピュレが粒状になってしまう。

布で漉し、塩こしょうを効かせる。

2) dépouiller デブイエ エキュム エキュム。

3) この名称のソースは古くからある。文献で初めて出てくるのは 16 世紀フランソワ・ラブレーの小説『ガルガンチュアとパンタグリュエル』。その「第四の書」で料理人の名が大量に列挙される章がある。そのうちの多くは架空の人名だが、その中のロベールという料理人がこのソースを考案したと書いている。ただし、具体的にどのようなソースかまでは描写されておらず「うさぎのロースト、鴨、加工していない豚肉、卵のボシェ、塩漬のメルラン [鰯の近縁種]、その他まことに多くの料理に欠かさないソース」と書いてあるのみ (第 40 章)。どんな料理にも合うと書かれてしまうとむしろ特徴を捉え難くなってしまふ。いずれにせよ、遅くとも 16 世紀には「ソース」として成立していたと考えられる。また、17 世紀のシャルル・ペロー著『物語集』の「眠れる森の美女」においても、このソース名が登場する一節がある。このように 16 世紀以降多くの文学作品をはじめとする文献にこのソース名は見られる。レシピとしては、1651 年刊ラ・ヴァレヌス『フランス料理の本』における「豚腰肉 ソース・ロベール添え」がもっとも古いもののひとつだろう。概略は、豚腰肉を、ヴェルジュ [未熟ぶどう果汁、中世料理においてよく用いられた] とヴィネガー、セージを振り掛けながらローストする。下に置いた脂受け皿に焼いた豚肉から流れ落ちた脂がたまるので、これを使って玉ねぎをこんがり炒める。炒めた玉ねぎの上に豚後ろ身を載せ、豚腰肉をローストする際にかけたのと同じソースをかける。このソースはソースロベールと呼ばれている (p.51)。また、干鰯のソース・ロベール添えの場合は、バターとヴェルジュ少々、マスタードで作るが、ケイパーやシブール [葱] を加えてもいい (p.202) とあり、同じ名称のソースとは見做しがたい。18 世紀以降のソース・ロベールは多かれ少なかれいずれもマスタードを加える点が共通しているので、名称が先にあり、内容が時代とともにはっきりしたものになっていたのだろう。

4) 主として金属製で円錐形に取っ手の付いた漉し器。清朝の高級役人がかぶっていた帽子の形状から「中国の」を意味する chinois の名称となったと言われている。

5) ソース・ディアーブル・エスコフィエ訳注参照。

6) フランス料理における「ローマ風」の名称は「イタリア風」と同様にとくに根拠や由来が見出せないものが多い。このソースの場合は松の実を使うところから、20 世紀前半に活躍したイタリアの作曲家レスピーギのローマ三部作のうちの「ローマの松」を想起させるが、残念ながらこの曲が作曲されたのは 1924 年、つまり本書より後なので関係はない。だが、松の実を採るイタリアカサマツは、アッピア街道の並木などで有名なように、イタリアとりわけローマ近辺において多く見られる (だからこそレスピーギが曲の題材にしたわけだが)。その意味においては、松の実を使っているということがこのソース名の根拠と見ることも不可能ではないだろう。しかしながら、それを証明する文献、史料があるかは不明。

7) 焦がさないように弱火で混ぜながら熱で砂糖を溶かしていく。

8) トルコ産の白い干しぶどう。

9) ギリシア産の黒い小粒の干しぶどう (モスクワ風ソース参照)。

10) ルーアンは野生の colvert コルヴェール、いわゆる青首鴨を家禽化したルーアン鴨の産地として有名。

11) pocher ポシェする。



このソースの特質……エシャロットを加えた赤ワインを煮詰めたものに鴨の生レバーのピュレを加えたもの。

……ルーアン産鴨のローストには、いわば必須と……でもいいソース。

### ソース・サルミ<sup>1)</sup>

#### Sauce Salmis

ソースというよりはむしろクリ<sup>2)</sup>と呼んだほうがいいこのソースの作り方はどんな場合も一点を除いて変換することがない。それは、このソースを合わせるジビエ（鳥）の種類によって、つまり普通に肉料理として扱えるジビエか、肉断ち<sup>3)</sup>の際の食材として扱えるもの<sup>4)</sup>かで、どんな液体を用いるかということだけだ。

細かく刻んだミルポワ 150 g をバターでじっくり色付くまで炒める。そこに、その料理で用いているジビエの手羽と腿の皮、ガラを細かく刻んで加える。白ワイン 3 dl を注ぎ、1/3 量まで煮詰める。ソース・ドゥミグラス 8 dl を加えて、約 45 分間弱火で煮込む。漉し器で漉すが、その際に香味野菜とガラのエキスを<sup>5)</sup>得られるよう、強く押し絞ってやること。こうして出来たクリを、このソースを合わせる鳥と同種のものでとったフォン 4 dl で薄める。

ジビエが肉断ちの食材と見做されるもので、なおかつそれを厳格に守って作らなければならない場合は、このときフォンの代わりにマッシュルームの茹で汁を用いればいい。

約 45 分～1 時間、弱火にかけて浮いてくる不純物を

丁寧に取り除いてやる<sup>6)</sup>。さらにソースを 2/3 以下の量になるまで煮詰める。これにマッシュルームの茹で汁とトリュフエッセンスを適量加えて丁度いい濃度になるよう調製する。

布で漉し、軽くバターを加えて仕上げる<sup>7)</sup>。

【原注】仕上げの際に、ソース 1 L あたりバター約 50 g を加えるが、これは任意。

### ソース・トルチュ<sup>8)</sup>

#### Sauce Tortue

2<sup>1</sup>/<sub>2</sub> L の仔牛のフォンを鍋で沸かし、セージ 3 g、マジョラム 1 g、ローズマリー 1 g、バジル 2 g、タイム 1 g、ローリエの葉 1 g、パセリの葉 1 つまみ、マッシュルームの切りくず 25 g を投入する。蓋をして 25 分間煎じる。こうして煎じた液体を漉す 2 分前に大豆のこしょう 4 個を加える。

布で漉し、ソース・ドゥミグラス 7 dl にトマトソース 3 dl を合わせたものに、上記で煎じた液体を、風味が際立つ程度に適量加える。<sup>3</sup>/<sub>4</sub> 量まで煮詰め、布で漉す。仕上げにマデラ酒 1 dl とトリュフエッセンス少々を加え、さらにカイエンヌで風味を引き締める。

【原注】このソースはある程度まとまった量で作る必要がある。カイエンヌを使う指示があるからだ。それでも、カイエンヌはとても気をつけて量を加減する必要がある<sup>9)</sup>。

- 1) 語源は「ごった煮」を意味する *salmigondis* とするのが定説のようだが、*salmigondis* がその意味で用いられるようになったのは 19 世紀以降と考えられ、それ以前は *ragoût* ラグーと同義と見なされていた。ラグーはその語源の意味が「食欲をそそるもの」であり、17 世紀に、それまでポターージュと呼ばれていた煮込み料理についてラグーの名称をつけることが流行した。また、*salmigondis* の古い語形のひとつ *salmigondin* は 16 世紀の小説家フランソワ・ラブレー『ガルガンチュアとパンタグリュエル』の「第四の書」において用いられているが、日本語の「ごった煮」のニュアンスとはかなり違う意味で、美味な料理のひとつとして挙げられている。いずれにしても、*salmigondin*, *salmigondis* というラグーの別称が、ある時期から鳥類を材料にしたものに限定されるようになったことは確かで、カレームの『19 世紀フランス料理』では *salmis* の語で、野鳥などのラグーを呼んでいる。例えば「ベカスのサルミ」「ペルドローのサルミ」など。カレームとエスコフィエを比較すると、しばしばカレームにおいてラグーとしてひとまとめにされていた料理とソースの組合せが、『料理の手引き』においては、例えばガルニチュール・フィナンシエールとソース・フィナンシエールのように、別々の項目に分離されているものが多くある。
- 2) *coulis* < *couler* クレ「流れる」から派生した語だが、料理用語としては、やや水分の多いピュレと理解するといひ。ここでは二つの解釈が可能で、ひとつはポターージュ・クリに近いという意味。もうひとつは「昔ながらのソース」の意。後者の場合、エスコフィエが「古典料理」と呼ぶ 17、18 世紀においてソースのことをクリと呼んでいたのを踏まえていると考えられる。
- 3) 小斉のこと。カトリックの習慣として（厳密な教義ではない）四旬節（復活祭までの 46 日間）や毎週金曜などに行なわれる、肉食を断つ行為のこと。
- 4) ある種の水鳥はイルカと同様に魚と同等のものと思われ、小斉の場合にも食材として認められていた。具体的にはハシロ鴨、オナガ鴨、サルセル鴨など。もっとも、水鳥を肉断ちの際の食材として扱うというのは一種の詭弁ともいえないかもしれないわけで、このソースを作る際に魚料理用ソース・エスパニョールをベースとしたソース・ドゥミグラスを使うとは考え難く、本文にあるようにフォンの代用としてマッシュルームの茹で汁を用いるという指示を守るだけで、厳密に小斉の料理として成立するレシピと言えるかは疑問の残るところだ。
- 5) 原文 *quintessence* カンテサンス。本来の意味は錬金術という「第五元素」。16 世紀の作家フランソワ・ラブレーは存命当時、自著を筆名「カンテサンス抽出をなし遂げたアルコフリパス師」で出版していた時期がある。もっとも、このカンテサンスという語自体は中世以来、料理において「エキス」「美味しさの本質」程度の意味でよく用いられた。
- 6) *dépouiller* デパイエ。現代では *écumer* エキュメの語を用いる現場が多い。
- 7) 原文は *légèrement beurrer* でありそのまま訳したが、現代の調理現場では *monter au beurre* バターでモンテする、という表現がよく使われる。
- 8) *tortue* トルチュは海亀のこと。古くは海亀料理用のソースだったが、19 世紀以降は仔牛の頭肉料理に合わせるのが一般的になった。
- 9) フランス料理において（というよりも一般的なフランス人にとって）は、唐辛子の辛さは嫌われる傾向が非常に強い。



## ソース・ヴェネゾン<sup>1)</sup>

### Sauce Venaison

完全に仕上げた「**ジビエ用ソース・ポワヴラード**」<sup>3)</sup>4 Lに、グロゼイユのジュレ大さじ3杯強を生クリーム1dlで溶いてから加える。

グロゼイユのジュレと生クリームを加えるのは、鍋を火から外して、提供直前にすること。

……大型ジビエ料理用。

## 赤ワインソース

### Sauce au Vin rouge

「赤ワインソース」という場合、煮詰めてからブルマニエでとろみを付けるブルゴーニュ風の仕立てか、魚を煮るのに用いた赤ワインを使うことが特徴である「ソース・マトロット」のいずれかから派生したものなのとは言うまでもない。もともと、後者の場合はワインの風味は失われてしまっていてソースの水気と味付けの意味しか持っていないと言える。両者どちらもまさしく「赤ワインソース」だが、**ブルゴーニュ風ソース**と**ソース・マトロット**はそれぞれ作り方も用途も違うから別々の名称として、この「茶色い派生ソース」の節で説明した。

筆者としては、本当の「赤ワインソース」は以下のように作るものと考えている。

ごく細かく刻んだ標準的な**ミルポワ**125gをバターで炒める。良質の赤ワイン1/2Lを注ぐ。半量になるまで煮詰める。つぶしたんにく1片、**ソース・エスパニョル**7<sup>1</sup>/<sub>2</sub>dlを加え、12~15分、火ひかけて浮いてくる不純物を丁寧に取り除く<sup>2)</sup>。

布で漉し、バター100gとアンチョビエッセンス小さじ1杯、カイエンヌ1つまみを加えて仕上げる。

……魚料理用ソース。

## ソース・ザンガラ<sup>3)</sup>A

### Sauce Zingara A

このソースは古典料理のガルニチュール・ザンガラとはまったく関係がない。むしろイギリス料理に由来し、本書でもイギリス風ソースの節において似たようなものはいくつも採り上げている。

ヴィネガー2<sup>1</sup>/<sub>2</sub>dlにエシャロットのみじん切り大さじ1杯を加えて半量になるまで煮詰める。**茶色いジュ**7dlを注ぎ、バターで揚げたパンの身160gを加える。弱火で5~6分間煮る。パセリのみじん切り大さじ1杯とレモン<sup>1</sup>/<sub>2</sub>個分の搾り汁を加えて仕上げる。

## ソース・ザンガラ B

### Sauce Zingara B

白ワイン3dlとマッシュルームの茹で汁3dlを合わせて<sup>1</sup>/<sub>3</sub>量になるまで煮詰める。

**ソース・ドゥミグラス**4dlと**トマトソース**2<sup>1</sup>/<sub>2</sub>dl、**白いフォン**1dlを注ぐ。浮いてくる不純物を徹底的に取り除きながら5~6分火かける。

仕上げに、カイエンヌ1つまみで風味を引き締め、太さ1~2mmの千切りにした<sup>4)</sup>ハム（脂身のないところ）と赤く漬けた舌肉70gおよびマッシュルーム50g、トリュフ30gを加える。

……仔牛料理、鶏料理用。

1) ノロ鹿 chevreuil や猪 sanglier などの大型ジビエのこと。なおニホンジカやエゾジカは cerf に分類され、フランス料理の食材としてはあまり高く評価されない傾向がある。

2) dépeuiller デブイエ ⇔ écuemer エキュメ。

3) もとの語形は zingaro ザンガロ、またはデンガロ。ジブシー、ボヘミアンの意。料理ではパプリカ粉末やカイエンヌを用いたものに命名されることが多い。

4) julienne ジュリエンス。

## ホワイト系の派生ソース

### PETITES SAUCES BLANCHES, COMPOSÉES ET DE RÉDUCTIONS

#### ソース・アルビュフェラ<sup>1)</sup>

##### Sauce Albuffera

ソース・シュブレーム 1 L あたりに、溶かしたブロード色のグラスドヴィアンド 2 dl と、標準的な分量比率で作った赤ピーマンバター 50 g を加える。

#### ソース・アメリケーヌ<sup>2)</sup>

##### Sauce Américaine

このソースはオマール・アメリケーヌという料理そのものと言っている（「魚料理」の章、甲殻類、オマール・アメリケーヌ参照）。

このソースは通常、オマール<sup>3)</sup>の身をガルニチュールとした魚料理に添えられる。オマールの身をやや斜めになるよう厚さ 1 cm 程度の輪切りにし<sup>4)</sup>、魚料理のガルニチュールとして供するわけだ。

#### アンチョビソース

##### Sauce Anchois

ノルマンディー風ソース 8 dl を、バターを加える前

の段階まで作る。アンチョビバター 125 g を混ぜ込む。アンチョビのフィレ 50 g を洗い、よく水気を絞ってから小さなさいの目に切ったのを加えて仕上げる。

……魚料理用。

#### ソース・オーロール<sup>5)</sup>

##### Sauce Aurore

ヴルテに真っ赤なトマトビュレを加えたもの。分量は、ヴルテが  $\frac{3}{4}$  に対し、トマトビュレ  $\frac{1}{4}$  とする。仕上げる、ソース 1 L あたり 100 g のバターを加える。

……卵料理、仔牛、仔羊肉の料理、鶏料理用。

#### 魚料理用ソース・オーロール

##### Sauce Aurore maigre

魚料理用ヴルテに、上記と同じ割合でトマトビュレを加える。ソース 1 L あたりバター 125 g を加えて

- 1) ナポレオン軍の元帥、ルイ・ガブリエル・スーシェ Louis-Gabriel Suchet, duc d'Albufera (1770~1826) のこと。スペイン戦役の際にそれまでの軍功を称えられ、ナポレオンが 1812 年にアルビュフェラ公爵位を新設して授けた。帝政期の英雄のひとりであり、アルビュフェラおよびスーシェの名を冠した料理がいくつかある。1814 年に帝政が崩壊した後も軍務、政務に携わり、最終的にフランス貴族院議員の地位を得た。アルビュフェラ公爵位については、1815 年 7 月 24 日の勅令において正式に抹消されている。このソースの特徴は赤ピーマン（パプリカ）を加熱してなめらかにすり潰し、バターに練り込んだものを使う点にあるが、どのような経緯でこのソースに赤ピーマンを用いるようになったのかは不明。ただし、このソースを合わせる「肥鶏 アルビュフェラ」は詰め物（ファルス）に米を用いるが、アルビュフェラは湖の周辺の湿地帯で米の生産がおこなわれているという点では一応の関連性が認められよう。なお、アルビュフェラはバレンシアの湖とそこに形成された潟であり、現在はバレンシア州のアルブフェーラ自然公園となっている。
- 2) アメリケーヌという名称の由来は諸説あるが、19 世紀フランスの料理人ピエール・フレス Pierre Frayssé がアメリカで働いた後にバリーで 1853 年に開いたレストラン「シェ・ピーターズ」でこの料理名で提供したというのが定説。ただし、1853 年以前にレストラン「ボヌフォワ」に「ラングドック産オマール ソース・アメリケーヌ添え」というメニューあり、フレスはその料理に改変を加えたか、名前だけをシンプルに「アメリケーヌ」とした程度という説もある。かつては、オマールの主産地のひとつブルターニュ地方を意味する古い形容詞 armoricain(e) アルモリカン、アルモリケーヌの音が変わった料理名だと主張されることもあったが、19 世紀には南仏産が中心であった程度じっくりと食べ手は楽しむことが出来ただろう。その後の文献ではオドモもカレームもこの名称のソースには触れておらず、デュボワとベルナルの『古典料理』（1867 年）において、Sauce à l'Aurore として、ベジャメルソースに煮詰めた仔牛のブロンドとマッシュルームの茹で汁、トマトソースを添加して、スライスしたマッシュルームを加えるというレシピが掲載されている (p.57)。初期のロシア式サービスにおいては、客に料理を最初に見せてまわり、その後切り分けて供するという方式であったために、おそらくヴィアールの「ソース・オーロール」では一瞬で失なわれてしまったであろう美しさのポイントのソース色合いに代えたことで、最後の食べ手の分を取り分けるまで美しさを維持できるようになった、つまりは初期のロシア式サービスの欠点を補うものとなったと考えられよう。なお、19 世紀はトマトが食材として急激に普及、流行した時代であったこともこのソースの変化と関係があると思われる。
- 3) homard ロブスターのこと。なお高級料理では 800~900 g 程度の大きなものが好んで使用される。
- 4) escalopper エスカロペ。エスカロップに切る。ここで使用するオマールは 900g~1kg 程度のものを想定していることに注意。
- 5) 夜明けの光、曙光のこと。オーロラの意味もあるため、日本では「オーロラソース」と呼ばれることもあるが、マヨネーズとトマトケチャップを同量で混ぜ合わせたものもそう呼ばれることが多いので注意。なお、Sauce à l'aurore というほぼ同じ名称のものが 1806 年刊ヴィエール『帝国料理の本』に掲載されているが、これはヴルテにレモン果汁とこしょう、ナツメグを加えたものを用意し、別に茹で卵の黄身を用意する。茹で卵の黄身を濾し器に押し付けるようにして麺状に引き出す。提供直前に、ソースにこの黄身の麺を加える。ここからは決して沸騰させないこと、というもの (p.59)。麺状にした卵黄を朝の光の筋に見立てたもので、鍋で加えるか、ソース入れにソースを入れた上に載せるなどの方法も考えられるが、いずれにしてもヴィアールの時代（19 世紀初頭）はフランス式サービスつまり大きな食卓に何種類の料理を一度に並べるという方式だったために、このソースの見た目の美しさをある程度じっくりと食べ手は楽しむことが出来ただろう。その後の文献ではオドモもカレームもこの名称のソースには触れておらず、デュボワとベルナルの『古典料理』（1867 年）において、Sauce à l'Aurore として、ベジャメルソースに煮詰めた仔牛のブロンドとマッシュルームの茹で汁、トマトソースを添加して、スライスしたマッシュルームを加えるというレシピが掲載されている (p.57)。初期のロシア式サービスにおいては、客に料理を最初に見せてまわり、その後切り分けて供するという方式であったために、おそらくヴィアールの「ソース・オーロール」では一瞬で失なわれてしまったであろう美しさのポイントのソース色合いに代えたことで、最後の食べ手の分を取り分けるまで美しさを維持できるようになった、つまりは初期のロシア式サービスの欠点を補うものとなったと考えられよう。なお、19 世紀はトマトが食材として急激に普及、流行した時代であったこともこのソースの変化と関係があると思われる。

仕上げる。

……魚料理用

## バイエルン風ソース

### Sauce Bavaroise

ヴィネガー 5 dl にタイムとローリエの葉少々とパセリの枝 4 本、大粒のこしょう 7〜8 個と、おろした<sup>1)</sup>レフォール<sup>2)</sup> 大さじ 2 杯を加え、半量になるまで煮詰める。

この煮詰めた汁に卵黄 6 個を加え<sup>3)</sup>、**オランダーズソース**を作る要領で、バター 400 g と大さじ 1½ 杯の水を少しずつ加えながら、ソースがしっかり乳化するまで混ぜていく。布で漉す。

**エクルヴィスバター** 100 g と泡立てた生クリーム大さじ 2 杯、さいの目に切ったエクルヴィス<sup>4)</sup>の尾の身を加えて仕上げる。

……魚料理用のこのソースは、ムスのような仕上りにすること。

## ソース・ペアルネーズ<sup>5)</sup>

### Sauce Béarnaise

白ワイン 2 dl とエストラゴンヴィネガー 2 dl に、エシャロットのみじん切り大さじ 4 杯、枝のままの粗く刻んだエストラゴン 20 g、セルフィユ 10 g、粗挽きこしょう 5 g、塩 1 つまみを加えて、1/3 量になるまで煮詰める。

煮詰まったら、数分間放置して温度を下げる。ここに卵黄 6 個を加え、弱火にかけて、生のバター（あるいはあらかじめ溶かしておいてもいい）500 g を加えて軽くホイップしながらめらかなになるよう混ぜる。

卵黄に徐々に火が通っていくことでソースにとろみが付くので、絶対に弱火で作業をすること<sup>6)</sup>。バターを混ぜ込んだら、布で漉して味を調える。カ

イエンヌごく少量を加えて風味を引き締める。仕上げるに、刻んだエストラゴン大さじ 杯とセルフィユ大さじ 1½ 杯を加える。

……牛、羊肉のグリル用。

**【原注】** このソースを熱々で提供しようとは考えないこと。このソースは要するにバターで作ったマヨネーズなのだ。ほの温い程度で充分であり、もし熱くし過ぎてしまうと、ソースが分離してしまう。そうならしまったら、冷水少々を加えて泡立て器でホイップして元のあるべき状態に戻してやること。

## トマト入りソース・ペアルネーズ / ソース・ショロン<sup>7)</sup>

### Sauce Béarnaise tomatee, dite Sauce Choron

ソース・ペアルネーズを上記のとおりに作るが、最後にセルフィユとエストラゴンのみじん切りは加えない。充分固めて作っておき、ソースの 1/4 量の、充分に煮詰めたトマトピューレを加える。ソースの濃度が丁度いい具合になるよう注意すること。

……トゥルヌド・ショロン、および他のさまざまな料理に添える。

## グラスドヴィアンド入りソース・ペアルネーズ / ソース・フォイヨ<sup>8)</sup> / ソース・ヴァロワ<sup>9)</sup>

### Sauce Béarnaise à la glace de viande, dite Foyot, ou Valois

標準的な**ソース・ペアルネーズ**を上記の分量で、固めに作る。溶かした**グラスドヴィアンド**を少しずつ加えて仕上げる。

……牛、羊肉のグリル用。

## ソース・ベルシー<sup>10)</sup>

### Sauce Bercy

細かくみじん切りにしたエシャロット大さじ 2 杯をバターでさっと色付かないよう炒める。白ワイン

1) 原文 râpé < râpe ラーブと呼ばれる器具を用いておろすが、日本のおろし金と目の大きさが違うので注意。多くの場合、マンドリース mandrine と呼ばれる野菜用スライサーにこの機能が付属している。

2) raifort 西洋わさび、ホースラディッシュ。

3) 卵黄を加える前に一度漉しておいたほうがいいだろう。

4) ざりがにのこと。通常はヨーロッパザリガニ *écrevisse à pattes rouges* エクルヴィスアパットルージュを指す。高級食材としてとても好まれている。現在は代用として *écrevisse de Californie* エクルヴィスドカリフォルニア（ウチダザリガニ）が用いられることもある。日本在来のニホンザリガニや、外来種が多く生息しているアメリカザリガニは通常、フランス料理には用いられない。いずれもジストマ（寄生虫）のリスクがあるため、生食は厳禁。

5) ペアルヌは旧地方名で、フランス南西部、現在のピレネー・アトランティック県のことを指すが、このソースはその地方とまったく関係がない。19 世紀パリ郊外のレストラン「バヴィオン・アンリ IV」が店名に掲げているアンリ四世がペアルヌのポー生まれであることにちなんで命名したソース名というのが定説。

6) 卵黄をソースのとろみ付けに用いること自体は中世から行なわれていた。開放式の炉の上に鍋を鉤で吊っている場合は鍋を火から外す必要があったが、その後の閉鎖式かまどや、オーブンの機能も備えた *fourneau* フルノー（日本の調理現場ではストーブあるいはピアノと呼ばれることも多い）の場合、熱の弱い部分に鍋を置けばいいことになる。また、このソースのようにバターが中心となる場合は水よりも高温になりやすいので本文にあるように注意が必要だが、ブランクットのような水が中心のものに卵黄を加えてとろみをつける場合は、生クリームなどでよく溶きほぐした卵黄（この時点でしっかり乳化させておくのがポイント）を、鍋全体をしっかりと混ぜながら加える場合は比較的高温でも問題なくきれいにとろみが付く。

7) 19 世紀後半、パリで有名レストラン「ヴォワザン」の料理長を務めたアレクサンドル・ショロン Alexandre Choron（1837〜1924）。自ら考案し、命名したという。

8) 19 世紀〜20 世紀初頭にパリにあったレストランおよびそのオーナーシェフの名。このソースを使った「仔牛の背肉・フォイヨ」がスペシャリテだったという。

9) ヴァロワ王家およびヴァロワ公爵であったルイ・フィリップ（7 月王政期のフランス国王。在位 1830〜1848）にちなんだ名称。前出のフォイヨはレストランを開く以前、ルイ・フィリップに仕えていた。

10) パリ東部、セヌ川左岸にある地名。かつては荷揚げ港があり、19 世紀には小さなレストランが多く店を構えていたという。

2½ dl と魚のフュメか、このソースを合わせる魚の茹で汁 2½ dl を注ぐ。

2/3 量弱まで煮詰めたら、**ヴァルデ** ¾ L を加える。ひと煮立ちさせてから、鍋を火から外し、バター 100 g とパセリのみじん切り大さじ 1 杯を加えて仕上げる。

### ソース・オ・ブール / ソース・バタルド<sup>1)</sup>

#### Sauce au Beurre, dite Sauce Bâtarde

小麦粉 45 g と溶かしバター 45 g をよく混ぜ合わせ粘土状にする。そこに、7 g の塩を加えた熱湯 7½ dl を一気に注ぎ、泡立て器で勢よく混ぜ合わせる。とろみ付け用の卵黄 5 個を生クリーム大さじ 1½ 杯でゆるめたものと、レモン汁少々を加える。

布で漉し、鍋を火から外して、良質なバター 300 g を加えて仕上げる。

……アスパラガスや、さまざまな茹でた魚<sup>2)</sup>

【原注】 このソースはとろみを付けた後、湯煎にかけておき、提供直前にバターを加えるようにするといひ。<sup>3)</sup>

### ソース・ボヌフォワ / 白ワインで作るボルドー風ソース

**Sauce Bonnefoy, ou Sauce Bordelaise au vin blanc**  
 ブラウン系の派生ソースの節で採り上げた、赤ワインを用いて作る**ボルドー風ソース**とまったく同じ作り方だが、赤ワインではなく、グラーヴサソテルヌの白ワインを用いる。また**ソース・エスパニョル**ではなく**標準的なヴァルデ**を使うこと。

このソースは仕上げに、みじん切りにしたエストラゴンを加える。

……魚のグリル、白身肉のグリル用。

### ブルターニュ風ソース

#### Sauce Bretonne

長さ 3〜5 cm 位の、ごく細い千切り<sup>4)</sup>にしたポワローの白い部分 30 g とセロリの白い部分 30 g、玉ねぎ 30 g、マッシュルーム 30 g をバターで完全に火が通るまで鍋に蓋をして弱火で蒸し煮する<sup>5)</sup>。

魚の**ヴァルデ** ¾ L を加え、しばらく弱火にかけて浮いてくる不純物を丁寧に取り除く<sup>6)</sup>。生クリーム大さじ 3 杯とバター 50 g を加えて仕上げる。

### ソース・カノティエール<sup>7)</sup>

#### Sauce Canotière

淡水魚を煮るのに用いた、白ワイン入りクールブイオンを 1/3 量に煮詰める。クールブイオンにはしっかり香り付けしてあり塩はごく少量しか入っていないこと。

1 L あたり 80 g のブールマニエを加えてとろみを付ける。軽く煮立たせたら、鍋を火から外してバター 150 g とカイエンヌごく少量を加えて仕上げる。

……淡水魚のクールブイオン煮用。

【原注】 バターでグラセした小玉ねぎと小ぶりのマッシュルームを加えると、「**白いソース・マトロツト**」の代用となる。

### ケイパー入りソース

#### Sauce aux Câpres

上記の**ソース・オ・ブール**に、ソース 1 L あたり大さじ 4 杯のケイパーを提供直前に加える。

……いろいろな種類の魚を煮た料理に用いる。

### ソース・カルディナル<sup>8)</sup>

#### Sauce Cardinal

**ベシャメルソース** ¾ L に、(1) 魚のフュメとトリュフエッセンスを同量ずつ合わせて ¾ 量まで煮詰めたものを 1½ dl 加える。(2) 生クリーム 1½ dl を加える。

鍋を火から外し、真っ赤に作った**オマルバター**を加え、カイエンヌごく少量で風味を引き締める。

……魚料理用。

### マッシュルーム入りソース

#### Sauce aux Champignons

マッシュルームを茹でた汁 3 dl を 1/3 量まで煮詰める。**ソース・アルマンド** ¾ L を加え、数分間沸騰させる。あらかじめ螺旋状に刻みを入れて整形<sup>9)</sup>してから茹でておいた真っ白で小さなマッシュルーム 100 g を加えて仕上げる。

……鶏料理用。魚料理に添えることもある。魚料理に合わせる場合は、ソース・アルマンドではなく**魚料理用ヴァルデ**を用いること。

1) バタルドは「雑種の、中間の」の意。卵黄とバターだけでとろみを付けるソース・オランダーズと似てはいるが小麦粉も使うことからこの名が付いたと言われている。なお、パンのバタール *bâtard* も同じ語だが、細いバゲットと太いドゥーリーヴルの「中間」の太さだからというのが通説。

2) 魚料理用**ソース・アシェ**訳注参照。

3) 本書には、日本でもかつて有名だった、エシャロットのみじん切りを加えたヴィネガーを煮詰めてバターを溶かし込んだ魚料理用ソース「ソース・ブールブラン」*Sauce (au) Beurre blanc* は収録されていない。このソース・ブールブランはナント地方やアンジュー地方で淡水魚アローズやプロシェに合わせる伝統的なソース。1890 年頃にナント地方の女性料理人クレマンス・ルフーヴルが、ソース・ペアルネーズを作るつもりが誤って卵を加えるのを忘れてしまった結果として出来たものだとも言われている。

4) *julienne* ジュリエンス。

5) *étuver* エチュヴェ。本来は油脂とごく少量の水分を加えて弱火で蒸し煮することだが、野菜については、バターだけを使う場合も多い。*étouffer* エトフフェとはほぼ同じ意味で用いられることも多い。

6) *dépouiller* デプイエ ≡ *écumer* エキュメ。

7) 小舟の漕ぎ手、の意。

8) カトリックの枢機卿（カルディナル）の衣が伝統的に赤いものであることと、オマルが「海の枢機卿」と呼ばれることに由来。

9) *tourner* トゥルネ。原義は「回す」。包丁を動かさずに材料の方を回すようにして切る、刻み目を入れることがこの用語の由来。マッシュルームの場合はその際に大量の切りくずが発生するので、それをソースなどの風味付けに利用することも多い。

**ソース・シャンティイ<sup>1)</sup>****Sauce Chantilly**

まれに「ソース・シャンティイ」の名で呼ばれることもあるが、これは後述の「**ソース・ムスリース**」に他ならない。

**ソース・シャトーブリヤン<sup>2)</sup>****Sauce Chateaubriand**

(仕上り 5 dl 分)

白ワイン 4 dl に、みじん切りにしたエシャロット 4 個分とタイム少々、ローリエの葉少々、マッシュルームの切りくず 40 g を加え、 $\frac{1}{3}$  量になるまで煮詰める。

**仔牛のジュ<sup>3)</sup>** 4 dl を加え、半量になるまで煮詰める。布で漉し、鍋を火から外して、メートルドテルバター 250 g と細かく刻んだエストラゴン小さじ  $\frac{1}{2}$  杯を加えて仕上げる。

……牛、羊の赤身肉のグリル用。

**白いソース・ショフロワ (標準)****Sauce Chaud-froid blanche ordinaire**

(仕上り 1 L 分)……**標準的なヴルテ<sup>4)</sup>  $\frac{3}{4}$  L、鶏でとった白いジュレ<sup>5)</sup> 6~7 dl、生クリーム<sup>6)</sup>  $\frac{4}{3}$  dl。**

厚手のソテー鍋にヴルテを入れる。強火にかけ、へうで混ぜながらジュレと用意した生クリーム  $\frac{1}{3}$  量を少しずつ加えていく。

所定の分量にするには、 $\frac{2}{3}$  量くらいまで煮詰めることになる。

味見をして、固さを確認する。これを布で漉す<sup>7)</sup>。生クリームの残りを少しずつ加え、ゆっくり混ぜながら、ショフロワに仕立てる食材を覆うのにいい固さ

になるまで冷ましてやる。

**ブロンドのソース・ショフロワ****Sauce Chaud-froid blonde**

上記と同様に作るが、ヴルテではなく **ソース・アルマンド** を用いる。また、生クリームの量は半分に減らすこと。

**ソース・ショフロワ・オーロール<sup>6)</sup>****Sauce Chaud-froid Aurore**

標準的な**白いソース・ショフロワ**を上記のとおり作る。そこに、真っ赤なトマトピューレを布で漉したものの  $\frac{1}{2}$  dl とパプリカ粉末 0.25 g を少量のコンソメで煎じた<sup>7)</sup>ものを加える。

……鶏のショフロワ用。

【原注】あまり鮮かな色にしたいくない場合は、パプリカを煎じた汁は数滴だけ加えるにとどめるといい。

**ソース・ショフロワ・ヴェールプレ****Sauce Chaud-froid au Vert-pre<sup>8)</sup>**

鍋に白ワイン 2 dl を沸かし、セルフイユとエストラゴン、刻んだシブレット、刻んだパセリの葉を各 1 つまみずつ投入する。蓋をして火から外し、10 分間煎じてから布で漉す。

最初に示したとおりの分量で**標準的なソース・ショフロワ**を作り、煮詰めながら、上記の香草を煎じた液体を少しずつ混ぜ込む。この段階で 1 L になるまで煮詰めておくこと。

ほうれんそうから採った緑の色素をソースに加え、**ほんのり薄い緑色**にする。

この色素を加える際にはよく注意して、上で示したとおりの色合いになるよう少しずつ投入すること。

1) 料理においては生クリームをホイップしたクリーム・シャンティイが有名だが、元来は、パリ北方に位置する町の名。17 世紀、コンデ公ルイ 2 世 (大コンデとも呼ばれる) の城館があり、ヴァテル Vatel (Watel) (1635~1671) がメートルドテルとして仕えていた。その館でルイ 14 世をはじめとする約千名もの賓客を招いて開かれた数日にわたる宴会の際には、食材の魚が少ししか届かないと誤解したヴァテルは責任をとるために自殺したと言われている。なお、魚はその後すぐに大量に館に届けられたという。ヴァテルという人物についての記録は少ないが、この逸話は非常に有名で、2000 年にジェラルド・ドバルデュール主演で映画化された。料理や宴席での見世物、厨房の様子、16 世紀以来珍重された鮎細工などの歴史考証がとてもしっかりしており、一見に値する。

2) 料理において通常、シャトーブリヤンは牛フィレの中心部分を 3cm 程度の厚さに切ったものを指す。この名称の由来には主に 2 説あり、ひとつはフランスロマン主義文学の父と言われる小説家フランソワ・ルネ・シャトーブリヤン François René Chateaubriand (1768~1848) の名を冠したというもの。ちなみにフランスロマン主義文学の母と呼ばれているのはスタール夫人 Anne Louise Germaine de Staël (1766~1817)。料理におけるシャトーブリヤンという名の由来のもうひとつの説は、ブルターニュ地方で畜産物の集積地であったシャトーブリヤン Châteaubriant という地名に由来するというもの。なお、本書の初版および第四版では Chateaubriand の綴り、第二版は Châteaubriant であり、第三版は Châteaubriand という奇妙な綴りとなっている。

3) 本書では「仔牛の茶色いジュ」のレシピは掲載されているが、仔牛の「白い」ジュについての言及はない。ここでは通常の仔牛の茶色いジュを用いればいい。また、**ソース・コルペール**の項 (第二版で加えられた) で、ブル・コルペールとこのソースを比較するにあたり、このソースを「軽く仕上げたグラスドヴィアンドにバターとパセリのみじん切りを加えたもの」と述べている (**ソース・コルペール**本文参照)。このため、なぜこのソース・シャトーブリヤンが「ブラウン系の派生ソース」の節ではなく「ホワイト系の派生ソース」に分類されているのか疑問が残るところ。

4) フランスの生クリームについては**ソース・シュブレーム**訳注参照。

5) 粘度の高いソースなどを布で漉す方法については、**ヴルテ**訳注参照。

6) 夜明け、曙光の意。

7) infuser アンフュゼ。煮出す、煎じる、の意。

8) 緑の野原、草原、の意。

1) 日本語では鶏と一言で済ませるが、フランス語では poussin ブサン (ひよこ、ひな鶏)、poulette プレット (若い雌鶏)、poulet プレ (若鶏)、poule プール (雌鶏)、poulet de grain ブレドグラン (50~70 日の若鶏)、poulet reine プレレーヌ (若鶏と肥鶏の中間のサイズでソテーやローストにする)、poulet quatre quarts プレカトルカル (45 日程で食用にする)、poularde プラルド (肥鶏、1.8kg 以上のものが多く、AOC を取得している産地もある)、chapon ジャボン (去勢鶏、最大で 6kg 程になるというが、肉質は雌鶏に近く、高級品とされている)、coq コック (雄鶏) など細かく分類されている。

このソースは各種の鶏<sup>1)</sup>のショフロワ、とりわけ「ショフロワ・ブランタニエ」に用いる。

### 魚料理用ソース・ショフロワ

#### Sauce Chaud-froid maigre

作り方の手順と分量は標準的なソース・ショフロワとまったく同じだが、以下の点を変更する。(1) 通常の**ヴァルテ**ではなく**魚料理用ヴァルテ**を用いる。(2) 鶏のジュレではなく白い魚のジュレを用いること。

【原注】一般的に、このソースは魚のフィレやエスカロップ、甲殻類に**コーティング用マヨネーズ**の代わりとして用いることをお勧めする。コーティング用マヨネーズにはいろいろ不都合な点があり、そのうちの最大のものは、ゼラチンが溶けるにつれて油が浸み出してきてしまうことだ。こういう不都合はこの魚料理用ソース・ショフロワを使う場合には出てこない。このソースは風味も明確ですっきりしているからコーティング用マヨネーズよりも好ましいだろう。

### ソース・シヴリ<sup>2)</sup>

#### Sauce Chivry

白ワイン 1<sup>1</sup>/<sub>2</sub> dl 以下を各 1 つまみずつ投入する<sup>3)</sup>  
……セルフイユ、パセリ、エストラゴン、シブレット、時季が合えばサラダバーネット<sup>4)</sup>の若い葉。蓋をして鍋を火から外し、10 分間煎じる<sup>5)</sup>。布で絞るようにして 漉す。

こうしてハーブ類を煎じた液体を、あらかじめ沸かしておいた**ヴァルテ** 3/4 L に加える。火から外し、**パール・シヴリ** 100 を加えて仕上げる（**合わせバターの節**参照）。

……ボシェ<sup>6)</sup>あるいは茹でた鶏の料理用。

【原注】サラダバーネットは生育するにつれて苦味が強くなるので、必ず若いものを使うこと。

### ソース・ショロン

#### Sauce Choron

トマト入りソース・パールネーズ参照。

### ソース・クレーム

#### Sauce à la Crème

**ベシャメルソース** 1 L に生クリーム 2 dl を加えて、ヘラで混ぜながら強火で、全体重の 3/4 になるまで煮詰める。

布で漉す<sup>7)</sup>。フレッシュなクレーム・ドゥーブル<sup>8)</sup> 2<sup>1</sup>/<sub>2</sub> dl とレモン果汁半個分を少しずつ加えて仕上げる。

……茹でた魚、野菜料理、鶏、卵料理用。

### ソース・クルヴェット<sup>9)</sup>

#### Sauce aux Crevettes

**魚料理用ヴァルテ**または**ベシャメルソース** 1 L に、生クリーム 1<sup>1</sup>/<sub>2</sub> dl と**魚のフェム** 1<sup>1</sup>/<sub>2</sub> dl を加える。火にかけて 9 dl になるまで煮詰める。鍋を火から外し、ブル・ルージュ 25 g（ソース全体に淡いピンクの色合いを付けるのが目的）を足したクルヴェットバター 100g を加える。殻を剥いたクルヴェットの尾の身大さじ 3 杯を加え、カイエンス 1 つまみで風味を引き締めて仕上げる。

……魚料理およびある種の卵料理用。

### カレーソース

#### Sauce Currie

以下の材料をバターで軽く色付くまで炒める……玉ねぎ 250 g、セロリ 100 g、パセリの根<sup>10)</sup> 30 g、これらはすべてやや厚めにスライスする。タイム 1 枝とローリエの葉少々、メース少々を加える。小麦粉 50g とカレー粉<sup>11)</sup> 小さじ 1 杯弱を振り入れる。小麦粉が色付かない程度に炒めて火を通したら、白いコンソメ 3/4 L を注ぐ。沸騰したら、弱火にして約 45 分煮る。軽く押し絞るように布で漉す。ソースを温めて、浮いてきた油脂は取り除き<sup>12)</sup>、湯煎にかけておく。

……魚料理、甲殻類、鶏、さまざまな卵料理に合わせる。

2) 19 世紀フランスの作家フレデリック・スリエ Frédéric Soulié（1800～1847）の劇『ディアヌ・ド・シヴリ』*Diane de Chivry* (1838 年) あるいは 1897 年に新聞「フィガロ」に掲載されたエルネスト・カベンデュの小説『ビビタパン』の登場人物名 Chivry にちなんだか、あるいはまったく別の人物の名を冠したもののかは不明。

3) 明記されていないが、この時点で白ワインは滯かしておく。

4) *pumprenelle* パンブルネル、和名ワレモコウ。

5) *infuser* アンフュゼ。

6) *pocher* 原則的には、沸騰しない程度の温度で加熱調理すること。この場合は、下処理した鶏一羽まるごとをぎりぎり入るくらいの大きさの鍋に入れて水あるいはケールブイオンを用いてゆっくり火を通す調理を意味している（温度管理が難しい場合はオープンを用いることもある）。

7) 粘度や濃度の高いソースを漉す方法については**ヴァルテ**訳注参照。

8) 乳酸菌酵させた濃度の高い生クリーム。詳しくは**ソース・シュブレーム**訳注参照。

9) 小海老のこと。フランスでよく料理に用いられるのは生の状態で甲殻が灰色がかった小さめの *crevettes grises* クルヴェット・グリーズと、やや大きめでピンク色の *crevettes roses* クルヴェット・ローズ。美味しい。ちなみに日本でよく食べられているブラックタイガーはフランス語にすると *crevette géante tigrée* と言う。

10) パセリには根パセリ *persil tubéreux* といって根が肥大する品種系統もある。平葉で、葉の香りはフランスで一般的なモスカルドタイプ（葉の縮れるタイプ）とやや異なる。イタリアンパセリのように用いることが可能。

11) カレーは植民地インドの料理としてイギリスに伝わり、18 世紀には C&B 社によって混合スパイスであるカレー粉が開発された。フランスはあまりインドやその他のカレーの食文化と接することもなかったために、こんにちでも「珍しい料理」の範疇にとどまっている。とはいえ、19 世紀にインドからアンティル諸島のうちの英領地域に連れて来られたインド人たちがカレーを伝え、それが広まってフランス領アンティールにおいてコロンボ *colombo* というカレーのバリエーションが成立した。コロンボはこんにちのフランスでも（インドのカレーとは別のものとして）比較的良好に知られたものとなっている（少なくとも *curry, currie* という語よりは一般的認知度が高いと言えるだろう）。

12) *dégraisser* デグレセ。



【原注】 ココナツミルクをソースに加えることもある。その場合、白いコンソメの1/4量をココナツミルクに代えること。

## インド風カレーソース

### Sauce Currie à l'Indienne

みじん切り<sup>1)</sup>にした玉ねぎ1個と、パセリ、タイム、ローリエ、メース、シナモン各少々をブーケガルニを、バターとともに弱火にかけて色付かないよう蒸し煮する。

カレー粉3gを振り入れ、ココナツミルク1/2Lを注ぐ。ウルテ1/2Lを加える（ソースを肉料理に合わせるか、魚料理に合わせるかで、ウルテも標準的なものを使うか、魚料理用を使うか決めること）。弱火で15分程煮る。布で漉し、生クリーム1dlとレモン果汁少々を加えて仕上げる。

【原注】 ここで示した量のココナツミルクは、生のココヤシの実700gをおろして、41/2dlの温めた牛乳で溶いて作る。それを布で強く絞って漉してから使うこと。

ココナツミルクがない場合には、同量のアーモンドミルクを用いてもいい。

インドの料理人によるこのソースの作り方はさまざま、基本だけが同じというものだ。

だが、本来のレシピがあったところで、使い物にはならないだろう。インドのカレーは我が国の大多数にとっては我慢ならぬものだろうから。ここで記した作り方は、ヨーロッパ人の味覚を勘案したもので、本来のものよりいい筈だ。

## ソース・ディプロマット<sup>2)</sup>

### Sauce Diplomate

既に仕上げておいたノルマンディ風ソース1Lに、オマールバター75gを加える。

さいの目に切ったオマールの尾の身大さじ2杯と同様にさいの目に切ったトリュフ大さじ1杯を加えて仕上げる。

……大きな魚一尾まるごとの<sup>3)</sup>料理用。

## スコットランド風ソース

### Sauce Ecossaïse

上記の分量どおりに作ったソース・クレーム9dlに以下を加えて作る。1~2mmの細さに千切りにしたにんじん、セロリ、さいいんげんをバターを加えて鍋に蓋をして弱火で蒸し煮し<sup>4)</sup>、白いコンソメに完全に浸したものを1dl。

……卵料理、鶏料理に添える。

## ソース・エストラゴン<sup>5)</sup>

### Sauce Estragon

エストラゴンの枝30gを粗く刻み<sup>6)</sup>、強火で下茹でする<sup>7)</sup>。水気をしっかりととり、エストラゴンをスプーンですり潰し、あらかじめ用意しておいたウルテを大さじ4杯加える。これを布で漉す。こうして作ったエストラゴンのビュレを鶏のウルテまたは魚料理用ウルテ1Lに混ぜ込む。どちらのウルテを使うから、合わせる料理によって決めること。味を調え、みじん切りにしたエストラゴン大さじ1/2杯を加えて仕上げる。

……卵料理、鶏肉料理、魚料理に合わせる。

## 香草ソース

### Sauce aux Fines Herbes

(仕上り5dl分)

あらかじめ2種のうちどちらかの方法(白ワインソース参照)で作っておいいた白ワインソース1/2Lに、エシャロットバター40gと、パセリ、セロリ、エストラゴンのみじん切りを大さじ1 1/2杯加える。

……魚料理用。

## ソース・フオイヨ

### Sauce Foyot

グラスドヴィアンド入りソース・ペアルネーズ参照。

1) 原文 *ciseler* シズレ。鋭利な刃物でみじん切りにすること、スライスすること。原義は「ハサミで切る」。なお、日本語でみじん切りに相当する用語には *hacher* アシェもある (*hache* 斧から派生した語)。後者は野菜の他、肉類を細かく刻む際にも用いられる。ミートチョッパーをフランス語では *hachoir* アショワールと呼ぶ。

2) 外交官風。の意。繊細で豪華な仕立ての料理に付けられる名称。

3) *relevé* ルルヴェ。17世紀~19世紀前半にスタイルとして完成したフランス式サービスでは、最初に、大きな食卓(しばしば長い楕円形)の両側の目立つ場所にポタージュが置かれ、その周囲にアントレ(煮込みやソテーなど今日では「メイン」にもなるもの)およびオールドゥーヴル(「作品でないもの」の意で、比較的簡単に小さな皿)が所狭しと並べられた。客はまずポタージュから食べはじめのが基本であり、そのポタージュの大きな器が空くと、それは下げられて、ポタージュのあった場所に、豪華な装飾を施した飾り台(*socle* ソークル)に載せられ、皿の周囲を飾るようにガルニチュールが配され(*bordure* ボルデュール)、主役である大きな塊肉や魚まるごと1尾の料理にはしばしば飾り串(*hâtelet* アトレ)が刺してある、きわめて壮麗な大皿料理が置かれた。ポタージュを取り上げた後に「より一層高くそびえ立つ(*relevé* ルルヴェした)もの、という意味でこの語が用いられるようになった。19世紀後半のロシア式サービスにおいても、まずポタージュが配られ、その後にオールドゥーヴル、アントレと続き、ルルヴェを供するという習慣はしばらくの間残っていた。このため、初版、第二版に付属している献立表、および第三版以降独立して出版された『メニューの本』にはルルヴェの語はしばしば見られる。1970年代ごろから宴席での大皿料理を給仕が取り分けるということが減り、厨房で銘々の皿に盛り付けをすることが一般化したために、こんにちでは滅多にこのスタイルの料理は作られる機会がない。

4) *étuver* エチュヴェ。

5) ヨモギ科のハーブ。詳しくは茶色い派生ソースのソース・シャスール訳注参照。

6) *concasser* コンカセ。

7) *blanchir* ブランシール。

## ソース・グロゼイユ<sup>1)</sup>

### Sauce Groseilles

緑色の濃いグーズベリー 500 g を銅の片手鍋で下茹でする。

5 分間煮立てたら、水気をきって、粉砂糖大さじ 3 杯と白ワイン大さじ 2~3 杯を加えて、完全に火をとます。布で漉す。

こうして出来たビュレに、ソース・オ・プール 5 dl を加え、よく混ぜる。

……このソースはグリルあるいはイギリス風<sup>2)</sup>に茹でた鯖によく合う。とはいえ、他の魚料理にも合わせてもいい。

【原注】このソースは緑色の房なりのグロゼイユ<sup>3)</sup>でも作ることが可能。

## オランダーズソース<sup>4)</sup>

### Sauce Hollandaise

大さじ 4 杯の水とヴィネガー大さじ 2 杯に、粗挽きこしょう 1 つまみと肌理の細かい塩 1 つまみを加えて、1/3 量まで煮詰める。この鍋を熱源のそばか、湯煎にかける。

大さじ 5 杯の水と卵黄 5 個を加える。生のまま、あるいは溶かしたバター 500 g を加えながらしっかりホイップする。ホイップしている途中で、水を大さじ 3~4 杯、少量ずつ足してやる。水を足すのは、軽やかな仕上りにするため。

レモンの搾り汁少々と必要なら塩を足して味を調え、布で漉す。

湯煎にかけておくが、ソースが分離しないように、温度は微温くしておく。

……魚料理、野菜料理用。

【原注】ヴィネガーを煮詰めて使うのは、いつも最高品質のものが使えるとはかぎらないからで、水は 1/3 量まで減らしたほうがいい。ただし、煮詰める作業を完全に省いてしまわないこと。

## ソース・オマール

### Sauce Homard

魚料理用ヴァルテ<sup>3/4</sup> L に、生クリーム 1 1/2 dl とオマールバター 80 g、赤いバター 40 g を加えて仕上げる。

……魚料理用。

【原注】このソースを魚 1 尾まるごとの料理に添える場合には、さいの目に切ったオマールの尾の身を大さじ 3 杯加える。

## ハンガリー風<sup>5)</sup>ソース

### Sauce Hongroise

大きめの玉ねぎ 1 個のみじん切りをバターで色付かないよう強火で炒める。塩 1 つまみとパプリカ粉末 1 g で味付けする。

このソースを添える料理に合わせて標準的なヴァルテあるいは魚料理用ヴァルテ 1 L を加え、数分間軽く煮立てる。

布で漉し、バター 100 g を加えて仕上げる。

このソースは淡いピンク色に仕上げるべきであり、その色を出しているのがパプリカ粉末だけによるものだというのに注意。

……仔羊や牛肉のノワゼット<sup>6)</sup>にとりわけよく合う。

卵料理、鶏料理、魚料理にも。

## 牡蠣入りソース

### Sauce aux Huitres

後述のノルマンディ風ソースに、ポシェ<sup>7)</sup>として周囲をきれいにした牡蠣の身を加えたもの。

- 1) 日本語で「すぐりの実」のことだが、こんにちでは「黒すぐり」の方が一般的かも知れない。黒すぐりはフランス語では cassis カシスと呼ばれる。一般的なグロゼイユにはフサスグリと呼ばれる groseille rouge グロゼイユ・ルーージュ（赤すぐり）と groseille blanche グロゼイユ・ブランシュ（白すぐり）の 2 種があり、どちらもブドウのように房になる。上記とは別に、このソースで用いられる groseille à maquereau グロゼイユマクロ（maquereau は鯖の意。日本では英語経由のグーズベリーまたはグーズペリーの名称でも呼ばれることが多い。単に西洋すぐりとも呼ぶ）という比較的大粒で薄く縞模様に入る種類もある。これは通常は緑色だが、まれに紫色になる変種もあるという。いずれもフランスでは料理や菓子作りによく用いられる。
- 2) à l'anglaise アラングレーズ。通常は塩適量を加えた湯で boil することを指す。
- 3) 一般的なフサスグリであれば白系統の「未熟果」を用いるということと解釈される。
- 4) ニューヨーク発祥の朝食メニューとして知られるエッグ・ベネディクト Egg Benedict に必ず用いられることで有名なうえ、一般的には「バターで作るマヨネーズ」のイメージが強いかも知れない。実際のところは、ラ・ヴァレース『フランス料理の本』（1651 年）において「アスパラガスの白いソース添え」Asperges à la sauce blanche というレシピにおいて、このオランダーズソースの原型ともいえるべきものが示されている。アスパラガスは固めに塩茹でする。「新鮮なバター、卵黄、塩、ナツメグ、ヴィネガー少々をよくかき混ぜる。ソースが清らかになったら、アスパラガスに添えて供する (p.238)」。簡潔な記述だが、これがオランダーズソースの原型であることは間違いないだろう。おそらくはラ・ヴァレース以前から存在していた可能性も否定できない。なお植物油を用いたマヨネーズが文献上で確認されるのが 18 世紀以降で、19 世紀初頭から爆発的に流行し、広まったもの。また、マヨネーズについては、現代ヨーロッパにおいても卵黄ではなく全卵を用いて作るほうが多数を占めている点が異なることに注意。なお、オランダーズとは「オランダ風」の意だが、なぜこの名称となったのかについては不明点が多い。また、2007 年版の『ラルース・ガストロノミック』では、オランダーズソースを作る際には温度に注意することと、よくメッキされた銅鍋かステンレス製の鍋を用いる必要があり、アルミ製の鍋だと緑色に変色する可能性があることに注意を促している (p.455)。
- 5) 原書でも用いられている語 paprika パプリカはハンガリー語。唐辛子、ピーマンの仲間であり、16 世紀以降 17 世紀にヨーロッパ全土に広まり、その土地ごとの風土に合わせて品種が多様化した。パプリカはとりわけ辛味成分をほとんど含んでいないのが特徴。ただし、ハンガリーの食文化において大きな役割を果たすようになったのは 19 世紀以降になってからと言われている。
- 6) noisette ロースの中心部分を円筒形に切り出して調理したもの。
- 7) pocher < poche ポシェ（ポケット）、からの派生語。ポーチドエッグを作る際に、ポケット状になるところからこの用語が定着した。沸騰しない程度の温度で加熱調理すること。

## インド風ソース

### Sauce Indienne

インド風カレーソース参照。

## ソース・イヴォワール

### Sauce Ivoire<sup>1)</sup>

ソース・シュブレーム 1 L に、ブロンド色の **グラスドヴィアンド** 大さじ 3 杯を加え、象牙のようなくすんだ色合いにする。

……ポシェした鶏に添える。

## ソース・ジョワンヴィル<sup>2)</sup>

### Sauce Joinville

**ノルマンディ風ソース** 1 L を、仕上げる直前の段階まで作る<sup>3)</sup>。エクルヴィスバター 60 g とクルヴェットバター 60 g を加えて仕上げる。

このソースを添える魚料理にガルニチュールが既にある場合は、これ以上は何も加えない。

ガルニチュールを伴わない大きな茹でた魚<sup>4)</sup>に添える場合には、細さ 1~2mm の千切りにした真黒なトリュフを大さじ 2 杯加えること。

【**原注**】同様のソースはいろいろあるが、最後の仕上げにエクルヴィスバターとクルヴェットバターを組み合わせて加える点がソース・ジョワンビルが他のものと違うポイント。

## ソース・ラギビエール<sup>5)</sup>

### Sauce Laguipière

上述のとおりに作った **ソース・オ・ブール** 1 L に、レモン 1 個の搾り汁と **魚のグラス** またはそれと同等に煮詰めた **魚のフュメ** 大さじ 4 杯を加える。

このソースは茹でた魚に添える。

【**原注**】カレームが考案したこのソースのレシピに、本書で加えた変更点はただ 1 箇所のみ、**鶏のグラス**ではなく魚のグラスに代えたことだけだ。さらに言うと、このソースはカレームによって「ソース・オ・ブール ラギビエール風」と名付けられたものだ<sup>6)</sup>。

1) 象牙、の意。

2) 19 世紀、7 月王政期の国王ルイ・フィリップの第 3 子、フランソワ・ドルレアン・ジョワンヴィル海軍大将（1818~1900）のこと。エクルヴィスとクルヴェットを用いた料理に彼の名が冠されたものがいくつかある。

3) すなわち、布で漉すところまで。

4) 魚の場合は、クールブイヨンを用いてやや低めの温度で煮たもの。**魚料理用ソース・アシェ** 訳注参照。

5) 18 世紀末~19 世紀初頭にかけて活躍したフランスを代表する料理人の名（?~1812）。はじめコンデ公に仕え、革命時にコンデ公の亡命にも随行したが、後にフランスに帰国し、ナポレオン麾下に入った。ナポレオン自身は食に無頓着であったが、直接的にはミユラ元帥のもとで料理長として活躍した。タレーランに仕えていたアントナン・カレームは 2 年程の期間であったが、ラギビエールとともに宴席の仕事に携わり、生涯を通して師と仰ぐ程に尊敬してやまなかった。当然だが料理においてカレームはラギビエールから大きく影響を受け、そのことを後年、数冊の自著で明記している。ラギビエール自身はミユラ元帥に従ってロシア戦線に赴き、その撤退の途中、極寒の地で凍死した。カレームは 1828 年刊『パリ風の料理』の冒頭 2 ページを「ラギビエールの想い出に」と題し、とても力強い文体でその死を悼んだ。

6) カレームの未完の大著『19 世紀フランス料理』第 3 巻に、このソースのレシピが掲載されている。少し長くなるが引用すると「ラグー用片手鍋に、**魚料理用グランドソース**の章で示したソース・オ・ブールをレードル 1 杯入れる。ここに上等のコンソメ大さじ 1 杯か鶏のグラス少々を加える。塩 1 つまみ、ナツメグ少々、良質のヴィネガーまたはレモン果汁適量を加える。数秒間煮立たせ、上等なバターをたっぷり加えてから供する。（中略）ソースに火を通してからバターを加えるというこの方法によって、なめらかな口あたりで、油っぽくならない仕上りになる。だからこそ私はこのソース・オ・ブールをグランドソースに分類しなかったのだし、バターを加える派生ソースにおいてこれは重要なことだからだ。それは魚料理用ソースについても同様のことだ（pp.117-118）」このレシピにおいて、カレームの表現には矛盾がある。「魚用グランドソースの章で示した」とあるのに「グランドソースに分類しなかった」となっていることだ。実際、ソース・オ・ブールそれ自体はこの「ラギビエール風」の直前にある。さて、このソースが「ラギビエール風」であることの原因だが、同じ巻の「魚料理用ソース・エスパニョール」の説明の冒頭において、ラギビエールから聞いた話として、四旬節の期間（小斎=肉断ちをする慣習がカトリックに根強くあった）に、魚料理用のソースにコンソメや仔牛のブロードのジュを混ぜている修道士料理人がいたの、と述べている。それなら美味しくて当然だろう、とカレームが問うと、ラギビエールは「そうやって作った料理は、通常の肉を食べていい時の料理とは違うものであり、かといって肉断ちの料理でもない、まさに中間のものだ。その判定は天のみぞ知るところだろう。結局のところ、修道士たちは元気に暮していたのだから、それは正しかったのだよ」と煙に巻いたという。カトリックの習慣として的小斎=肉断ちのための魚料理用ソースに、肉由来である鶏のグラスもしくはコンソメを加えるというところが、ラギビエール風と名付けた所以であり、まさにこれこそがソース・ラギビエールの重要なポイントと考えられる。『料理の手引き』においてこのレシピを担当した執筆者はこのエピソードを読んでいなかったのだろうか？あるいは何らかの誤解ゆえに改変をしたのか、ラギビエール風の所以である鶏のグラス、コンソメを用いるべきところを、魚のグラスに代えてしまい、このソース名の由来を誤解奪脱してしまう結果となっている。本書の初版において、原注がその文体から、エスコフィエの手になるのか、あるいは聞き書きしたコメントであることはほぼ明らかなので、なぜエスコフィエがこの点を見逃したか、あるいは許容したのかは非常に興味深い。ところで、カレームが、バターを仕上げの際に加えるということ、いわゆるブールモンテ monter au beurre によってソースの口あたりをなめらかなものにし、色艶をよくするというをことさらに言及しているの点もまた、注目に値すべきだろう。

1) 現在のラトビア東北部からエストニア南部にかけての古い地域名、いわゆるバルト三国の一地域と捉えていい。本書執筆時にはロシア帝国の一部となっていた。なお、料理名に冠される地名のうちの少からずのものに明確な由来のないのと同様に、このソースについても名称の由来は不明。

2) monter au beurre バターでモンテする。

3) julienne ジュリエンス

4) étuver au beurre バターでエチューヴェする。

## リヴォニア<sup>1)</sup>風ソース

### Sauce Livonienne

バターを加えて仕上げた<sup>2)</sup>魚のフュメで作ったヴルテ<sup>3)</sup> 1 L に、1~2mm の細さで長さ 3~4cm の千切り<sup>3)</sup> にしたにんじん、セロリ、マッシュリウム、玉ねぎをあらかじめバターを加えて弱火で蒸し煮<sup>4)</sup> したおいたもの 100 g を加える。最後に、1~2mm の細さのトリュフの千切りと粗く刻んだパセリを加える。……味を調えること。  
……このソースは、トラウト、サーモン、舌びらめ、チュルボタン<sup>5)</sup>、バルビュ<sup>6)</sup> のような魚によく合う。

## マルタ風<sup>7)</sup>ソース

### Sauce Maltaise

前述のとおりに、ソース・オランダーズを作り、提供直前、**ブラッドオレンジ** 2 個の搾り汁を加える。ブラッドオレンジを用いないとこのソースは成立しないので注意。オレンジの皮の表面をおろしたものの<sup>8)</sup> 1 つまみを加えて仕上げる。  
……アスパラガスに添える。

## ソース・マリニエール<sup>9)</sup>

### Sauce Marinière

ソース・ペルシーを本書で示したとおりの分量で用意する。これにムール貝の茹で汁を詰めたもの大さじ 3~4 杯を加え、卵黄 6 個でとろみを付ける<sup>10)</sup>。  
……ムール貝の料理専用。

## 白いソース・マトロット<sup>11)</sup>

### Sauce Matelote blanche

白ワインで作った魚のクールブイオン 3 dl にフレッシュなマッシュルームの切りくず<sup>12)</sup> 25 g を加えて 1/3 量まで煮詰める。  
**魚料理用ヴルテ** 8 dl を加える。数分間煮立たせる。布で漉し、バター 150 g を加える。  
カイエンヌ<sup>13)</sup> ごく少量で風味を引き締める。  
ガルニチュールとして、下茹でしてからバターで色艶よく炒めた<sup>14)</sup> 小玉ねぎ 20 個と、あらかじめ茹でておいた小さな白いマッシュルーム<sup>15)</sup> 20 個を加える。

## ソース・モルネー<sup>16)</sup>

### Sauce Mornay

ベシャメルソース 1 L に、このソースを合わせる魚の茹で汁 2 dl を加え、2/3 量程に煮詰める<sup>17)</sup>。おろした<sup>18)</sup> グリュイエールチーズ 50 g とパルメザンチーズ 50 g を加える。少しの間、火にかけたままにしておき、チーズを完全に溶かし込む。バター 100 g を加えて仕上げる<sup>19)</sup>。

【**原注**】魚以外の料理に合わせる場合<sup>20)</sup> も作り方はまったく同じだが、魚の茹で汁は加えない。

## ソース・ムスリーヌ<sup>21)</sup> / ソース・シャンティイ<sup>22)</sup>

### Sauce Mousseline, dite Sauce Chantilly

前述のとおり分量と作り方でソース・オランダーズを用意する（ソース・オランダーズ参照）。

5) turbotin < turbo チュルボ。鱈の近縁種。

6) barbut 鱈の近縁種。

7) シチリアの南方に位置するマルタ島を中心とした国、マルタはオレンジをはじめとした柑橘類の産地であり、とりわけ 19 世紀にはマルタ産のブラッドオレンジが人気であった。一例としてバルザックの小説『二人の若妻の手記』において、つわりに苦しむ妻のために夫がマルセイユの街で「マルタ産、ポルトガル産、コルシカ産のオレンジを買い求めた」(p.312) と書かれている。

8) zeste ゼスト。

9) marinier / marinière < mare ラテン語「海」から派生した語。貝や魚を白ワインで煮た料理にも付けられる名称。

10) 卵黄でとろみ付けをする場合、よく混ぜてさえいれば、必ずしも弱火でなくて問題ない。ただし、沸騰状態だと滑かに仕上がらないリスクが残るので、ある程度は弱火にした方がいいだろう。

11) 水夫風、船員風、の意。

12) 料理、ガルニチュールとして供するマッシュルームは、トゥルネといって螺旋状に切り込みを入れて装飾するのが一般的。その下ごしらえの際に大量のマッシュルームの切りくずが出るので、それを利用する。

13) cayenne 唐辛子の 1 品種。日本で一般的なカエンペッパーよりは辛さがマイルドで風味も異なる。

14) glacier au beurre グラセオブル。バターでグラセする、と表現する調理現場も多い。glace グラス（鏡）が語源であるため、本来は「光沢を出させる、照りをつける」の意だが、食材や料理によってその手法はさまざま。にんじんや小玉ねぎの場合にはあらかじめ下茹でしておく必要がある。

15) これを用意している段階で、上述のトゥルネを行なう。常識的なこととして明記されていないことに注意。この作業の結果、ソースを作る際に魚の茹で汁（クールブイオン）に加えるマッシュルームの切りくずが発生することになる。

16) 19 世紀中頃にバリのレストラン、デュランの料理長ジョゼフ・ヴォワロンが創案したと言われている。モルネーは人名だが、具体的に誰を指しているかについては諸説ある。

17) 初版ではこの煮詰める作業はなく「固めに作ったベシャメルソース 1 L に対し、魚の茹で汁 2 dl を加える」となっている。

18) râper ラベ < râpe ラブという器具を用いておろすこと。パルメザン（パルミジャーノ）は硬質チーズなので一般的な半筒形のチーズおろし器でいいが、グリュイエールは比較的軟質なので、より目の粗い器具（例えばマンドリンスに付属している機能のうち、にんじんをおろす際に使う部分など）を用いるといい。

19) monter au beurre モンテオブル。バターでモンテする、と表現することも多い。

20) 例えば茹でた野菜などにかけて、サラマンダー（強力な上火だけのオーブンの一種）に入れて軽く焦げ目を付け、グラタンにするようなケースも多い。

21) mousseline < mousse ムース。-ine は「小さい」を意味する接尾辞。その前に L の文字が入るのは、mousse の語源がメソポタミアの都市 Mossoul（モスリン布の生産地だった）であることによる。

22) シャンティイの由来などについてはソース・シャンティイ参照。

1) 大さじ 1 杯=15cc という考えにとらわれないよう注意。この計量単位は日本で戦後普及したものに過ぎず、本書においては文字通り「大きなスプーンで 4 杯」という大雑把な単位として考える必要がある。このソースの場合は「固く泡立てた生クリームを適量」と読み替えてもいいだろう。名称どおりに滑らかでふんわりとした口あたりに仕上げるのが

提供直前に、固く泡立てた生クリーム大さじ4杯<sup>1)</sup>をソースに混ぜ込む。

……このソースは、茹でた魚や、アスパラガス、カルドン<sup>2)</sup>、セロリ<sup>3)</sup>に添える。

## ソース・ムスーズ<sup>4)</sup>

### Sauce Mousseuse

沸騰した湯の中に、小さめのソテー鍋を入れて熱し、水気をよく拭き取る。このソテー鍋に、あらかじめ十分に柔らかくしておいたバター500gを入れる。塩8gを加え、泡立て器でしっかり混ぜながら、レモン<sup>1/4</sup>個分の搾り汁と冷水4dlを少しずつ加える。最後に、固く泡立てた生クリーム大さじ4杯を混ぜ込む。

このレシピは、ソースに分類してはいるが、むしろ合わせバターというべきものだ。茹でた魚<sup>5)</sup>に合わせる。

茹でた魚から伝わる熱だけでバターは十分に溶けるので、見た目も風味も溶かしバターをソースにするよりずっといいものだ。

## ソース・ムタルド<sup>6)</sup>

### Sauce Moutarde

普通、このソースは提供直前に作る。

必要の分量のソース・オ・プールを用意する。鍋を火から外し、ソース2<sup>1/2</sup>dlあたり大さじ1杯のマスタードを加える。

このソースを仕上げて、提供するまで時間を空けなくてはならない場合は、湯煎にかけておく。沸騰させないよう注意すること。

## ソース・ナンチュア<sup>7)</sup>

### Sauce Nantua

ベシャメルソース1Lに生クリーム2dlを加え、<sup>2/3</sup>量まで煮詰める。

布で漉し、生クリームをさらに1<sup>1/2</sup>dl加えて、通常の濃度に戻す。

良質なエクルヴィスバター125gと、小さめのエクルヴィスの尾の身<sup>8)</sup>20を加えて仕上げる。

## 活けオマルで作るソース・ニューバーク<sup>9)</sup>

### Sauce New-burg avec le homard cru

800~900gのオマルを切り分ける。

胴の中のクリーム状の部分をスプーンで取り出し、これをよくすり潰して30gのバターを合わせ、別に取り置いておく。

バター40gと植物油大さじ4杯を鍋に入れて熱し、切り分けたオマルの身を色付くまで焼く。塩とカイエンヌで調味する。殻が真っ赤になったら、鍋の油を完全に捨て、コニャック大さじ2杯と、マルサラ酒もしくはマデラの古酒2dlを注いで火を付けてアルコール分を燃やす<sup>10)</sup>。注いだ酒が<sup>1/3</sup>量になるまで煮詰めたら、生クリーム2dlと魚のフュメ2dlを注ぐ。弱火で25分間煮る。

オマルの身をざるにあげて水気をきる。殻から身を取り出して、さいの目に切る。

取り置いておいたオマルのクリーム状の部分をソースに混ぜ込み、完全に火が通るように軽く煮立たせてやる。さいの目に切ったオマルの身を加えて混ぜる。味見をして、必要なら塩を加えて修正する。

【原注】さいの目に切ったオマルの身をソースに混ぜ込むのは絶対必要というわけではない。薄くやや斜めにスライスして、このソースを合わせる魚料理に添えてもいい。

ポイント。

- cardon アーティチョークの近縁種で、アーティチョークが開花前の蕾を食用とするのに対し、カルドンは軟白させた茎葉を食用とする。フランスではトゥーレーヌ地方産が有名。草丈1.5m位まで成長させた株を紐で束ねて軟白する。厳冬期は株元から刈り取って小屋などで保管するのが伝統的な手法。イタリア北部ピエモンテでは株を倒してその上に土を被せて軟白するというユニークな方法で栽培する cardo gobbo カルドゴッボもよく知られている。
- セロリには緑の濃い品種系統と、やや緑が薄く、中心部が自然に軟白されたようになる系統がある。野菜料理として用いられるのは主として後者の芯に近い、自然に軟白された部分。coeur de céleri クールドセルリと呼ぶ。前者については、もっぱら香味野菜としてフォンやポタージュ、煮込み料理などに用いられる。このタイプは風味に癖があるため、生食にはあまり適していない。
- 細かく泡立った、の意。なお、シャンパーニュのような vin mousseux ヴァン・ムスー（発泡ワイン）のムスーは同じ語の男性形。
- クールブイヨンなどを用いてやや低温で煮た魚、の意。魚料理用ソース・アシエ 訳注参照。
- マスタードのこと。マスタードソースと呼んでもいいが、アメリカ風の印象を与えるかも知れない。
- ローヌ・アルプ地方にあるナンチュア湖でエクルヴィスが穫れることに由来したソース名。エクルヴィスについてはバイエルン風ソース 訳注参照。
- しっかり下茹でして殻を剥いたものを用いること。
- ここでは英語由来のソース名のため英語風にカタカナ書きしたが、フランスでは「ニューブル」のように発音されることも多い。
- flamber フランベする。
- このソースの元となった料理「オマル・ニューバーク」は、19世紀後半にニューヨークのレストラン、デルモニコーズで常連客のアイデアをもとにフランス出身の料理長シャルル・ラノフェール（チャールズ・レンフォーファー）が完成させたと言われており、そのレシピがラノフェールの著書『ジ・エビキュリアン』（英語）に掲載されている（p.411）。現在もデルモニコーズのスペシャルティとして知られている。ただし、ラノフェールのレシピは先にオマルを茹でるという、本項のレシピに近いものであり、前項の活けオマルを使うレシピはエスコフィエもしくは他の料理人によって改変させたものと考えられる。なお、このレシピと次項のソース・ニューバークは第二版で追加されたものであり、その後は原注も含めて異同がない。



## 茹でたオマールで作るソース・ニューバーグ<sup>1)</sup> Sauce New-burg avec le homard cuit

オマールを標準的なクールブイヨンで茹でる。尾の身を殻から外し、やや斜めに厚さ 1cm 程度の筒切りにする<sup>2)</sup>。ソテー鍋の内側にたっぷりバターを塗り、そこに切ったオマールを並べるように入れる。塩とカイエンヌでしっかりと味を付け、表皮が赤く発色するように両面を焼く。上等なマデラ酒をひたむたの高さまで注ぎ、ほぼ完全になくなるまで煮詰める。

提供直前に、オマールのスライスの上に、生クリーム 2 dl と卵黄 3 個を溶いたものを注ぎ、火から外して、ゆっくり混ぜながら<sup>3)</sup>しっかりとろみを付ける。

【原注】ソース・アメリカナスと同様に、これら 2 種のソースも元来はオマールを供するための料理だった。ソースとオマールが、要するにひとつの料理を構成していたわけだ。

ところが、そのような料理は午餐（ランチ）でしか提供することが出来ない。多くの人は胃が弱く、夕食では消化しきれないのだ<sup>4)</sup>。

そうした問題解決のために、我々はこれを、舌びらめのフィレやムスリーヌに添えるオマールのソースとして使うことにしたのだ。オマールの身はガルニチュールとして添えるにとどめることにした。結果は好評であった。

カレー粉やパプリカ粉末を調味料として用いれば、このソースのとてもいいバリエーションが作れる。とりわけ舌びらめや脂身の少ない白身魚によく合う。……その場合、魚に少量のインド風ライスを添

えるといい。

## ソース・ノワゼット<sup>5)</sup> Sauce Noisette

ソース・オランダーズを本書のレシピのとおりに作る。提供直前に仕上げとして、上等なバターで作ったブルー・ド・ノワゼット 75 g を加える。

……ボシエ<sup>6)</sup>したサーモン、トラウトにとてもよく合う。

## ノルマンディ風ソース Sauce Normande

魚料理用ヴァルテ<sup>3/4 L</sup>に<sup>7)</sup>、マッシュルームの茹で汁 1 dl とムール貝の茹で汁 1 dl、舌びらめのフュメ<sup>8)</sup> 2 dl を加える。レモン果汁少々、とろみ付け用に卵黄 5 個を生クリーム 2 dl で溶いたものを加える。強火で  $2/3$  量つまり約 8 dl まで煮詰める。

布で漉し、クリーム・ドゥーブル<sup>9)</sup> 1 dl とバター 125 g を加える。

……このソースは舌びらめのノルマンディ風専用。とはいえ、使い方によっては無限の可能性がある。

【原注】基本的に本書では、どんなレシピにおいても、牡蠣の茹で汁は使わないことにしている。牡蠣の茹で汁は塩味がするだけで風味がない。だから、可能であればムール貝の茹で汁を大さじ何杯か加えるほうがずっといい<sup>10)</sup>。

## オリेंट風ソース<sup>11)</sup> Sauce Orientale

ソース・アメリカナス  $1/2 L$  を用意し、カレー粉で風味付けをして  $2/3$  量まで煮詰める。鍋を火から外し、生クリーム  $1/2 dl$  を混ぜ込む。

2) détailler en escalopes = escalopper エスカロップ（厚さ 1~2cm 程度の薄切り）に切る。

3) vanner ヴァネする。

4) レシピにおいて指示されているオマールが大ききものであることに注意。

5) ヘーゼルナッツ、はしばみの実。

6) pocher 沸騰しない程度の温度で茹でること。魚の場合はクールブイヨンを用いてやや低めの温度で火を通すこと。

7) 原書にはリットルの表記がないが、本書における標準的な仕上り量が 1 L であること、文脈から訳者が補った。

8) 舌びらめの料理に合わせるソースであるために、舌びらめのアラなどが必然的に出るのを無駄にせず使うということだが、現代のレストランの厨房などではかえって無理が生じることになる。このレシピの通りに作る場合には何らかのオペレーション上の工夫が必要だろう。

9) 乳酸醗酵した濃い生クリーム。ソース・シュブレーム訳注参照。

10) このレシピは初版からの異同が大きい。初版では「魚料理用ヴァルテ 1 L あたり卵黄 6 個でとろみを付け、牡蠣の茹で汁 2 dl と魚のエッセンス、生クリーム 2 dl を加えながら煮詰める。仕上げにバター 100g とクリーム・ドゥーブル 1 dl を加える」となっており、用途には触れられていない。第二版、第三版ではやや細かなレシピとなり用途も「舌びらめのノルマンディ風」と指定されて現行版に近いものになるが、牡蠣の茹で汁を使うことは初版と同じ。つまり、第四版で牡蠣の茹で汁からムール貝の茹で汁を使うことに変更し、この原注が付けられた。このソースにおける改変は、前出のソース・ラギビエールのケースとやや似ているところもある。牡蠣を用いることから、牡蠣の産地であるノルマンディ風という名称となったソースであるのに、そこから牡蠣を排除するという、いわば換骨奪胎がなされているからだ。とはいえ、このことが、第四版の改訂にエスコフィエ自身が携わったという証拠のひとつともなり得る可能性はある。初版刊行時 56 才、1921 年刊の第四版の改訂にあたった頃には 70 才を過ぎていたことになり、味覚や嗅覚における感受性に变化があった可能性も考えられる。第三版までは牡蠣の茹で汁を指定していたのに、第一次大戦後、食料事情の変化があったとはいえ、きわめて風味の強いムール貝の茹で汁を使うことを第四版で唐突に推奨しているということからは、まったくの第三者による改竄か、改訂者本人の身体的、感覚的もしくは思想的な変化がうかがわれる。その意味でも、やはりエスコフィエ自身が改訂作業に真摯に取り組んだ結果として、このレシピの変遷を捉えるべきだろう。

11) フランス語の orient オリオン（東方）は、具体的にいうと北アフリカの一部、アラビア半島、西アジアくらいを指すのが一般的。その意味では、カレー粉を加えたことで「オリेंट風」と称するのは、当時のフランス人にとって、理解できなくもないだろうが実感は伴わなかった可能性がある。フランス人にとっての「オリेंट」である北アフリカやトルコといった地域の食文化は 19 世紀にはかなりフランスに伝わっていたからだ。こういった文化的なイメージのずれは、エスコフィエ本人が料理長としてのキャリアの大半をイギリスで過ごしたことも関係があると思われる。つまり、フランス人にとっての「オリेंट」とインドという植民地を持つイギリス人の「オリेंट」は同じ言葉であっても、想起される具体的な内容が違うということである。



……このソースの用途は **ソース・アメリカネズ** と同じ。

## ポー風ソース

### Sauce paloise<sup>1)</sup>

**ソース・ペアルネーズ**を本書に書いてあるとおりの方法と分量で用意する (**ソース・ペアルネーズ**参照) が、以下の点を変える。

1. 香りの中心となるエストラゴンを同量の **ミント**<sup>2)</sup> に変更し、白ワインとヴィネガーを煮詰める際に加える。
2. さらに、仕上げの際に、細かく刻んだエストラゴンも使わない。細かく刻んだミントを使う。  
……このソースの用途は **ソース・ペアルネーズ** とまったく同じ。

## ソース・ブレット<sup>3)</sup>

### Sauce Poulette

マッシュルームの茹で汁 2 dl を  $\frac{1}{3}$  量まで煮詰める。ここに **ソース・アルマンド** 1 L を加え、数分間沸騰させる。鍋を火から外し、レモン果汁少々とバター 60g、パセリのみじん切り大さじ 1 杯を加えて仕上げる。

……このソースは野菜料理に合わせるが、羊の足の料理にもよく合う。

## ソース・ラヴィゴット<sup>4)</sup>

### Sauce Ravigote

白ワイン  $\frac{1}{2}$  dl とヴィネガー  $\frac{1}{2}$  dl を半量になるまで煮詰める。**標準的なヴァルテ** 8 dl を加え、数分間煮立たせる。鍋を火から外し、エシャロットバター 90~100 g と、セルフィユ<sup>5)</sup>とエストラゴン<sup>6)</sup>、シブレット<sup>7)</sup>を細かく刻んだものを同量ずつ合わせたもの計大さじ  $\frac{1}{2}$  杯を加えて仕上げる。

……茹でた鶏に合わせる。白い内臓<sup>8)</sup>料理にも合わせることもある。

## 魚料理および魚で構成したガルニチュール用ソース・レジャンス<sup>9)</sup>

### Sauce Régence pour Poissons, et garnitures de Poissons

ライン産白ワイン 2 dl と**魚のフォン** 2 dl に新鮮なマッシュルームの切りくず 20g と生トリュフの切りくず 20g を加えて半量になるまで煮詰める。

煮詰まったら布で漉し、仕上げた状態の**ノルマンディ風ソース** 8 dl を加える。

トリュフエッセンス大さじ 1 杯を加えて仕上げる。

## 鶏料理のガルニチュール用<sup>10)</sup>ソース・レジャンス

### Sauce Régence pour garnitures de Volaille

ライン産白ワイン 2 dl とマッシュルームの茹で汁 2 dl にトリュフの切りくず 40g を加え、半量になるま

1) ポーは 15 世紀以来、ペアルス地方の中心都市。

2) フランス料理よりはむしろイギリス料理でよく使われるミントを用いたこのソースをポー風と呼ぶのは、かつてこの地がイギリス貴族たちに保養地として好まれたことにちなんでいるという説もある。

3) 主な鶏、の意。かつて鶏のフリカセがこのソースと同様の作り方であったためこの名称になったという説もある。ちなみに、「鶏のフリカセ」として文献上もっとも古いもののひとつ、ラ・ヴァレヌ『フランス料理の本』(1651 年)のレシピでは、掃除をして切り分けた鶏をブイオンで完全に火が通るまで煮た後に、鶏の水気をきってフライパンに油脂を熱してこんがり焼き (レシピには明記されていないがブイオンあるいは他の液体を注ぎ)、パセリやシブール (葱の一種) を加えて調味し、溶いた卵黄でとろみ付ける、というものだった (p.47)。確かに、ソース・アルマンドも卵黄をとろみ付けに使うのが特徴である点から、その類推でこのソース名になった可能性はあるだろう。だが、本書においては仔牛のブランクットも仔牛のフリカセも最後のとろみ付けに卵黄を用いているので、それを「ひな鶏」というところに限定するのはいささか疑問が残る。なお、fricasser フリカセという語は 17 世紀頃まで、「油脂を熱したフライパンなどでこんがり焼く」の意味で用いられていた。それがこんにちのような「煮込み」に変化したのは、17 世紀における ragoût ラグーの流行に負うところは大きいだろう。ラグーとは、もとは、食欲をそそるもの、の意であり、それまでポターージュと総称されていた煮込み料理全般およびソースと主素材が一体化したものの一部について、17 世紀に付けられるようになった、一種の流行語であった。

4) ravigote < ravigoter 身体を丈夫にする、元気にさせる、の派生語。香草を主体として酸味を効かせたソース (および煮込み料理) は中世以来あったが、18 世紀以降 ravigote という呼び名が一般的となり、19 世紀以降はこの表現がしばしば使われるようになった。ソース・ラヴィゴットは冷製と温製の 2 種があるが、日本では冷製の方がよく知られているようだ。なお、ソース・ラヴィゴットのレシピとして最初期のもののひとつ、1755 年刊ムノン『宮廷の晩餐』第 1 巻に掲載されているソース・ラヴィゴットの作り方は、薄切りにしたにんにく、セルフィユ、サラダバーネット、エストラゴン、クレソンアレンワ (オルラン芹)、シブレットを洗ってから圧し潰し、コップ 1 杯のコンソメ (=この当時のコンソメはグラスドヴィアンドに近いものであることに注意) に入れて沸騰させないよう 1 時間以上かけて煎じ。漉し器で押すようにして漉し、ブルマニエ、塩、こしょうで味付けをして火にかけ、レモンの搾り汁で仕上げる、というものの (p.135)。

5) cerfeuil チャービル。

6) estragon フレンチタラゴン。詳しくは **ソース・シャスール** 訳注参照。

7) ciboulette 日本ではチャイブとも呼ばれる。アサツキと訳されることもあるが、風味がまったく異なるので代用は不可。春に紫色の小さくてきれいな花をたくさん咲かせるので、エディブルフラワーとしてもよく用いられる。

8) 家畜の副生物すなわち正肉以外の部分のうち、内臓を abats アバと呼ぶ。そのうちの、心臓、レバー、舌などは abats rouge アバルージュ (赤い内臓)、耳、尾、胃、腸、足、頭、仔牛および仔羊の胸腺肉 (ris de veau リドヴォー、ris d'agneau リダニョー) や腸間膜 (fraise フレーズ) などは abats blanc アバロン (白い内臓、白い副生物) を呼ばれている。こうした副生物の料理は古くから好まれ、16 世紀フランソワ・ラブレール『ガルガンチュアとパンタグリュエル』においてもしばしば登場する。とりわけ「ガルガンチュア」の冒頭では、出産間近なお妃が臓物料理を食べ過ぎるなどというエピソードが印象深い。なお、鶏の副生物 (とさか、内臓、脚など) は abattis アバティと呼ばれるので混同しないよう注意。

9) ソース・レジャンスという名称については「ブラウン系の派生ソース」の **ソース・レジャンス** 訳注参照。

10) わかりやすい例としては、後述の **ガルニチュール・レジャンス B** 参照。

で煮詰める。

**ソース・アルマンド** 8 dl を加え、布で漉す。トリュフエッセンス大さじ 1 杯を加えて仕上げる。

## ソース・リッシュ

### Sauce Riche<sup>1)</sup>

**ソース・ディプロマット** を本書で示したとおりの分量と作り方で用意する。

トリュフエッセンス 1 dl と、さいの目に切った真黒なトリュフ 80g を加えて仕上げる。

## ソース・ルーベンス

### Sauce Rubens<sup>2)</sup>

1~2 mm 角の小さなさいの目<sup>3)</sup>に切った標準的なミルポワ 100 g をバターで色付くまで炒める。白ワイン 2 dl と**魚のフュメ** 3 dl を注ぎ、25 分間火にかけておく。

目の細いシノワ<sup>4)</sup>で漉す。数分間静かに休ませてから、浮いてきた油脂を丁寧に取り除く<sup>5)</sup>。1/2 dl になるまで煮詰め、マデラ酒大さじ 1 杯を加える。

ここに卵黄 2 個を加えてとろみを付け、普通のバター 100 g と**ブルー・ルー・ジュ** 30 g、アンチョビエッセンス少々を加えて仕上げる。

……茹でた、すなわちポシェ<sup>6)</sup>した魚にこのソースはとてもよく合う。

## サンマロ<sup>7)</sup>風ソース

### Sauce Saint-Malo

(仕上り 5 dl 分)

本書で示したとおりに作った**白ワインソース** 1/2 L に細かく刻んで白ワインで茹でたエシャロット大さじ 1 杯、もしくは、可能なら、**エシャロットバター** 50 g と、マスタード大さじ 1/2 杯、アンチョビエッセンス少々を加える。

……海水魚のグリルに合わせる。

## ソース・スミターヌ<sup>8)</sup>

### Sauce Smitane

中位の大きさの玉ねぎを細かくみじん切りにし、バターで色付くまで炒める。白ワイン 2 dl を注ぎ、完全に煮詰める。サワークリーム 1/2 L を加える。5 分間沸騰させたら、布で漉す。サワークリームの風味を生かすために、必要に応じてレモンの搾り汁少々を加える。

……ジビエのソテーやカスロール仕立て<sup>9)</sup>用。

## ソース・ソルフェリノ

### Sauce Solférino

よく熟したトマト 15 個をしっかりと搾って、その果汁を器に入れる。これを布で漉し、濃いシロップ状になるまで煮詰める。

溶かした**グラスドヴィアンド**大さじ 3 杯とカイエンヌ 1 つまみ、レモン 1/2 個分の搾り汁を加える。

火から外して、エストラゴン風味の**メートルドテルバター** 100 g と**エシャロットバター** 100 g を加える。

……このソースはどんな肉のグリルにもよく合う。

【原注】言い伝えによると、フランス軍がたびたび進軍して戦ったロンバルディア平野で、たくさん料理が創作された。このソースもそのひとつであり、カブリアナ村においてフランスとサルデーニャの連合軍司令官の昼食に供されたという。その村の近くであの苛烈なわかるソルフェリノの戦い<sup>10)</sup>が繰り広げられたのだ。

伝えられているレシピはおそらくは調理担当軍人によるものだろうが、十分に日常的に使えるものだった。このソースは、Sauce Saint-Cloud ソース・サンクルー<sup>11)</sup>と呼ばれることもあるが、それは誤りだ。作り方も材料もソース・サンクルーの名を付けるにはまったく値しない程の誤りだ。

1) リッチな、裕福な、の意。ソース・ディプロマットがそもそも豪華な料理に合わせるものであり、さらにトリュフを足すことでより一層「リッチ」なものにした、ということ。

2) フランドル派の画家、Peter Paul Rubens ピーテル・パウル・ルーベンス (1577~1640) のこと。フランス語では古くから Pierre Paul Rubens ビエール・ポール・リュベンスの表記が慣例となっているが、現代フランス語では原語のままの綴り、発音を尊重する潮流にある。

3) brunoise ブリュノワーズ

4) 円錐形で取っ手の付いた漉し器。

5) dégraisser デグレセ。

6) 魚の場合はクールブイヨンを用いて、沸騰しない程度の温度で加熱調理すること。

7) フルターニュ地方の港町。観光地として有名であり、バカンスシーズンには多くの人が訪れる。

8) サワークリームを意味するロシア語 Cмeтaнa スメタナが由来。ロシア料理とフランス料理との相互影響関係においては、**序 p.II 訳注 3** および**モスクワ風ソース**訳注参照。

9) 原文は gibiers sautés, ou cuits à la casserole となっており、ジビエのソテーまたはカスロール (片手鍋) で火を通したものと、というのが逐語訳だが、ここでは en casserole に解釈して訳した。雉、ペルドロー (山うずらの若鳥)、野生のうずらなどの en casserole が本書にも多数収録されているためである。カスロール仕立て en casserole とは、油脂を熱したカスロールで肉を焼いた後に取り出し、フォンなどを加えてソースを作り、肉を鍋に戻し入れて鍋ごと供する仕立てのこと。なお、casserole のうちピラニアに古くからあるタイプのものは比較的浅い鍋で、ソースパンとも呼ばれる。深いものは casserole russe カスロールリュス (ロシア式片手鍋) と言う。

10) 1859 年に起きたフランス=サルデーニャ連合軍とオーストリア帝国軍の戦闘。戦場視察したナポレオン三世はその光景のあまりの悲惨さにイタリア独立戦争への介入から手を引くことを決意したともいう。

11) サンクルーはパリ近郊の地名。普仏戦争時 (1870~1871) にパリ包囲戦の舞台となり、休戦協定の結ばれた 2 日後に大火に見舞われた。いずれにせよ戦争の悲惨さを陰に持つソース名ということになるが、エスコフィエ自身が普仏戦争において従軍したために、その名称をこのソースに付けることは許し難かったのだろう。

1) 18 世紀の代表的料理人のひとり François Marin フランソワ・マラン (生没年不詳) が仕えたシャルル・ド・ロアン・スビーズ元帥のこと。マランは 4 巻からなる『コモス神の贈り物、あるいは食卓の悦楽』(1739 年刊) を著した。

## ソース・スビーズ / 玉ねぎのクリ・スビーズ<sup>1)</sup> Sauce Soubise, ou Coulis d'oignons Soubise

このソースの作り方には以下の2つがある。

1. 玉ねぎ 500 g を薄切りにする<sup>2)</sup>。これをしっかりと下茹でしておく。  
玉ねぎはしっかりと水気をきって、バターを加えて鍋に蓋をして弱火で色付かないよう注意して蒸し煮する<sup>3)</sup>。ここに濃厚に作った**ベシャメルソース** 1/2 L を加える。塩 1 つまみと白こしょう少々、粉砂糖 1 つまみ強を加える。  
オープンに入れてじっくり火入れする。布で漉し、鍋に移したソースを熱する。バター 80 g と生クリーム 1 dl を加えて仕上げる。
2. 上記と同様に薄切りにした玉ねぎを下茹でし、水気をきる。豚背脂の薄いシート<sup>4)</sup>を敷き詰めた丁度いい大きさの深手の片鍋<sup>5)</sup>に、下茹でして水気をきった玉ねぎをすぐに入れ、カロライナ米<sup>6)</sup> 120 g と**白いコンソメ** 7 dl、塩、こしょう、砂糖は上記と同様に加え、さらにバター 25 g も加える。  
強火にかけて沸騰したら、オープンに入れてゆっくり加熱する。  
鉢に米と玉ねぎを移し入れてすり潰す。これを布で漉し、温める。上記と同様にバターを生クリームを加えて仕上げる。

【**原注**】スビーズはソースというよりはむしろクリ<sup>7)</sup>であって、真っ白な仕上りにすべきだ。  
ベシャメルを用いた作り方のほうが米を用いるよりもいいだろう。というのも、より滑らかな口あたりのクリになるからだ。その一方、米を使うとよりしっかりした仕上りになる。  
どちらの方法で作るか、このスビーズを合わせる料理の種類によって決めるべきだ。

## トマト入りソース・スビーズ Sauce Soubise tomate

上記のいずれかの方法で作ったソース・スビーズに 1/3 量の、滑らかで真っ赤なトマトビュレを加える。

## ソース・スーシェ Sauce Souchet<sup>8)</sup>

オランダおよびフランドル地方のワールテルゾイから派生したソース。

いくらか変化したかたちでイギリス料理に取り入れられ、近代料理の原則に合うようにさらに手を加えたもの。

細さ 1~2 mm 角、長さ 3~4 cm の千切り<sup>9)</sup>にした、にんじん、根パセリ、セロリ計 150 g を用意する。  
これを鍋に入れてバターを加え、蓋をして蒸し煮する<sup>10)</sup>。**魚のフォン** 3/4 L と白ワイン 2 dl を注ぐ。弱火で煮て、このクールブイヨン<sup>11)</sup>を漉す。千切りにした野菜は別に取り置いておく。

このクールブイヨンで、切り分けた魚を煮る。  
魚に火が通ったら、魚の身を取り出して、クールブイヨンはシノワ<sup>12)</sup>漉す。これを約 1/4 量すなわち 2 1/2 dl になるまで煮詰める。**白ワインソース**を加えて適当なとろみが付くようにする。あるいは単純にブルマニエでとろみを付け、軽くバターを加えてもいい。  
ソースの中に取り置いていた千切りの野菜を戻し入れる。魚の切り身を覆うようにソースをかけて供する。

## チロル風<sup>13)</sup>ソース Sauce Tyrolienne

**ソース・ペアルネーズ**を作る場合とまったく同じ要領で、白ワインとヴィネガー、香草類を煮詰める(**ソース・ペアルネーズ**)参照。布で漉してきつく絞る。

これに、よく煮詰めた真っ赤なトマトビュレ大さじ 2 杯と卵黄 6 個を加える。鍋をごく弱火にかけながら、**マヨネーズ**を作る要領で植物油 5 dl を加えてしっかりと乳化させる。最後に味を調べ、カイエンヌ<sup>14)</sup>ごく少量で風味を引き締める。

……このソースは牛肉、羊肉のグリルや魚のグリル焼きに合う。

2) émincer エマンセ。

3) étuver エチュヴェ。

4) barde de lard 豚背脂を薄くスライスしたもの。ペーコンと誤解されがちなので注意。エスコフィエ以前の時代のフランス料理ではきわめて多用されるとも重要なものなのでぜひとも覚えておきたい。自作する際には、豚背脂の塊を冷凍した後、適度な固さに戻してからスライスすると作業が容易になる。

5) casserole russe **ソース・スミタース**訳注参照。

6) 長粒種。リゾットなどに適している。

7) クリ coulis については、**ソース・サルミ**訳注参照。

8) ナポレオン軍の元帥を務めたルイ・スーシェ・アルビュフェラ公爵のこと。正しくは Suchet だが、料理名としては Souchet と綴られる。**ソース・アルビュフェラ**訳注参照。

9) julienne ジュリエンス。

10) étuver au beurre エチュヴェオブル。

11) court-bouillon 原義は「量の少ないブイヨン」。実際、魚などを茹でる(ポシェする)際には、ぎりぎりの大きさの鍋を用いて茹で汁の量は出来るだけ少なく済むようにする。誤解しやすい用語なので注意。

12) 円錐形に取っ手の付いた漉し器。

13) そもそも **ソース・ショロン**をバターではなく植物油を用いて作るものであるから、オーストリアのチロル地方とはまったく関係がない。1848 年のイタリア、チロルでのオーストリアに対する反乱を記念した命名だという説もあるが、真偽は不明。ただし、本書の初版からほぼ異同のない内容で収録されているため、それなりに古くから存在しているソースと思われる。

14) 赤唐辛子の一品種だが、日本のカエンペッパーより辛さもマイルドで風味が違うことに注意。

## チロル風ソース クラシック<sup>1)</sup> Sauce Tyrolienne à l'ancienne

大きめの玉ねぎ2個をごく薄くスライス<sup>2)</sup>してバターで炒める。トマト3個を押し潰して皮を剥き、種を取り除いてから加える。ソース・ポワヴラード5dlを加える。7～8分間煮て仕上げる。

## ソース・ヴァロワ Sauce Valois

グラスドヴィアンド入りソース・ペアルネーズのこと（ソース・ペアルネーズ参照）。

【原注】「ソース・ヴァロワ」はグフェが1863年頃に創案したらしい。少なくともその頃に作られるようになったものであろう。近年では「ソース・フォイヨ」の名称のほうが一般的だが、いかにもあり得そうな異論反論を受けないためにもここでその起源を記しておくのがいいと思われた。

## ヴェネツィア風<sup>3)</sup>ソース Sauce Vénitienne

エストラゴンヴィネガー4dlに、エシャロットのみじん切り大さじ2杯とセルフィユ25gを加え、1/3量まで煮詰める。煮詰めたら布で漉し、軽く絞ってやる。ここに白ワインソース<sup>3/4</sup>Lを加える。ブルー・ヴェール125gと、セルフィユとエストラゴンのみじん切り大さじ1杯を加えて仕上げる。……さまざまな魚料理に添える。

## ソース・ヴェロン<sup>4)</sup> Sauce Véron

仕上げた状態の標準的なノルマンディ風ソース<sup>3/4</sup>Lに、チロル風ソース<sup>1/4</sup>Lを加える。よく混ぜ合わせ、溶かしたブロンド色のグラスドヴィアンド大さじ2杯とアンチョビエッセンス大さじ1杯を加えて仕上げる。……魚料理用。

## 村人風ソース Sauce Villageoise<sup>5)</sup>

標準的なヴルテ<sup>3/4</sup>Lに、ブロンド色の仔牛のジュ<sup>6)</sup>1dlとマッシュルームの茹で汁1dlを加える。2/3量くらいまで煮詰め、布で漉す。

ベジャメルで作ったソース・スピーズ<sup>7)</sup>2dlと、とりみ付けの卵黄4個を加える。沸騰させないよう気をつけて温め、火から外してバター100gを加えて仕上げる。

……仔牛、仔羊などの白身肉に合わせる。

## ソース・ヴィルロワ<sup>8)</sup> Sauce Villeroi

ソース・アルマンド1Lに、トリュフエッセンス大さじ4杯とハムのエッセンス大さじ4杯を加える。ヘラで混ぜながら強火にかけ、主素材となるものをソースに漬けて取り出したとき際に、全体をソースが覆うようになるような濃さまで煮詰めていく。

【原注】このソースの唯一の使い途は、素材をこのソースで包み込んでから、イギリス式パン粉衣を付けて揚げるものだ。この方法で調理したものは常に「ヴィルロワ風」の名称となる。このソースは、古典料理において「隠れたソース」と呼ばれていたもののうちの典型例と言える。

## スピーズ入りソース・ヴィルロワ Sauce Villeroi Soubisé

ソース・アルマンドに1/3量のスピーズのビュレ<sup>9)</sup>を加え、上記と同様に煮詰めて作る。このソースを付ける素材や仕立てに合わせて、ソース1Lあたり80～100gのトリュフのみじん切りを加えることもある。

## トマト入りソース・ヴィルロワ Sauce Villeroi tomate

標準的なソース・ヴィルロワとまったく作り方は同じだが、ソース・アルマンドの1/3量の上等で真っ赤なトマトビュレを加えて作る。

- 1) このレシピは第四版のみ。ここでのà l'ancienneは「昔ながらの」という意味ではない。ベースとなっているソース・ポワヴラードが古くからあるソースであることからこの名称を第四版で付けたと考えられる。なお、本書においてà l'ancienne「昔風」「昔ながらの」という名称が付くレシピはその多くが17～18世紀の古典期に起源を持つが、そのイメージを表現しているものであり、ここでは後者と捉えて、あえて「昔風」ではなく「クラシック」と訳した。
- 2) émincer エマンセ。
- 3) ヴェネツィア料理ではさまざまな香草を用いるものがあることから、その影響を受けた、あるいは類似したものこの名称が付けられることが多い。なお、ヴェネツィアの近く、漁港で有名なキオッジャ近郊は農業がとて盛んで、地場品種の野菜も多い。横に切ると白とピンクの年輪状の模様が表れるピーツ・キオッジャ（イタリア語ではbarbabietola di Chioggia バルバビエトラ・ディ・キオッジャ）が代表的だが、カボチャやラディッキオ（radicchio tartivo di Treviso ラディッキオ・タルディーヴォ・ディ・トレヴィーゾ）が有名だが、radicchio di Chioggia ラディッキオ・ディ・キオッジャはいわゆるトレビスに非常に近い）にもキオッジャの名が付く品種がある。
- 4) Luis Véron (1798～1867)。医師であり、文学愛好家、美食家としても有名だった。文芸誌「ルヴュ・ド・パリ」を主宰した後、新聞「ル・コンスティテュシヨネル」の社主となり、ウージェーヌ・シューの新聞連載小説「彷徨えるユダヤ人」を掲載、大ヒットに導いた。自宅は文壇サロンのようだったという。主著『パリのとあるブルジョワの回想録』（1853～1955年刊）。
- 5) 文字通り「村人風」の意だが、このソースの他にもこの名称を冠した料理はあるが、どれもとりたてて素朴というわけではなく、由来は不明。
- 6) 本書には「仔牛の茶色いジュ」のレシピはあるが、ブロンド色のものについては記述がない。
- 7) 2つある作り方のうちの1の方。
- 8) ルイ15世の養育係を務めたヴィルロワ元帥 François de Villeroi の名を冠したものとされる。
- 9) ソース・スピーズは濃度があるのでビュレと呼んだと考えていだろう。クリ coulis は「やや水分の多いビュレ」と同義だからだ。

## 白ワインソース

### Sauce vin blanc

このソースには以下の3種類の作り方がある。

1. 魚料理用ヴェルデ 1 L に、ソースを合わせる魚でとったフュメ 2 dl と、卵黄 4 個を加える。 $\frac{2}{3}$  量まで煮詰め、バター 150 g を加える。  
この「白ワインソース」は、仕上げにオーブンに入
2. 良質の魚のフュメ 1 を半分にまで煮詰める。卵黄 5 個を加え、オランダーズソースを作る際の要領で、バター 500 g を加えてよく乳化させる。
3. 卵黄 5 個を片手鍋<sup>1)</sup>に入れて溶きほぐし、軽く温めてやる。バター 500 g を加えて乳化させていく途中で、上等な魚のフュメ 1 dl を少しずつ加えていく<sup>2)</sup>。

れて照りをつける魚料理に合わせる。

---

1) casserole カスロール。

2) いずれの作り方にも白ワインが出てこないのは、それぞれで使われている魚のフュメにおいて既に白ワインを用いているから。

## イギリス風ソース（温製）<sup>1)</sup>

### SAUCES ANGLAISES CHAUDES

#### 克蘭ベリー<sup>2)</sup>ソース

##### Sauce aux Airelles (Cranberries-Sauce)

克蘭ベリー 500 g を 1 L の湯で、鍋に蓋をして茹でる。果肉に火が通ったら、湯をきって、目の細かい網で裏漉しする。

こうして出来たジュレに茹で汁を適量加えてやや濃度のあるソースの状態にする。好みに応じて砂糖を加える。

このソースは市販品があり<sup>3)</sup>、水少々を加えて温めるだけで使える。

……七面鳥のロースト用。

#### アルバートソース

##### Sauce Albert<sup>4)</sup> (Albert-Sauce)

すりおろしたレフォール<sup>5)</sup> 150 g に白いコンソメ 2 dl を注ぎ、弱火で 20 分間煮る。

イギリス式バターソース 3 dl と生クリーム 2<sup>1</sup>/<sub>2</sub> dl、パンの白い身の部分 40 g を加える。強火にかけて煮

詰め、木ヘラで押し絞るようにしながら布で漉す<sup>6)</sup>。卵黄 2 個を加えてとろみを付け<sup>7)</sup>、塩 1 つまみとこしょう少々で味を調える。

仕上げて、マスタード小さじ 1 杯をヴィネガー大さじ 1 杯で溶いてから加える。

……牛肉、主としてフィレ肉のプレゼに添える。

#### アロマティックソース

##### Sauce aux Aromates (Aromatic-Sauce)

コンソメ 1<sup>1</sup>/<sub>2</sub> L に、タイム 1 枝、バジル 4 g、サリエット<sup>8)</sup> 1 g、マジョラム 1 g、セージ 1 g、シブレット<sup>9)</sup> 1 を刻んだもの 1 つまみ、エシャロット<sup>10)</sup> 2 個のみじん切り、ナツメグ少々、大粒のこしょう 4 個を入れて、10 分間煎じる<sup>11)</sup>。

シノワ<sup>12)</sup>で漉し、バターで作った<sup>13)</sup>ブロンドのルー 50 g を入れてとろみを付ける。数分間沸かしてから、レモン 1<sup>1</sup>/<sub>2</sub> 個分の搾り汁と、みじん切りにして下茹でしておいたセルフィユ<sup>14)</sup>とエストラゴン<sup>15)</sup>計大

1) この節では初版で 31、第二版は 33、第三版と第四版で 30 のレシピが掲載されている。1907 年刊の英語版 *A Guide to Modern Cookery* でこの節に相当する“Hot English Sauces”には 10 のレシピしか掲載されていない。この大きな数の差をどう解釈するかは意見の分かれるところだろうが、対象読者がフランス人であるかイギリス人であるかという違いを意識し、ニーズに応えるかたちをとったと考えるのが妥当だろう。ただし、あくまでもエスコフィエあるいは共同執筆者の解釈を経た「イギリス風」のソースがほとんどであることは、例えば「**ローバックソース**」において**ソース・エスバニョール**を用いていること、つまりはエスコフィエが構築したソースの体系に組み込まれ得るものであることから判断がつく。

2) 英語の cranberry はツルコケモモ（学名 *Vaccinium oxycoccos*）であり、フランス語 aireslles rouges はコケモモ（学名 *Vaccinium vitis-idaea* L.）で、非常によく似た近縁種であり、しばしば混同される。本書でもとくに区別されていない。

3) **ソース・ロベール・エスコフィエ**などのようなエスコフィエブランドの商品というわけではないと思われる。

4) ザクセン＝コープルク＝ゴータ公アルバート王配（ヴィクトリア女王の夫）（1819～1861）のこと。女王エリザベス二世の高祖父。本書序文 p.ii において触れられている料理人エルイーがアルバート王配に仕えていたことがある。なお、本書に掲載されていないが、Sole Albert「舌びらめ アルベール」という料理がある。しかしながら、これはパリのレストラン、マキシムズ Maxim's でメートルドテルを務めたアルベール・ブラゼール Albert Blazer の名を冠したもので 1930 年代に創案されたもの。このソースとはまったく関係がないことに注意。

5) raifort ホースラディッシュ、西洋わさび。

6) 二人で作業すると容易。**ヴァレ**訳注参照。

7) このソースの特徴として、イギリスのローストビーフに欠かせないものとされるレフォール（ホースラディッシュ）を用いていること他に、とろみ付けにパンと卵黄を使っている点にも注目すべきだろう。とろみ付けの要素としてはきわめて中世料理風と言ってもいい。ただし、中世の料理では、パンはこじりと焼いてからヴィネガーなどでふやかしてよくすり潰し、さらに布で漉してとろみ付けに用いるのが一般的だった。パンの白い身の部分をそのまま使えるということとは、それだけ小麦の精白度合いが高いということでもある。

8) シン科の香草。サマーセイヴォリー。和名キダチハッカ。

9) ciboulette チャイブ。アサツキと訳されることもあるが、日本のアサツキとは風味が違うので注意。

10) 玉ねぎによく似ているが小さくて水分量の少ない香味野菜。英語由来のシャロットと呼ばれることも。日本の青果マーケットに見られる「エシャレット」はらっきょうの若どりであってまったく別のもの。

11) infuser アンフュゼ。

12) 円錐形で取手の付いた漉し器。

13) 本書第四版ではルーは必ずバターを用いる指示がなされているが、初版から第三版までは、バターもしくはグレスドマルミット（コンソメなどを作る際に浮いてきた油脂をすくい取って漉したもの）を使うという指示だったため、「バターで作った」という記述がこのように残っているレシピが散見される。

14) cerfeuil チャービル。

15) estragon フレンチタラゴン。

1) このソースで用いられている香草類の種類の多さは特筆に値するだろう。ブラウン系の派生ソースにある**香草ソース**およびホワイト系派生ソースの**香草ソース**と比較されたい。



さじ 1 杯を加えて仕上げる<sup>1)</sup>。

……大きな魚まるごと 1 尾のボシェあるいは牛、羊肉の大掛かりな仕立て（ルルヴェ<sup>2)</sup>）に添える。

## バターソース

### Sauce au Beurre à l'anglaise (Butter Sauce)

フランスの **ソース・オ・ブール** と同様にするが、より濃度の高い仕上りにする点が違う。分量は、バター 60 g、小麦粉 60 g、1 L あたり塩 7 g を加えて沸かした湯  $\frac{3}{4}$  L。レモンの搾り汁 5～6 滴、バター 200 g。とろみ付け用の卵黄は用いない。

## ケイパーソース

### Sauce aux Câpres (Capers-Sauce)

上記の **バターソース** 1 L あたり大さじ 4 杯のケイパーを加えたもの。

……茹でた魚に添える。また、イギリス風<sup>3)</sup>に茹でた仔羊腿肉には欠かせない。

## セロリソース

### Sauce au Céleri (Celery-Sauce)

セロリ 6 株を掃除して、芯のところだけを使う<sup>4)</sup>。これをソテー鍋に並べ、白いコンソメをセロリがかぶるまで注ぐ。ブーケガルニとクロープを刺した玉ねぎ 1 個を入れ、弱火で加熱する。

セロリの水気をきり、鉢に入れてすり潰す。これを布で漉す。こうして出来たセロリのピューレと同量の **クリームソース** を加える。セロリの茹で汁を煮詰めたものを大さじ 2～3 杯加える。

沸騰しない程度に温め、すぐに提供しない場合は湯煎にかけておく。

……茹でた鶏または鶏のブレゼに添える。

## ローバックソース

### Sauce Chevreuil (Roe-buck<sup>5)</sup> Sauce)

中位の大きさの玉ねぎを 1 cm 角くらいの粗みじん切<sup>6)</sup>りにし、生ハム 80 g も同様に刻む。これをバターで軽く色付くまで炒める。ブーケガルニを入れ、ヴィ

ネガー 1 $\frac{1}{2}$  dl を注ぎ、ほとんど完全に煮詰める。

**ソース・エスパニョル** 3 dl を注ぎ、15 分程弱火にかけて、浮いてくる不純物を取り除く<sup>7)</sup>。

15 分経ったら、ブーケガルニを取り出し、ポルト酒 コップ 1 杯<sup>8)</sup>とグロゼイユのジュレ大さじ 1 杯強を加えて仕上げる。

……大型ジビエ肉<sup>9)</sup>の料理に添える。

## クリームソース

### Sauce Crème à l'anglaise (Cream-Sauce)

バター 100 g と小麦粉 60 g で**白いルー**を作る。

白いコンソメ 7 dl でルーをのぼし、マッシュルームのエッセンス 1 dl と生クリーム 2 dl を加える。

火にかけて沸騰させる。小玉ねぎ 1 個とパセリ 1 束を加え、弱火で 15 分程煮込む。提供直前に小玉ねぎとパセリは取り出す。

……仔牛の骨付き背肉の塊<sup>10)</sup>のローストに合わせる。

## シュリンプソース

### Sauce Crevettes à l'anglaise (Shrimps-Sauce)

カイエンヌ少量を加えて風味を引き締めた**イギリス風バターソース** 1 L に、アンチョビエッセンス小さじ 1 杯と殻を剥いた小海老<sup>11)</sup>の尾の身 125 g を加える。……魚料理用。

## デビルソース

### Sauce Diable (Devilled Sauce)

1 $\frac{1}{2}$  dl のヴィネガーにエシャロットのみじん切り大さじ 1 杯強を加えて、半量になるまで煮詰める。

**ソース・エスパニョル** 2 $\frac{1}{2}$  dl とトマトピューレ大さじ 2 杯を加え、5 分間程煮る。

仕上げに、ダービーソース<sup>12)</sup>大さじ 1 杯とカイエンヌ 1 つまみ強を加え、シノワ<sup>13)</sup>か布で漉す。

## スコッチエッグソース

### Sauce Ecossaie (Scotch eggs Sauce)

バター 60 g と小麦粉 30 g、沸かした牛乳 4 dl で**ペシャメルソース**を用意する。味付けは通常どおりに

2) relevé **ソース・ディプロマット** 訳注参照。

3) à l'anglaise アラングレーズ。茹でる（下茹でも含む）場合には、塩を加えた湯で茹でることを指す。なお、パン粉衣 pané à l'anglaise という場合には、現代の日本でもなじみのある、小麦粉、溶きほぐした卵、パン粉の順で衣を付けて揚げることを言う。調理法全体を通しての規則性はなく、あくまでも「イギリス風に由来する」または「イギリス風」を意味するものなので注意。

4) 緑色が薄いタイプのセロリは中心部が自然に軟白され、柔らかいので、フランス料理でも非常に好まれる。

5) 英語でノロ鹿のこと。

6) paysanne ペイザンヌに切る、と言う。主として野菜について言うが、1 cm 角で厚さ 1～2 mm 程度。

7) dépouiller デピエ ≒ écumer エキュメ。

8) 約 1 dl。

9) この場合は当然、ノロ鹿の料理だが、フランス料理でノロ鹿は時間をかけてマリネしてから調理し、そのマリナード（漬け汁）もソースに用いるのとは比べると非常にシンプルなソースになっている点が興味深い。

10) carré カレ。もとは「四角形」の意。料理では、肋骨ごとに切り分けていない仔牛および仔羊の骨付き背肉の塊を指す。

11) フランス語は crevette(s) クルヴェット。**ソース・クルヴェット** 訳注参照。

12) 原文 Derby-sauce、1940 年代にアメリカで市販されていたのは確認されているが、ここで言及されているのとまったく同じかは不明。なお、初版および第二版でこの部分は「ハーヴェイソースとウスターシャーソース各大さじ 1 杯」、第三版では「ハーヴェイソースとエスコフィエソース各大さじ 1」となっている。「ダービーソース」が当初「エスコフィエソース」として商品化された後に何らかの事情により名称変更がなされたという可能性も否定できないが、第二版および英語版において**ソース・ディアブル・エスコフィエ**および**ソース・ロペール・エスコフィエ**、さらに第二版と同年刊の英語版のみに掲載されている Sauce aux Cerises Escoffier **ソース・オ・スリーズ・エスコフィエ**のように既にエスコフィエブランドの既製品ソースがあるために、矛盾が生じてしまう。第三版の記述が**ソース・ディアブル・エスコフィエ**を意味していると解釈すれば矛盾は生じないだろう。ハーヴェイソースについては**ブラウンダレヴィエ**訳注参照。

13) 円錐形で取っ手の付いた漉し器。

1) émincer エマンセ、薄切りにすること。

すること。ソースが沸騰したらすぐに、固茹で卵の白身4個を薄切りにした<sup>1)</sup>ものを加える。  
提供直前に、茹で卵の卵黄を目の粗い漉し器で漉したものを混ぜ込む。  
……<sup>2)</sup>鱈には欠かせないソース。

### フェネル<sup>3)</sup>ソース

#### Sauce au Fenouil (Fennel Sauce)

普通に作った**バターソース**2 $\frac{1}{2}$  dlあたり、細かく刻んで下茹でしたフェネル大さじ1杯を加える。  
……このソースは主として、グリルあるいは茹でた鱈に合わせる。

### グーズベリーソース

#### Sauce aux Groseilles (Gooseberry Sauce)

グーズベリー1 Lの皮を剥いて洗い、砂糖125 gと水1 dlを加えて火にかける。目の細かい漉し器で裏漉しする。  
……このピュレはグリルした鱈に合わせる。

### ロブスターソース

#### Sauce Homard à l'anglaise (Lobster Sauce)

カイエンスを加えて風味を引き締めた**ベジャメルソース**1 Lに、アンチョビエッセンス大さじ1杯と、さいの目に切ったオマールの尾の身100 gを加える<sup>3)</sup>。  
……魚料理用。

### 牡蠣入りソース

#### Sauce aux Huitres (Oyster Sauce)

バター20 gと小麦粉15 gでブロンドのルーを作る。このルーを、牛乳1 dlと生クリーム1 dlで溶く。塩1つまみを加えて調味し、火にかけて沸騰させたら弱火にして10分間煮る。  
布で漉し、カイエンスを加えて風味を引き締める。沸騰しない程度の温度で火を通して周囲をきれいに掃除した牡蠣の身12個を1 cm程度の厚さに切つて、ソースに加える。  
……もっぱら茹でた魚<sup>4)</sup>に添える。

### 牡蠣入りブラウンソース

#### Sauce brune aux Huitres (Brown Oyster Sauce)

上記の牡蠣入りソースと作り方はまったく同じだが、牛乳と生クリームではなく、**茶色いフォン**2 dlを使うこと。  
……このソースは、グリル焼きした肉や、肉のブディング<sup>5)</sup>、生鰯のグリル焼きに合わせる。

### ブラウングレイヴィー

#### Jus coloré (Brown Gravy)

**イギリス風バターソース**4 dlに、ローストの肉汁2 dlとケチャップ<sup>6)</sup>大さじ $\frac{1}{2}$ 杯、ハーヴェイソース<sup>7)</sup>大さじ $\frac{1}{2}$ 杯を加える。  
……もっぱら仔牛のローストに添える。

- 日本語でフェネルと呼ばれるものは、(a)主に香草として葉を利用するタイプ fenouil sauvage (フヌイユソヴァージュ)と、(b)白く肥大した株元を食用とするフロレンス・フェネル fenouil de florence (フヌイユ・ド・フロレンス)または fenouil bulbeux (フヌイユビュルブー)と呼ばれる2種がある。本書ではどちらを用いるのか明記されていないことが多いが、一般に、葉を利用するタイプは香りが非常に強く、フロレンスフェネルの葉も食用可能だが、香りは比較のおとなしい。
- ホワイト系派生ソースの節にある**ソース・オマール**を比較すると、このソースのシンプルさが際立って見えるが、ベジャメルを基本ソースにしている点で、やはり「ソースの体系」に組込まれたものであり、純粋にイギリス料理由来というわけでもないと思われる。なお、このレシピは初版からはほぼ異同がなく、1907年の英語版には含まれていない。
- 初版および第二版では「もっぱら茹でた生鰯に合わせる」とある。このレシピも1907年の英語版には掲載されていない。
- 本書にはイギリス風の肉料理としてのブディングのレシピも掲載されている。**ビーフステーキのブディング**、**ビーフステーキとキドニーのブディング**、**ビーフステーキと牡蠣のブディング**。なお、本書でのbeefsteak ビーフステーキとは肉の切り方のことを意味しており、グリル焼きあるいはソテーしたもののではない。ここでは厚さ1 cm程度にスライスした牛肉のことを指している。
- ここではマッシュルームケチャップのこと。マッシュルームの薄切りを塩、こしょう、香辛料で5~6日漬け込み、その絞り汁を沸かして香辛料とトマトを加えて味を調え、漉してから保存する(『ラルース・ガストロノミック』初版)。なお、ketchupは語源が、中国福建省アモイの方言で、香辛料を加えて醗酵させた魚醤の一種を意味するの kê-chiap または kê-chiap (鮭汁)だとされている。これがマレー語に伝播し、kecap (発音はケーチャブ)と変化し、17世紀頃、現在のシンガポールおよびマレーシアを植民地支配していたイギリス人の知るところとなった。イギリスにも古くから魚醤の類はあり、そのバリエーションのひとつとして、マッシュルームとエシャロットを添加した魚醤を ketchup と呼ぶようになった。やがて魚醤文化の衰退とともに、ケチャップと呼ばれるものはマッシュルームが主原料となり、いわゆるマッシュルームケチャップが18世紀頃に成立したとされる。これは、塩漬にして醗酵させたマッシュルームの搾り汁にメース、ナツメグ、こしょうなどの香辛料を加えて煮詰め、漉したもの。これにトマトを添加するようになった時期は際然としないが、おそらくは19世紀初頭だったと思われる。トマトを主原料としたケチャップは、アメリカのハインツ Heinz が1876年にハインツ・トマトケチャップを製品化して以降、徐々に広まっていった。このため、英語圏で成立、普及したトマトケチャップがフランスにおいて知られるようになるのは、少なくとも上記『ラルース・ガストロノミック』初版(1938年)よりも後のことであり、おそらくは第二次大戦後だろうと思われる。なお、いわゆるマッシュルーム(和名バフンタケ)の人工栽培は、17世紀に流行した食材のひとつ melon ムロン(日本語ではメロンだが、甘さの際だった品種は少なく、むしろ香りが特徴)を少しでも早く収穫できるようにと、地温を上げるために畑の表面に厩肥(醗酵熱で積み方によっては60度以上にまで上がる)を敷き詰めたこと、大量のマッシュルームが発生することがわかり、まもなく人工栽培が行なわれるようになった。17~18世紀の料理書にマッシュルームが頻出するのはそれが当時「新しい」流行の食材となったためである。
- Herwey Sauce 19世紀~20世紀前半にかけて既製品が流通していた。現在は商品としては存在していないと思われる。原料はアンチョビ、ヴィネガー、マッシュルームケチャップ、にんにく、大豆由来原料(詳細不明、おそらくは大豆レシテンすなわち大豆油かと思われる)、カイエンス、コチニール色素などであったという。

## エッグソース

### Sauce aux Œufs à l'anglaise (Eggs Sauce)

小麦粉 60 g とバター 30 g で**白いルー**を作る。あらかじめ沸かしておいた牛乳 1/2 L で溶く。塩、白こしょう、ナツメグ少々で味を調える。火にかけて沸騰したら弱火にして 5〜6 分間煮る。固茹で卵 2 個を白身、黄身ともに、さいの目に刻んでソースに加える。  
……ハドック<sup>1)</sup>やモリユ<sup>2)</sup>の料理に合わせるのが一般的。

## エッグアンドバターソース

### Sauce aux Œufs au beurre à l'anglaise (Eggs and Butter Sauce)

バター 250 g を溶かし、塩適量、こしょう少々、レモン 1/2 個分の搾り汁、固茹で卵 3 個を熱いうちに大きめのさいの目に刻んだもの、みじん切りにして下茹でしたパセリ小さじ 1 杯を加える。  
……茹でた魚の大きな仕立ての料理<sup>3)</sup>に添える。

## オニオンソース

### Sauce aux Oignons (Onions Sauce)

玉ねぎ 200 g を薄切りにする<sup>4)</sup>。牛乳 6 dl に塩、こしょう、ナツメグを加えて玉ねぎを茹でる。火が通ったらすぐに、玉ねぎの水気をしっかりきって、みじん切りにする。  
バター 40 g と小麦粉 40 g で**白いルー**を作る。これを玉ねぎを茹でた牛乳で のぼす。火にかけて沸騰させ、みじん切りにした玉ねぎを加える。ソースはとても濃い状態になっていること。そのまま 7〜8 分煮る。  
……このソースは何にでも合わせられる。うさぎ、鶏、牛などの胃や腸の料理<sup>5)</sup>、茹でたマトン、ジビエのプレゼなど……このソースは必ず合わせる肉の上にかけてやること<sup>6)</sup>。

## ブレッドソース

### Sauce au Pain (Bread Sauce)

牛乳 1/2 L を沸かし、フレッシュなパンの白い身 80 g を投入する。塩 1 つまみ強、クローブ 1 本を刺した小玉ねぎ 1 個、バター 30 g を加える。  
弱火で 15 分程煮る。玉ねぎを取り出し、泡立て器で

ソースが滑かになるまでよく混ぜる。生クリーム約 1 dl を加えて仕上げる。

……鶏やジビエ（鳥類）のローストに合わせる。

【**原注**】このブレッドソースを鶏のローストに添える場合は、ローストの肉汁もソース入れて添えること。ジビエの場合はさらに、よく乾かしたパンを揚げた「ブレッドクランプス」をソース入れに入れて添えること。また、フライドポテトの皿も添えること。

## フライドブレッドソース

### Sauce au Pain frit (Fried bread Sauce)

コンソメ 2 dl に、小さなさいの目に切った脂身のないハム 80 g とエシャロット 2 個のみじん切りを加える。弱火で 10 分間煮る<sup>7)</sup>。  
その間に、バター 50 g を熱してパンの身 50 g を揚げておく。提供直前に、揚げたパンをコンソメに入れる。パセリのみじん切り 1 つまみとレモンの搾り汁少々で仕上げる。  
……このレシピは小鳥<sup>8)</sup>のロースト用。

## パセリソース

### Sauce Persil (Persley Sauce)

**イギリス風バターソース** 1/2 L に、パセリの香りを煮出した湯<sup>9)</sup> 1 dl を加える。みじん切りにして下茹でした<sup>10)</sup>パセリの葉大さじ 1 杯強を加えて仕上げる。  
……仔牛の頭肉、仔牛の足、脳などに合わせる。

## 魚料理用パセリソース

### Sauce Persil pour Poissons

**白いルー** 60 g を、このソースを合わせる魚に火を通すのに使ったクールブイヨン 1/2 L で のぼす。クールブイヨンはパセリの香りをしっかり効かせたものであること。そうでない場合は、パセリの香りを煮出した湯を加えてこのソースの特徴をきちんと出してやること。  
5〜6 分間煮て、細かく刻んで下茹でしたパセリの葉大さじ 1 杯とレモン果汁少々で仕上げる。

## アップルソース

普通にリンゴのマーマレードを作る。砂糖ごく少なめにし、シナモンの粉末をほんの少量加えること。……これを提供直前に泡立て器で滑らかになるまでよく混ぜる。

1) Haddock 鱈の一種。フランス語では同じ綴りでアドックまたは égéfin, aiglefin エーグルファンと呼ばれる。イギリスでは主に塩漬けを機製にしたものを指す。

2) morue モリユ。干し鱈、塩鱈のこと。生のものは cabillaud カビヨと呼ばれる。

3) relevé ルルヴェ。第二版序文訳注 2、およびソース・ディプロマット訳注参照。

4) émincer エマンセ。

5) tripes トリップ。主として反芻動物（すなわち牛）の胃腸の食材としての総称。日本では Tripes à la mode de Caen トリップ・アラモード・ド・カン（カン風トリップ煮込み）が有名だが、他にも牛、羊、豚の副生物を主役とした料理は非常に多い。

6) 本書におけるソースは特に指示がない場合はソース入れ（saucière ソシエール）で料理本体と別添して供すると考えておくといい。

7) mijoter ミジョテ。弱火で煮込むこと。

8) つぐみ（grive グリーヴ）など小さな鳥類のローストは、下処理した後に胸肉の部分を豚背脂のシートで一羽ずつ包み、数羽をまとめて串刺しにしてローストするのが一般的だった。

9) infusion アンフュージオン < infuser アンフュゼ（煎じる、香りなどを煮出す）。なお、いわゆるハーブティは thé テよりもむしろ、infusion と呼ばれるのが一般的。

10) blanchir ブランシール。下茹ですること。モスカールド（葉の縮れるタイプ）のパセリは葉が厚く固くなりやすいためこの作業の指示が書かれているのだろう。新鮮で柔らかいパセリの葉であれば、細かく刻んでそのまま用いた方がよい結果を得られる。

……このマーマレードは微温い温度で供する。鴨、がちょう、豚のローストなど、何にでも合う。

【原注】ある種のローストにこのマーマレードを添えるというのは、とくにイギリスに限ったものではない。ドイツ、ベルギー、オランダでも同様に行なわれていることだ。これらの国では、ジビエのローストにはリングカコケモのマーマレード、あるいは果物のコンポート（冷製、温製どちらも）のいずれかを必ず添えるものだ<sup>1)</sup>。

## ポートワインソース

### Sauce au Porto (Porto Wine Sauce)

ポルト酒 1<sup>1</sup>/<sub>2</sub> dl にエシャロットのみじん切り大さじ 1 杯とタイム 1 枝を加えて半量になるまで煮詰める。オレンジ 2 個とレモン 1<sup>1</sup>/<sub>2</sub> 個の搾り汁を加える。オレンジの外皮の硬い部分を器具でおろしたもの<sup>2)</sup> 小さじ 1 杯と塩 1 つまみ、カイエンヌごく少量を加える。

これを布で漉し、美味しいとろみを付けた仔牛のジュ 5 dl を加える。

……野生の鴨、その他のジビエ全般に合わせる。

【原注】このイギリス料理のソースは、フランスの多くの飲食店で使われている。

## ホースラディッシュソース

### Sauce Raifort chaude (Horse radish Sauce)

アルパートソースの別名。

## リフォームソース<sup>3)</sup>

### Sauce Réforme (Reform Sauce)

ソース・ボワヴラードとソース・ドゥミグラスを合わせ、ガルニチュールとして 1~2 mm の細さで短かめの千切り<sup>4)</sup>にした中位のサイズのコルニション 2 個、固茹で卵の自身、中位の大きさのマッシュルー

ム 2 個、トリュフ 20 g および赤く漬けた牛舌肉<sup>5)</sup>を加える。

……このソースは「リフォーム風」羊のコトレット<sup>6)</sup>用。

## セージと玉ねぎのソース

### Sauce Sauge et Oignons (Sage and onions Sauce)

大きめの玉ねぎ 2 個をオーブンで焼く。冷めたら皮を剥き、みじん切りにする<sup>7)</sup>。パンの身 150 g を牛乳に浸してから押しつぶして水分を抜く。これを玉ねぎに混ぜ込む。

セージのみじん切り大さじ 2 杯と塩、こしょうで調味する。

……これは鴨の詰め物にする。

【原注】鴨をローストした際のジュを大さじ 5~6 杯この詰め物に加えてソース入れて供する。パンの身と同量の牛の脂身を茹でてみじん切りにしたものを加えることも多い。

## ヨークシャーソース<sup>8)</sup>

### Sauce Yorkshire

オレンジの外皮の硬い表面だけを薄く削って細かい千切りにしたもの大さじ 1 杯強を、ポルト酒 2 dl でしっかり茹でる。

オレンジの皮の千切りを取り出して水気をきる。ポルト酒の入った鍋に、ソース・エスパニョール大さじ 1 杯強と、グロゼイユのジュレも大さじ 1 杯強を加える。粉末のシナモン少々と、カイエンヌ少々を加える。

わずかの時間、煮詰める。布で漉し、オレンジ 1 個の搾り汁と千切りにした皮を加えて仕上げる。

……仔鴨のローストやプレゼ、およびハムのプレゼに添える。

1) 果物のコンポートへの言及は第三版から。また、1907 年の英語版 *A Guide to Modern Cookery* には原注そのものがない。英語版のレシピは「中位の大きさのリングズ 2 ポンド（約 900g）を四つ割りにして皮を剥き、芯を取り除いて刻む。これをシチュー鍋に入れ、大さじ 1 杯の砂糖とシナモン少々、水は大さじ 2~3 杯加える。蓋をして弱火にかけて煮る。提供直前に泡立て器で滑らかにする。このソースは微温い温度で、鴨、がちょう、うさぎのローストなどに添える」（p.45）となっている。

2) zeste ゼスト。オレンジやレモンの外皮の硬い部分（ごく表面の部分だけ）を薄く剥いて千切りにしたり、この場合のように râpe ラップという器具でおろして風味付けに用いる。

3) 19 世紀ロンドンの会員制クラブ、リフォームでフランス人料理長アレクシス・ソワイエが考案したソース。このような場合、Reform を固有名詞扱いとして英語のままとするのが現代のフランス語における考え方だが、20 世紀初頭にはまだ、固有名詞さえもフランス語的に言い換えることがごく普通であった。

4) julienne courte ジュリエンスクルット。

5) langue écarlate ラングエカルラット。

6) côtelette コトレット。羊、仔牛、仔羊の肋骨付きでカットした背肉のこと。牛の場合は côte コットと呼ばれるが、côte という語そのものは元来「肋骨」の意。côtelette の -ette は「縮小辞」といって、より小さいものという意味を付加している。つまり、牛の côte よりも小さいから côtelette となる。なおこの語が日本語の「カツレツ」の語源だといわれている。

7) hacher アシェ。

8) このレシピは初版からほぼ異同がなく（初版では「仔鴨とハムに合わせる」だったのが第二版で現在とまったく同じになることのみ）、原注もない。1907 年版の英語版にも掲載されていないが、1903 年アメリカ、シカゴで刊行された『*スチュワードハンドブック*』のソースの項目のなかに、「ヨークシャーソース……ハム用のオレンジソース。エスパニョール、カラント（＝グロゼイユ）ゼリ、ポートワイン、オレンジジュース、茹でて千切りにしたオレンジの外皮」（p.434）とあり、エスコフィエの『料理の手引き』初版当時には既にアメリカで知られているソースであったことがわかる。ただしイギリスのヨークシャー州とどのような関係あるいはソース名の由来があるのかは不明。

## 冷製ソース

### SAUCES FROIDES

#### アイヨリ<sup>1)</sup> / プロヴァンスバター Sauce Aioli, ou Beurre de Provence

にんにく 4 片 (30 g) を鉢<sup>2)</sup> に入れて細かくすり潰す。ここに生の卵黄 1 個、塩 1 つまみを加える。混ぜながら、2½ dl の油<sup>3)</sup> を初めは 1 滴ずつ加えていき、ソースがまとまりはじめたら糸を垂らすようにして加える。この作業は鉢に入れたままで、棒をはげしく動かして行なう。

攪拌する作業の途中、レモン 1 個分の搾り汁と冷水 大さじ ½ 杯を少しずつ加えて、ソースが固くなり過ぎないようにしてやること。

【原注】 このアイヨリソースが分離してしまいそうな時は、卵黄をさらに 1 個足して、マヨネーズと場合と同様に修正すること。

#### アンダルシア<sup>4)</sup> 風ソース Sauce Andalouse

ごく固く仕上げたソース・マヨネーズ<sup>3/4</sup> L に、上質な赤いトマトピューレ 2½ dl を加える。小さなさいの目に切ったポワヴロン<sup>5)</sup> 75 g を仕上げに加える。

#### ソース・ボヘミアの娘 Sauce Bohémienne<sup>6)</sup>

陶製の容器に、濃厚でよく冷やしたベジャメルソース<sup>1</sup> ½ dl と卵黄 4 個、塩 10 g、こしょう少々、ヴィネガー数滴を入れる。

泡立て器で全体をよく混ぜ、標準的なマヨネーズを作るのとまったく同じ要領で、油 1 L とエストラゴ

ンヴィネガー大さじ 2 杯程を加える。

……仕上げに、マスタード大さじ 1 杯を加える。

#### ソース・シャンティイ<sup>7)</sup> Sauce Chantilly

酸味付けにレモンを用いて、固く仕上げたソース・マヨネーズ<sup>3/4</sup> L を用意しておく。提供直前に、ごく固く泡立てた生クリーム大さじ 4 杯<sup>8)</sup> を加える。その後、味を調える。

……もっぱら、アスパラガスの冷製、温製に添える。

【原注】 生クリームを加えるのは、このソースを使うまさにその時にすること。前もって加えておくと、ソースが分離してしまう恐れがあるので注意。

#### ジェノヴァ風<sup>9)</sup> ソース Sauce Gênoise

殻と皮を剥いたばかりのピスタチオ 40 g と、松の実 25 g、松の実がない場合はスイートアーモンド 20 g を鉢に入れてよくすり潰し、冷めたベジャメルソース小さじ 1 杯程度を加えて練ってペースト状にする。これを目の細かい網で裏漉しする。陶製の容器に卵黄 6 個、塩 1 つまみ、こしょう少々を入れる。泡立て器でよく混ぜる。油 1 L と中位の大きさのレモン 2 個の搾り汁を少しずつ加えてよく混ぜて乳化させていく<sup>10)</sup>。仕上げにハーブのピューレ大さじ 3 杯を加える。これは、バセリの葉とセルフィユ、エストラゴン、時季が合えばサラダバーネットを同量ずつ用意し、強火で 2 分間下茹でしてから湯をきり、冷

1) ailoli とも綴るが、ail (にんにく) + oil (油) の合成語。19 世紀前半には既にアカデミーフランセージの辞書に収録されており、広く知られていたようだ。パイペースに添えるルイユとよく似ているが、ルイユがカイエンヌを加えるのに対して、こちらはにんにくと油、塩、レモン汁と少々の水だけで作る。用途も、茹でた塩鱈やじゃがいも、茹で卵、アーティチョーク、さやいんげん、などに合わせることが多い。

2) この種の作業には、大理石製のものが伝統的によく用いられる。。

3) 原書ではとくに言及されていないが、プロヴァンス地方ではオリーブオイルを用いることが一般的。

4) いうまでもなくスペインのアンダルシア地方のことだが、トマトやオリーブオイル、チョリソなどこの地方を「想起」させる食材が使われている料理などがこの名称になっている傾向がある。ところが、トマトにしろオリーブオイルにしろアンダルシア地方特有というわけではなく、アンダルシアが産地として有名なチョリソくらいしか、料理名の根拠となり得るものはない。逆に言えば、アンダルシア地方の食文化との関係は、そこに用いられている食材以外にはないものと考えてもいい。料理名に付けられた地方名がとりたてて根拠や由来のないものであることを示す一例。

5) Poivron いわゆる日本で青果として輸入されているパプリカ (肉厚の辛くないピーマン) とほぼ同じもののだが、香辛料として用いられる粉末のパプリカと混同を避けるため、あえてフランス語をそのままカタカナに訳した。

6) アイルランド出身の作曲家マイケル・ウィリアム・バルフェ Michael William Balfe (1808~1870) のオペラ *The Bohemian Girl* 『ボヘミアの少女』のフランス語版タイトル *La Bohémienne* 『ラボエミエヌ』にちなんだものと言われている。この作品はロンドンで 1843 年初演、1862 年に四幕形式のフランス語版がパリのオペラ・コミック劇場で上演され、大ヒットしたという。この名を冠した料理はいくつかあるが、いずれもチェコのボヘミア地方とは何の関連性も認められないため、オペラの人気作品にあやかった料理名と考えるのが妥当だろう。

7) パリ近郊の地名。詳しくはホイット系派生ソースのソース・シャンティイ訳注参照。

8) 大さじ 1 杯=15cc という概念にとらわれないよう注意。原文は、大きなスプーンで泡立てた生クリームをざっくりと 4 回加えるイメージで書かれている。本書における通常のソースの仕上り量が約 1 L であることを考慮すると、最低でも 100ml 以上は加えることになるだろう。

9) あまり明確な由来はないが、ジェノヴァが地中海に面した港町であり、このソースが魚料理用であるという点で一応の説明はつくだろう。

10) 明記されていないが、ソースをしっかりと乳化させるためにはマヨネーズと同様に作業すること。



水にさらしてから水気を強く絞り、裏漉しして作っておく。

……冷製の魚料理全般に合わせられる。

## ソース・グリビッシュ

### Sauce Gribiche<sup>1)</sup>

茹であがったばかりの固茹で卵の黄身 6 個を陶製のボウルに入れ、マスタード小さじ 1 杯、塩 1 つまみ強、こしょう適量を加えてよく練り、滑らかなペースト状にする。植物油 1/2 L とヴィネガー大さじ 1 1/2 杯を加えながらよく混ぜて乳化させる。仕上げるに、コルニションとケイパーのみじん切り計 100 g と、パセリとセルフィユ、エストラゴンのみじん切りのミックスを大さじ 1 杯、短かめの千切りにした固茹で卵の白身 3 個分を加える。

……冷製の魚料理に添えるのが一般的。

## レフォル風味のソース・グロゼイユ

### Sauce Groseilles au Raifort

ポルト酒 1 dl にナツメグ、シナモン、塩、こしょう各 1 つまみを加え、を 2/3 量まで煮詰める。溶かしグロゼイユのジュレ 4 dl と細かくすりおろしたレフォル大さじ 2 杯を加える。  
(さまざまな用途に使える)

## イタリア風ソース

### Sauce Italienne

仔牛の脳半分、香草を効かせたクールブイオンで火を通し、目の細かい網で裏漉しする。同量の牛あるいは羊の脳でもいい。

裏漉ししたビュレを陶製の器に入れ、泡立て器で滑らかになるまで混ぜる。卵黄 5 個と塩 10 g、こしょう 1 つまみ強、油 1 L とレモン果汁 1 個分でマヨネーズを作り、その脳のビュレを加える。パセリのみじん切り大さじ 1 杯強を加えて仕上げる。

……このソースなどんな冷製の肉料理にも合う。

## マヨネーズ

### Sauce Mayonnaise<sup>2)</sup>

冷製ソースのほとんどはマヨネーズの派生ソースだから、**ソース・エスパニョル**や**ヴルテ**と同様に基本ソースと見なされる。マヨネーズの作り方はきわめてシンプルだが、以下に述べるポイントはしっかりと頭に入れておく必要がある。

**材料と分量** ……卵黄 6 個、「からざ」は取り除いておくこと。油 1 L。塩 10 g、白こしょう 1 g、ヴィネガー大さじ 1 1/2 杯または、より白い仕上りを目指す場合にはヴィネガーと同等量のレモン果汁。

1. 塩、こしょう、ヴィネガーまたはレモン果汁はん

- 1) 由来不明の語。ノルマンディ方言で「子どもを怖がらせるおばさん」の意味で用いられるということが分かっているのみに。19 世紀後半以降に創案もしくは一般化したソースと思われる。本書初版には当然のように既に収録されており、その後の大きな異同もない。ただ、本書初版以前に出版された料理書においてこのソースのレシピはまだ見つかっていない。ファールは 1905 年刊『料理および食品衛生事典』第二版で「ある種のレムラードにレストランで付けられた名称」と定義し、掲載しているレシピは本書初版のものとは大差ないが、「ウスターシャソース少々も加える」となっているところが目を引く。また、1913 年初版のブルストの長編小説『失われた時を求めて』の「スワン家の方へ」冒頭において「彼(=スワン)を招いていない夕食会のために、ソース・グリビッシュやパイナップルのサラダのレシピが必要になるや、ためらいもなく深くに行かせたりするのだった」(p.18)。もしこの語り手の記述が正確であるなら、19 世紀末には広く知られたものであったと考えられるべきだが、小説の場合は必ずしも歴史的事実と符号するわけではないので注意が必要。
- 2) このソース名の語源には諸説あり、未だ定説と呼べるものはない。Mayonnaise という綴りそのものは 1806 年のヴィアール『帝国料理の本』が初出で、Saumon à la Mayonnaise, Filet de Sole en Mayonnaise, Poulet en Mayonnaise の 3 つのレシピが掲載されている。そのうちのひとつ、サーモンのマヨネーズは、筒切りにしたサーモンを茹でて冷まし、ジュレを混ぜたマヨネーズをかける、という内容であり、ソースについてはマヨネーズの項を参照となっているが、どういふわけかこの本にマヨネーズそのもののレシピはない。また、「鶏のマヨネーズ仕立て」におけるソースはどう見てもこんなに我々が理解しているマヨネーズとまったく違い、鶏のゼラチン質を冷し固める要素として利用したものだ。同じヴィアールの改訂版ともいうべき『王国料理の本』(1822 年)にはマヨネーズのレシピが掲載されている。興味深いことに「このソースにはいろいろな作り方がある。生の卵黄を使うもの、ジュレを使うもの、仔牛のグラスを使うものや仔牛の脳を使うもの」として、もっとも一般的な方法として生の卵黄を使う方法が示されている。生の卵黄に攪拌しながら少しずつ油を加えていき、固くなってきたらヴィネガー少々を加えてこききき、という方法であり、こんなに我々の知るマヨネーズに非常に近いものとなっている。綴りについては、カレームは *magner* (マニエ) 捏ねる、という意味の動詞から派生したものだとして、*magnonnaise* もしくは *magnionnaise* と綴るべきだと『パリ風料理の本』で力説している。グリモ・ド・ラ・レンニエールは中世フランス語で卵黄を意味する *moyeu* の派生語として *moyeunnaise* という綴りを使っている。そのほかフランス大西洋岸の地名パイヨヌの形容詞 *bayonnais* (パヨネ) が語源だという説もある。綴りの起源についてある程度有力視されているのは、1756 年にリシュリュ公爵が当時イギリスに占領されていたミノルカ島のマオン港 Mahon を奪取したことにちなんで、*mahonnaise* と名づけられたというもの。もっとも、卵黄とヴィネガーを植物油で乳化させたソースという点では、*beurre de Provence* が 1758 年刊マラン『モコス神の贈り物』に *Pigeons, au beurre de Provence* 鳩のプロヴァンスバター添え、というレシピが掲載されている (t.2, pp.290-230)。これは本書『料理の手引き』における **アイリッシュ/プロヴァンスバター** の作り方にやや近く、茹でたにんにくを鉢に入れてよくすり潰し、生の卵黄、塩、こしょう、ケイパー、アンチョビを加えてさらにすり潰し、そこに油を加えて攪拌して濃度を出させる、つまり乳化させる、というもの。また、植物油ではなくバターを用いるものとして、**オランダーズソース** の原型ともいえるレシピが 1651 年のラ・ヴァレウス『フランス料理の本』に、*Asperges à la Sauce blanche* アスパラガスのホワイトソース添え (p.238) として掲載されていることや、卵黄をポターージュやラゲのとりみ付けに使うことが古くから行なわれていたことなどを総合すると、良質のオリーブオイルやひまわり油を利用しやすい環境にある南フランスの方がどちらかといえば、卵黄と植物油の乳化作用を利用したソースの発達、普及しやすい環境にあったと想像される。なお、この「料理の手引き」では卵黄のみを用いたレシピとなっているが、全卵を用いる場合もある。日本の市販品でも卵黄のみを使うメーカーと全卵を使用しているメーカーが混在している。なお、マヨネーズの仕上りは、卵黄のみか全卵を用いるかという問題もあるが、どのような植物油を使うかにも大きく左右されるので注意。



の少々を加えて、泡立て器で卵黄を溶く。

2. 油を最初は1滴ずつ加えていき、滑らかにまとまり始めたら、糸を垂らすようにして油を加えていく。

3. 何回かに分けてヴィネガーもしくはレモン果汁を少量ずつ加え、コシを切ってやること<sup>1)</sup>。
4. 最後に熱い湯を大さじ3杯加える。これは乳化をしっかりとさせて、作り置きしておく必要がある場合でもソースが分離しないようにするため。

【原注】1. 卵黄だけの段階で塩こしょうをするとソースが分離してしまうのではないかというのはいみじみに過ぎず、実際に調理現場で作業している者はそう考えていない。むしろ、塩を卵黄の水分に溶かし込んでおいた方が、卵黄がまとまりやすくなることは科学的に証明されている<sup>2)</sup>。

2. マヨネーズを作る際に、氷の上に容器を置いて作業するも間違いだ。事実はまったく逆に、冷気が伝わるのがもっとも分離させてしまいやすい原因だ。寒い季節には、油はやや微温めか、せめて厨房の室温くらいにするべきだ<sup>3)</sup>。
3. マヨネーズが分離してしまう原因としては……

1. 最初に油を入れ過ぎてしまうこと。
2. 冷え過ぎた油を使うこと。

3. 卵黄の量に対して油の量が多過ぎること。卵黄1個につき油を乳化させることが出来るのは、作り置きするのには1 $\frac{3}{4}$  dl、すぐに使う場合でも2 dlが限度<sup>4)</sup>。

## コーティング用マヨネーズ Sauce Mayonnaise collée

コーティング用マヨネーズは、マヨネーズ7 dlに溶かしたジュレ3 dlを混ぜ込んだもの。野菜サラダをあえるのに使う他、「ロシア風」ショフロワの素材を覆うのにも使う。

【原注】**魚料理用ソース・ショフロワ**の項で述べたように、このコーティング用マヨネーズの代わりに魚料理用ソース・ショフロワを使う方がいい。その方がコーティング用マヨネーズを使う場合よりも風味も見た目もよくなる。というのも、コーティング用マヨネーズは、冷気によってゼラチンが固まるとともに収縮し、マヨネーズに圧力がかかるために、ソースで素材を覆った表面に油が浸み出してしまふ<sup>5)</sup>。こういうふうに浸み出ることを防ぐには、どんな場合でも、このコーティング用マヨネーズではなく魚料理用ソース・ショフロワを用いることをお勧めする<sup>6)</sup>。少なくとも、そうするのが一般的になりつつある。

- 1) 原文 *rompre le corps de la sauce* ソースの粘り気をヴィネガーなどを加えることで「ゆるめる」あるいは「のぼす」こと。ここでは「コンをきる」と訳したが、日本の調理用語などで注意。この作業は、一見乳化したように見えてもまだ乳化が不完全であるため、何回かに分けて濃度を下げ、攪拌を続けることで乳化を促進させ安定したものにするのが目的。
- 2) 当時の知見であることに注意。
- 3) オリーブオイルのように、飽和温度が高い種類の油ではよく見られる現象。ひまわり油でさえも寒さで濁るので、この指摘は正しい。
- 4) 卵黄の乳化能力は含まれているレシチンの量で決まるので理論上はもっとも大量の油を乳化することが可能。風味や仕上りを考慮に入れて、この数字はあくまでも目安と考えたほうがいい。
- 5) 初版における原注は、「コーティング用マヨネーズで覆ったものは、数時間経つと、油の露で覆われたようになってしまふことがある。その原因は、冷気によってゼラチンが固まる際に収縮し、その結果マヨネーズに圧力がかかり、液体である油がソースを覆った表面に浸みだしてくることだ。これを避けるために、コーティング用マヨネーズはこんにちでは使われなくなっており、我々の場合だと、かなり以前から魚料理用ソース・ショフロワを用いている (p.163)」。第二版以降、多少の異同はあるが、ほぼ第四版の記述と同様。いずれにしても、ジュレ（親水性アミノ酸であるコラーゲンが主体）を加えたことで、親水基と疎水基を併せ持つ卵黄レシチンの乳化作用が崩れてマヨネーズが分離した結果だということには気付いていなかったと思われる。
- 6) この『料理の手引き』ではジュレを加えたマヨネーズの使用に否定的だが、カレーム『19世紀フランス料理』では *Sauce Magnonnaise* として、まず最初にジュレを加えるレシピが掲載されている。概略を示すと、氷の上に置いた陶製の容器に卵黄2個、塩、白こしょう少々、エストラゴンヴィネガー少々を入れる。木のさじで素早くかき混ぜる。まとまってきたら、エクサ産の油大さじ1杯とヴィネガー少々を、少しずつ加えていく。容器の壁に叩きつけるようにしてソースを泡立てていく。この作業でマヨネーズの白さが決まるという。また、油をごく少量ずつ加えていくことを強調している。粘度が出て滑らかになったら、最後に油をグラス二杯（ $\approx 2$  dl）と**アスピック用ジュレ**をグラス $\frac{1}{2}$ 杯、エストラゴンヴィネガー適量を加えて上げる、というもの（t.3, p.132. 強調は引用者による）。カレームはこのソースを白く仕上げることにこだわっているが、卵黄の色（薄黄色～オレンジ）は飼料に含まれている色素の影響を大きく受けるので、現代のようもちょうど中心の配合飼料にはバプリカ色素などが添加されていることが多い（赤系の色素を添加すると濃い黄色あるいはオレンジになりやすいため）。いっぽう、「おから」や飼料米などを主な飼料としている場合（有機農業系の平飼いや養鶏に多い）は、そういった色素を添加するケースが少ないうえに、黄身の色が薄くなる傾向がある。19世紀には上記のような飼料への色素添加がまだ行なわれていなかったと思われるので、白い仕上がりを目指すのは納得のいくところだろう。また、カレームは卵黄に含まれるレシチンによって乳化作用が起きることを経験的にさえも理解していなかったようであり、卵黄を用いないマヨネーズのレシピも掲載されている。なかでも特徴的なのは、「ジュレ入りの白いマヨネーズ」のレシピで、これは氷の上に鍋を置き、大きなレードル2杯の白いジュレと同量の油、レードル1杯のヴィネガー、塩、こしょうを入れて卵白用の泡立て器でよく混ぜ、途中何回かレモン果汁を少しずつ加えて白く仕上げるようにする、というもの（*ibid.*, p.133）。とりわけ舞踏会や格式ある大規模な宴席で魚のフィレや鶏のアスピックを飾るのに適していると述べている。カレームの時代のジュレは冷蔵技術が発達していなかったために、基本的にはかなりコラーゲン（ゼラチン質）の多い、固い仕上りのものであったと考えらる。すなわち、固いジュレを油で「ゆるめた」ものがマヨネーズというソースとして成立し得たのだろう。構造としては現代のマヨネーズが卵黄や酢の水分の外側にレシチンが覆うようにして油との乳化をしているのとは逆に、常温でもある程度の固さのあるゼラチンを泡立てて、その気泡のなかに油を閉じ込めているイメージだろうか。

## ロシア風ホイップマヨネーズ Sauce Mayonnaise fouettée, à la Russe

陶製かホーローの容器に、溶かしたジュレ 4 dl とマヨネーズ 3 dl、エストラゴンヴィネガー大さじ 1 杯、おろしてさらに細かく刻んだレフォール<sup>1)</sup>大さじ 1 杯を入れる。

全体を混ぜ、容器を氷の上に置いて泡立て器でホイップする。ムース状になり、軽く固まり始めるまで、つまりこのソースを使うのに充分な流動性がある状態のところで作業をやめる<sup>2)</sup>。……主に、野菜のサラダを型に詰めて固めるのに用いる。

## マヨネーズのバリエーション Sauce Mayonnaise diverses

オードブルや冷製料理に合わせるのに、大型甲殻類<sup>3)</sup>およびエクルヴィス<sup>4)</sup>の卵やクリーム状の部分を用いたり、クルヴェット<sup>5)</sup>、キャビア、アンチョビなどを加えることでマヨネーズにバリエーションを付けることが出来る。

上記の材料のいずれかをすり潰してから少量のマヨネーズを加えてビュレ状にして布で漉す。これを適量のマヨネーズに混ぜ合わせればよい。

## ソース・ムスケテル Sauce Mousquetaire<sup>6)</sup>

マヨネーズ 1 L に以下を加える。ごく細かいみじん切りにしたエシャロット 80g を白ワイン 1<sup>1</sup>/<sub>2</sub> dl に加えてほとんど煮詰めたもの。溶かした**グラスドヴィ**

**アンド**大さじ 3 杯、シブレット<sup>7)</sup>を細かく刻んだもの大さじ 1 杯強。カイエンスごく少量かミルで挽いたこしょう少々で風味を引き締める。

……羊、牛肉の冷製料理に添える。

## クリーム入りソース・ムタルド Sauce moutarde à la crème

陶製の容器にマスタード大さじ 3 杯と塩 1 つまみ、こしょう少々とレモン果汁少々を入れて混ぜ合わせる。ここに少しずつ、マヨネーズを作る要領で、ごく新鮮なクレーム・エベス<sup>8)</sup>約 2 dl を加える。

……オードブル用。

## くるみ入りソース・レフォール Sauce Raifort aux noix

陶製の器に、おろしたレフォール 250g と皮を剥いて刻んだくるみ 250 g、塩 5 g、砂糖 15 g、クレーム・エベス 3dl を入れて混ぜ合わせる。

……オンブルシュヴァリエ<sup>9)</sup>の冷製用。

## ソース・ラヴィゴット<sup>10)</sup>/ ヴィネグレット<sup>11)</sup> Sauce Ravigote, ou Vinaigrette

**材料** ……油 5 dl、ヴィネガー 2 dl、小さめのケイパー 小さじ 2 杯、パセリ 50 g、セルフイユとエストラゴン、シブレットを刻んだもの 40 g、細かくみじん切りにした玉ねぎ 70g、塩 4 g、こしょう 1 g。以上をよく混ぜ合わせる。

……仔牛の頭や足、羊の足などに合わせる。

1) ホースラディッシュ、西洋わさび。

2) 分量比率を考えると、構造的には前項の注で言及したカレームのジュレを主体としたマニョネーズに近いものと思われる。

3) homard オマール、langoustine ラングースト（≒伊勢エビ）など。

4) ざりがにのこと。詳しくは**パイエルン風ソース**訳注参照。

5) 小海老のこと。詳しくは**ソース・クルヴェット**訳注参照。

6) マスケット銃兵、近衛騎兵、の意。日本でも子どもむけに翻案されたもので有名な 19 世紀のアレクサンドル・デュマ（ペール）の小説 *Les Trois Mousquetaires* 『三銃士』の「銃士」がこれに相当する。

7) チャイブ。アサツキとも訳されることがあるが、日本のものとは風味が異なるので注意。

8) 乳酸醗酵させた、とても濃度のある生クリーム。

9) サケ科の淡水魚。体長 20～30 cm のものが多く、最大で 70 cm を越えるものもいるという。日本の岩魚に近い。フランスではアルプスのドイッおよびイタリアとの国境付近に生息するが、現代では養殖も多いという。

10) ホワイト系派生ソースの**ソース・ラヴィゴット**参照。

11) 現代フランス語で vinaigrette（ヴィネグレット）はいわゆる「ドレッシング」を指す。語源的にはヴィネガーを意味する vinaigre（ヴィネグル）に縮小辞 -ette を付けたもの。ヴィネグレットという名称のレシピとしてもっとも古いのは 14 世紀に成立したとされる「タイユヴァン」のもので、いわゆる「ヴァチカン写本」に収録されており、**Potage Lyans**「とろみを付けた煮物」に分類されている。概要を示すと、menue-haste ムニユアット（豚の脾臓およびレバー半分と腎臓）をローストする。火を通しすぎないよう注意。それを切り分けて、鍋にラード、輪切りにした玉ねぎとともに入れて、炭火にかけ、よく混ぜながら火を通す。全体によく火が通ったら、牛のフィヨンとワインを注いで沸かす。マニグット、サフランなどを鉢でよくすり潰したらヴィネガーでのぼして加え、再度沸騰させる。全体にとろみがあって茶色に仕上げる、というもの (p.222)。これをほぼ書き写したと思われる 14 世紀末に書かれた『ル・メナジエ・ド・パリ』のレシピでは、肉の下処理としてよく洗ってから湯通しすること、とろみ付けの要素としてこんがり焼いたパンを香辛料とともにすり潰してワインとヴィネガーで溶く、という指示が追加されている。また、こんがり焼いたパンを使わずに茶色に仕上げられるわけがない云々という『ル・メナジエ・ド・パリ』の筆者自身の感想も記されている。15 世紀に書かれたシカールの『料理について』でも豚のレバーを焼いてから煮込みヴィネガーを加えるもので、細部は違いますが基本的に似たものであり、中世においては豚レバーを煮込んでヴィネガーで味付けしたもの、ということになる。これが変化したと思われるのは 17 世紀。1693 年刊シアンロ『宮廷およびブルジョワ料理の本』には Boeuf, Vinaigrette というレシピがあり、これは切った牛肉に背脂を溶いて塩茹でして冷まし、ヴィネターをひき垂らしてレモンのスライスを添えるというとても単純なもの。ところが、1694 年のアカデミーフランスの辞書には既に「ヴィネガー、油、塩、こしょう、パセリ、シブール[葱]で作る冷製ソース」という定義がなされている。こんにち我々がイメージするヴィネグレットの定義にほぼ近い。おおむね 17 世紀以降、とりわけ後半にヴィネガーと油、塩を合わせた冷製ソースというコンセンサスが形成されたと想像される。ところで、料理とはまったく関係ないが、いわゆる日本語でいう「人力車」つまり二輪で椅子があり、人力で引く車のことも vinaigrette という。ただしこれは、ヴィネガー醸造業者 vinaigriers の用いる小さな馬車と似てこいるからそう呼ばれるようになったという。

ソース・レムラード<sup>1)</sup>

## Sauce Rémoulade

マヨネーズ 1L 以下のもを加える。マスタード 大さじ 1½ 杯。コルニション 100 とケイパー 50g を細かく刻んで、圧して余分な水気を絞ったもの。パセリ、セルフィユ、エストラゴンのみじん切り大さじ 1 杯。アンチョビエッセンス大さじ 1½ 杯。

## ロシア風ソース

## Sauce Russe

鉢に、オマール<sup>2)</sup>かラングースト<sup>3)</sup>の胴のクリーム状の部分 100g とキャビア 100g<sup>4)</sup>、マヨネーズ大さじ 2〜3 杯を加えてよくすり潰す。これを目の細かい漉し器で裏漉しする。こうして出来たビュレに、マヨネーズ ¾L を加える。大さじ 1 杯強のマスタードと、同量のダービーソース<sup>5)</sup>を加えて仕上げる。

……魚および甲殻類の冷製料理に添える。

タルタルソース<sup>6)</sup>

## Sauce Tartare

固茹で卵の黄身 8 個をすり潰して滑らかになるまでよく練る。塩、挽きたてのこしょう各 1 つまみ強で味付けする。油 1L とヴィネガー大さじ 2 杯を加えながらソースを立てていく<sup>7)</sup>。若どりの玉ねぎ<sup>8)</sup>の葉またはシブレット 20g をすり潰してマヨネーズ大さじ 2 杯でのばし、目の細かい網で裏漉ししたものを加えて仕上げる。

……このソースは、冷製の家禽や肉料理、魚料理、甲殻類いづれにも合う。また、「ディアブル（悪魔風）」仕立ての肉料理、鶏料理にも用いられる。

- 1) ソース名としての初出はおそらくムノン『ブルジョワ屋敷勤めの女性料理人のための本』（1734）における Sauce à la rémoulade だろう。レシピの概要は、エシャロット、パセリ、シブール、にんにく 1 片、アンチョビ、ケイパー、いずれもごく細かく刻んで鍋に入れ、塩、粗挽きこしょうを加え、マスタード少々と油、ヴィネガーでのばす、というもの。つまり、乳化ソースであるマヨネーズをベースにした本書のレムラードと、乳化させないという点が異なるのみで、基本的なところは共通していると見ていい。ヴィアール『帝国料理の本』第 7 版（1812 年）には Rémoulade の綴りで、緑色のレムラード、レムラード、インド風レムラードと 3 種のレシピが掲載されている（この版にはまだマヨネーズのレシピは掲載されていない）。このうちのレムラードのレシピの概要は、グラス 1 杯のマスタードを器に入れ、エシャロットのみじん切り少々と香草少々を加える。油を大さじ 6〜7 杯、ヴィネガー大さじ 3〜4 杯、塩、粗挽きこしょうを加える。これらをよく混ぜ合わせ、生の卵黄 2 個を加えてさらによく混ぜる。ソースがよくまとまるように気をつけてしっかり絞。やや濃い仕上りにする、というもの (p.53)。手順的にはやや異なるが、卵黄を用いて乳化させようとしていることがわかる。緑のレムラードも生の卵黄を用いるなど、香草をすり潰すこと、ほうれんそうの緑の色素を用いる以外はレムラードと同様。なお、インド風レムラードの場合は固茹で卵の卵黄 10 個をよくすり潰して大さじ 8 杯の油を加えてさらによく混ぜる。唐辛子とターメリックの粉末、塩、こしょう、ヴィネガーを加える。出来るだけ粘りが出るようにする。これを布で漉して供する (id.)。カレームに至るとさらにレシピは洗練されたものとなり、Sauce Rémoulade à la Ravigote（ソース・レムラード・アラ・ラヴィゴット）では、セルフィユとエストラゴン、サラダバーネット、シブレットを茹がいて水にさらした後に水気を搾り、固茹で卵の卵黄を加えてよくすり潰し、塩、こしょう、ナツメグで調味して、上等のマスタードを加える。ここにエクス産の油とエストラゴンヴィネガーを少しずつ加えていく。最後に布で漉す (t.1, p.135) というもの。いづれにしてもマヨネーズを基本ソースとして展開するという『料理の手引き』の発想、体系化にいたるまで 100 年近くを要したことになる。

- 2) homard ロブスター。

- 3) langouste ≡ 伊勢エビ。

- 4) チョウザメの卵の塩蔵品のことだが、「高級」とされる順に、beluga（ベルガ）、osciètre, ossetra（オシエートル、オセトラ）、sevruga（セヴルガ）の種類がある（ここで示した読みがなはフランス語風のもの）。

- 5) 初版では原注として、風味付けにマスタードを加えることを示唆しているのみ。第二版では「マスタードとウスターシャソースを各大さじ 1 杯強」、第三版では「マスタードとエスコフィエソースを大さじ 1 杯強」と変遷している。なお、ダービーソース Derby Sauce の 1946 年の広告には、このブランド名でパーベキューソース、ステーキソース、ウスターシャソース、ホットソース、チャプスイソースのラインナップが記されている。現実問題として、もし加えるとするならリー・ベルリンのようなウスターシャソースということになろうか。

- 6) タルタル（タルール）= フランス人から見て東方の蛮族、というイメージで語られがちだが、カレーム『19 世紀フランス料理』にある Sauce Rémoulade à la Mogol [Mongole の誤植と思われる]「モンゴル風ソース・レムラード」および Sauce à la Tartare「タルタル風ソース」のレシピを見るかぎり、誤解という可能性も感じられる。前者は固茹で卵の卵黄に塩、こしょう、ナツメグ、カイエン、砂糖、油、エストラゴンヴィネガーを合わせてビュレ状にして布で漉し、サラランを煎じた汁で美しい黄色に染め、刻んだシブレットを加えて仕上げるというもの。後者はソース・アルマンドとマスタード同量に生の卵黄 2 個を加え、塩、こしょう、ナツメグで調味してエクス産の油レードル 2 杯分とレードル 1½ 杯のエストラゴンヴィネガーを少しずつ加えながら混ぜていく。みじん切りにして下茹でしたエシャロット少々とにんにく少々、エストラゴンとセルフィユのみじん切りを大さじ 1 杯加える、というもの (pp.137-138)。少なくともこれらのレシピにおいて、タルタルすなわち野蛮、というニュアンスを見出すことは出来ないだろう。なお、Steak tartare タルタルステーキのレシピは本書には掲載されておらず、1938 年の『ラルース・ガストロノミック』初版が初出と思われる (p.1019)。

- 7) 明記されていないが、マヨネーズやソース・グリビッシュと同様に作業すること。

- 8) いわゆる「オニオンヌーヴォー」だが、日本でこの名称で流通しているものは黄色系の品種が多いのに対し、フランスでは白系品種（oignon blanc オニオンブロン）が多く、風味が異なることに注意。

- 1) 緑のソース、の意。この名称のソースは中世からある。このレシピではほうれんそうとクレソンが主体になっているが、時代とともにその材料には変遷がある。中世においては、麦の若葉をすり潰して用いるレシピが多かった。
- 2) 日本では、ほうれんそうを葉のみではなく葉軸とともに利用するのが一般的だが、伝統的なフランス料理において葉軸は使われないのが普通。そもそも日本のほうれんそうは密植して葉が立つように仕立てて比較的若いものに対して、ヨーロッパ品種のほうれんそうは株間を充分にとってロゼタ状に葉が広がるように栽培するのが伝統的な手法。この場合、葉は肉厚に仕上がるが、葉軸は太くて固いため可食部と見なされなかった。昔のフランスの八百屋の店先では軸

## ソース・ヴェルト<sup>1)</sup>

### Sauce Verte

ほうれんそうの葉<sup>2)</sup> 50 g とクレソンの葉 50 g、パセリの葉とセルフィユ、エストラゴンを同量ずつ計 50 g を、沸騰した湯に投入し、強火で 5 分間茹でる。水気をきり、手早く冷水にさらす。しっかりと押し絞って水気をきり、鉢に入れてすり潰す。これをトーション<sup>3)</sup>でくるんできつく絞り、葉の濃い汁を 1 dl 搾りだす。

固く立てて風味付けをしたマヨネーズ 9 dl にこの緑の汁を加える。

……冷製の魚料理や甲殻類に合わせる。

## ソース・ヴァンサン<sup>4)</sup>

### Sauce Vincent

**作り方 (1)** ……オゼイユ<sup>5)</sup>の葉とパセリの葉、セルフィユ、エストラゴン、シブレット、サラダバーネット<sup>6)</sup>のごく若い葉をきっちりと同量ずつ、計 100 g、クレソンの葉 60 g とほうれんそうの葉 60 g を沸騰した湯で強火で 2~3 分間茹でる。

湯をきって、冷水にさらす。しっかりと水分を押し絞って、鉢<sup>7)</sup>に入れる。茹であがったばかりの固茹で卵の黄身 6 個を加えて滑かになるまですり潰す。これを布で漉し<sup>8)</sup>、陶製の容器に移す。塩 1 つまみ強とこしょう適量、生の卵黄 5 個を加える。油 8dl とヴィネガー適量を加えながら混ぜ、滑らかに乳化させる。

風味付けにダービーソース<sup>9)</sup> 大さじ 1 杯を加えて仕

上げる。

**作り方 (2)** ……作り方 (1) の香草と葉菜のピューレを作るところまでは同じ。

これにマヨネーズを加えて、同様に仕上げる。

……冷製の魚料理、甲殻類にとりわけ合う。

【**原注**】このソースは 18 世紀の偉大な料理人のひとり、ヴァンサン・ラシャペルが考案したもの<sup>10)</sup>。

## スウェーデン風ソース<sup>11)</sup>

### Sauce Suédoise

酸味のある固いリンゴを薄切りにして鍋にしっかりと蓋をして煮る。普通の果肉が甘いリンゴを使う場合にはレモン果汁数滴を加えること。リンゴを煮る際には、白ワインを大さじ数杯だけ加えればいい。リンゴを煮るというよりは蒸気の圧力で溶かすイメージ。

これを目の細かい網で裏漉しする。このリンゴのピューレを 2<sup>1</sup>/<sub>2</sub> dl になるまで煮詰める。十分に冷ましてから、マヨネーズ<sup>3</sup>/<sub>4</sub> L を加える。風味付けにおろした（または細かく刻んだ）レフォール大さじ 1<sup>1</sup>/<sub>2</sub> 杯を加えて仕上げる。

……このソースはとりわけ豚肉の冷製に合う。がちょうのローストの冷製にもよく合う。

【**原注**】リンゴの時季でない場合は、リンゴのピューレの代わりに房なりの緑のグロゼイユ<sup>12)</sup>またはグーズベリー<sup>13)</sup>のピューレ 2<sup>1</sup>/<sub>2</sub> dl を固く立てたマヨネーズ 1 L に加える。このソースはマスタードで風味付けしてもいい。

を切り捨てる作業風景がよく見られたという。現代では機械収穫に適した立性の品種が増えており、専用の大型機械で株元近くから切り取り、自動的に軸をある程度除去して併走する巨大なコンテナに移すという収穫方法が普及しており、量産品のピューレなどに使用されている。

- 3) 綿などの天然素材で出来た調理場及びホール業務に用いられる布。サイズは 50~55cm×70~80cm のものが多い。
- 4) 18 世紀フランスを代表する料理人のひとり、Vincent La Chapelle ヴァンサン・ラシャペル (1690 または 1703~1745) の名を冠したソースと言われている。彼はチェスターフィールド伯フィリップ・スタンホープに仕えていた頃に三巻からなる『近代料理』Modern Cook 英語版を 1733 年に上梓。そのフランス語版 (全 4 巻) は 1835 年に *Le Cuisinier moderne* のタイトルでアムステルダムで刊行された。そして全 5 巻からなる第二版を 1742 年に自費で出版した。このソースはヴァンサン・ラシャペル本人の考案したものとも言われるが、1742 年版の著書には収録されていない。ただ、香草の扱いを得意としていたのは事実のようで、Sauce en Ravigote (ソース・オン・ラヴィゴット) だけでも 5 種のレシピが掲載されている。
- 5) タデ科の葉菜。英語由来のソレルという名称もよく使われる。日本のスカンポに近く、そのように訳されることもあるが、オゼイユは野菜として品種の選抜育成が長期にわたって行なわれたために、同じものとはいえない。
- 6) pimprenelle パンブルネル。
- 7) 伝統的には大理石製の鉢がこの種の作業には用いられた。
- 8) このように濃度のあるものを布で漉す方法についてはヴァルテ訳注参照。
- 9) ロシア風ソース訳注参照。
- 10) 卵黄と油、ヴィネガーを乳化されたソースとしては 1758 年刊マラン『コモス神の贈り物』における鳩のプロヴァンスバター添えという例はあるが、その語のヴィアルやカレームの記述を読むかぎりにおいて、卵黄レシチンによる油と水分の乳化作用については経験レベルでさえはっきりとは認識されていなかったと考えられる。このソースあるいはこれに相当するレシピがヴァンサン・ラシャペルの著書に掲載されていないこと、レストランの店主ではなく貴族に仕えていた料理人であることを考慮すると、このソースの考案者が彼である可能性も、自身の名をソース名に冠した可能性も低いと言わざるを得ない。ただし、香草と葉菜を茹でてすり潰したピューレを上述の各種レムラードのいくつかで使用していることから、後世にこの名称が付いた、あるいはこのソースの最大のポイントがヴァンサン・ラシャペル風の香草のピューレであるとも考えられることも可能だろう。
- 11) 基本的にソース名はアルファベット順に掲載されているのだが、このソースだけが後からとって付けたように末尾にある。実際、このレシピは第二版から掲載となっているが、ある程度組版が進んだ段階で急遽追加されたのだらうか。なお、1907 年の英語版には掲載されていない。原注の最後「このソースはマスタードで風味付けしてもいい」は第四版で追加されたものだが、他は第二版からまったく異同がなく、掲載順も変化していないのはいささか不思議なところ。
- 12) すぐり。ここではホワイトカントの若どりのものを指している。
- 13) groseilles à maquereau (グロゼイユザマクロー)。

イギリス風ソース（冷製）<sup>1)</sup>

## SAUCES FROIDES ANGLAISES

ケンブリッジ<sup>2)</sup>ソース

## Sauce Cambridge (Cambridge-Sauce)

固茹で卵の黄身 6 個と、よく洗ったアンチョビのフィレ 4 枚、小さめのケイパー大さじ 1 杯、セルフイユとエストラゴンとシブレットのみじん切りを同量ずつ計大さじ 1 杯を鉢に入れてよくすり潰す。マヨネーズを作る際の際で、マスタード小さじ 1 杯、油 1 $\frac{1}{2}$ dl<sup>3)</sup>とヴィネガー大さじ 1 杯を加える。カイエンスごく少量で風味を引き締める。ヘラでソースを混ぜながら布で漉し<sup>4)</sup>、ボウルに入れる。泡立て器で軽く混ぜて滑らかにしてやり、パセリのみじん切り小さじ 1 杯を加えて仕上げる。

カンバーランド<sup>5)</sup>ソース

## Sauce Cumberland (Cumberland-Sauce)

鍋にグロゼイユのジュレ大さじ 4 杯を入れて溶かし、そこにポルト酒 1 dl と細かいみじん切りにして下茹でして水気を絞ったエシャロット大さじ  $\frac{1}{2}$  杯、オレンジの表皮と<sup>6)</sup>とレモンの表皮を薄く剥いてごく細かい千切りにしてしっかり下茹でしてよく水気をきって冷ましたもの各大さじ 1 杯、オレンジ 1 個の搾り汁、レモン  $\frac{1}{2}$  個分の搾り汁、マスタード小さじ 1 杯、カイエンスごく少量、粉末の生姜少々を加える。

全体をよく混ぜる。

……大型ジビエの冷製に合わせる。

グロスター<sup>7)</sup>ソース

## Sauce Gloucester (Gloucester-Sauce)

ごく固く立てたマヨネーズ 1 L に、レモン  $\frac{1}{2}$  個分の搾り汁を加えたサワークリーム 2 dl と、細かく刻んだフェンネル 1 つまみ、ダービーソース<sup>8)</sup>大さじ 2

杯を加える。

……主として肉の冷製料理に合わせる。

## ミントソース

## Sauce Menthe (Mint-Sauce)

ミントの葉 50 g をごく細かい千切りか、みじん切りにする。これをボウルに入れて、白いカソナー<sup>9)</sup>かパウダーシュガー 25 g とヴィネガー 1 $\frac{1}{2}$  dl、塩 1 つまみ、水大さじ 4 杯を加える。全体によく混ぜること。……仔羊<sup>10)</sup>の温製、冷製に添える。

オックスフォード<sup>11)</sup>ソース

## Sauce Oxford

上述のカンバーランドソースと同様に作るが、以下の 2 点を変更する<sup>12)</sup>。

1. オレンジとレモンの外皮は千切りにするのではなく、器具を用いておろすこと。
2. その量は半分にする。つまり、おろした外皮はそれぞれ大さじ  $\frac{1}{2}$  杯にすること。

……用途はカンバーランドソースと同じ。

## ホースラディッシュソース

## Sauce Raifort (Cold horseradish sauce)

陶製の器に、マスタード大さじ 1 杯、細かくおろしたレフォール 50 g、パウダーシュガー 50 g、塩 1 つまみ、生クリーム 5 dl、牛乳に浸してからよく圧したパンの身 250 g、ヴィネガー大さじ 2 杯を入れて混ぜ合わせる。

……このソースは牛肉のブイイ<sup>13)</sup>やローストに合わせる。よく冷やしてから供すること。

【原注】ソースにヴィネガーを加えるのは作業の最後にすること。

1) この節に収録されているレシピは初版から第四版まで、表現の異同はあるが、項目に変化はない。興味深いことに、1907 年刊の英語版 *A Guide to Modern Cookery* においても全て掲載されている。

2) イングランド東部のケンブリッジシャーの州都。大学都市として有名。

3) マヨネーズを作る際の際で、と表現しているのに対して油の量が少なく思われるが、初版は「油 1 dl」、第二版以降は「1 $\frac{1}{2}$  dl」となっている。

4) 濃度のあるソースを布で漉す方法については **ヴルデ** 訳注参照。

5) イングランド北部の旧カウンティ（行政区分、ほぼ「州」と考えていい）のひとつ。現在はウェストモアランド、ランカシャー、ヨークシャーの一部と統合され、カンブリアとなっている。

6) zeste セスト。柑橘類の硬い外皮を râpe (ラプ) と呼ばれる器具を用いておろした場合にもこの語を用いる。

7) イングランド南部、グロースターシャーの州都。

8) 初版と第二版は「ウスターシャソース数滴」、第三版は「エスコフィエソース数滴」となっている。**ロシア風ソース** 訳注も参照のこと。

9) 通常 cassonade すなわち粗糖は褐色のものが多い。

10) 本書で仔羊 agneau（アニーヨ）と言う場合はほぼ例外なく乳呑仔羊、agneau de lait（アニョードレ）を意味する。現代は仔羊という語の意味する範囲が広くなり、牧草および飼料によりある程度まで肥育した羊の赤身肉も「仔羊」として扱うが、乳呑仔羊は白身肉なので注意。

11) イングランド東部、オックスフォードシャーの州都。英語圏では最古の大学であるオックスフォード大学を中心とした学園都市として有名。

12) オレンジとレモンの皮の扱いと量を変えただけで別のソースとして扱うことに疑問はあるが、これについては初版から一貫してまったく説明がない。何らかのエピソードがこれらのソース名にはあったと思われるが不明。

13) 茹で肉、の意。肉単体あるいは野菜とともに煮たもので、もとはブイオンをとった残りだったが、17 世紀にこの食べ方が流行し、料理名として残った。



## 合わせバター

### グリル、ソースの補助材料、オードブル用

#### BEURRES COMPOSÉS POUR ADJUVANTS DE SAUCES ET HORS-D'OEUVRE

### 概説

本書においてレシピを掲載している合わせバター<sup>1)</sup>のうちのほとんどは、甲殻類の合わせバターを除いて、料理に直接用いられることがとても少ない。だが、合わせバターはさまざまなシチュエーションで役に立つ。ポターージュでは野菜の合わせバターが、その他の合わせバターはソース作りにおいて有用だ。ソースの風味と性格を明確に伝える決め手になるからだ。

だから、読者である料理人諸君には、ここに書いてあることを真剣に読みとっていただきたい。

甲殻類のバターについては、経験上、湯煎にかけながら煮出して<sup>2)</sup>から、氷水で冷やした陶製の容器に布で漉し入れるといい。そうすれば、冷たい状態で作るよりも赤みがきれいに出る。だが逆に、熱によって風味の繊細さが失なわれてしまい、雑味さえも出てしまう。

この問題点を解決するために、我々は二種類の違うバターを作るという方式を採用することにした。ひとつは甲殻類の胴のクリーム状の部分と切りくずあるいは身そのものを生のバターとともに鉢ですり潰して、目の細かい網で裏漉しするか、布で漉すというもの。このバターはソースに完璧ともいべき風味を添えてくれる。とりわけベシャメルソースをベースとしたソースの場合はそうだ。

もうひとつは、甲殻類の殻だけを用いて、熱して作るものだ。これは「色付け」の役割しか持たない。この方式はまことに素晴らしい結果を得られるので、ぜひとも実行していただきたい。

場合によっては、我々はバターを同様の上等な生クリームに代えることがある。生クリームのほうがバターよりも、素材の持つ風味や香気をよく吸収する。こうすればソースやポターージュの仕上げに加えるのに文句ないクリ<sup>3)</sup>を作ることが出来るわけだ。

色付け用のバターを使うと、ソースがきれいに色付き、個性的なソースとなる。どんな場合でも、カルミン色素<sup>4)</sup>よりもずっといい。カルミン色素はソースやポターージュにくすんだ、なまけな

1) beurre composé ブール・コンポゼ。ミックスバターとも。バターはフランス食文化史において、少なくとも中世以来長く用いられてきた食材だが、中世〜ルネサンスにおいては獣脂（もっぱらラード）のほうが料理に用いられる傾向にあった。17世紀以降はたとえばラ・ヴァレーヌ『フランス料理の本』におけるアスパラガスの白いソース添え（ソース・オレンジーズ訳注参照）のように、バターを料理に用いることが中世の料理書と比較すると圧倒的に増えた。ムノンの1741年刊『ブルジョワ屋敷に勤める女性料理人のための本』のバターの項には「良質のバターを用いるのは料理でとても重要なことであり、バターが悪い匂いを放っているようではどんな素晴らしい皿も台無しだ。料理担当の女中であればこのことをよく理解しておくことと、良質なバターの価格を手に入れるのに金を惜しんではならないことを肝に銘じておくこと。最良のバターは自然な黄色をしており、白いものは大抵の場合、そして美味しくない。バルボットという植物から採った黄色で着色されたバターもある。こういうバターの色は、自然なバターの黄色よりもくすんだもので、慣れれば簡単に見分けることが出来る（p.320）」。合わせバター（具体的にはアンチョビバター、エクルヴィスバターなど）への言及は1806年刊ヴィアール『帝国料理の本』に既に見られるが、この初版および第二版は残念なことにくつかの基本的なソースなどの記述が欠落しており、そのレシピそのものは記載されていない。ところで、現代フランスのバターは無塩のものと、ブルターニュ産に代表される有塩のものがおり、料理および製菓では基本的に無塩バターを用いる。生乳をとる牛の品種や製法はさまざまだが、乳酸醗酵させたいわゆる醗酵バターが多い点が日本と大きく異なる。この節に限らず本書のレシピは、無塩バターの使用を前提にしていることに注意。

2) infuser アンフュゼ。

3) Coulis 水分のやや多いピューレをイメージするといひ。

4) コチニール色素ともいう。ラックカイガラシなどを原料として抽出した色素。ヨーロッパでは古代から中世にかけてケルメスカイガラシから抽出され利用されてきた、非常に歴史の古い色素。とりわけルネサンス期には高級毛織物の染料として需要が高まった。また絵の具にも使用された。その後、ウチワサボテンでエンジムシを大量に養殖していた中南米を支配下に置いたスペインが、これを新大陸産のカルミンとしてヨーロッパ各国に売ることでも巨万の富を得たという。かつて食品工業において多用された。1838年の『ラルース・ガストロノミック』初版では、「コチニールから抽出される鮮かな赤色色素で毒性はない。多くの食品に着色料として用いられている」とある。現在は食物アレルギーの原因



い色合いしか与えてはくれないのだ。

合わせバターは一般的に、使う際にその都度作る<sup>1)</sup>ものだが、作り置きしておかなければならない場合は、白い紙で円筒形に包んで冷蔵保管すること。

## にんにくバター

### Beurre d'Ail

皮を剥いたにんにく 200 g を強火でしっかり茹でる<sup>2)</sup>。よく湯をきってから、鉢に入れてすり潰し、バター 250 g と合わせ、布で漉す。

## アンチョビバター

### Beurre d'Anchois

アンチョビのフィレ 200 g をよく洗い、しっかり水気を絞る。これを鉢に入れて細かくすり潰す。バター 250 g を加えて布で漉す。

## アーモンドバター

### Beurre d'Amande

アーモンド<sup>3)</sup> 150 g を湯むきしてよく洗い、すぐに水数滴を加えてすり潰してペースト状にする。これをバター 250 g と混ぜ合わせ、布で漉す。

## ブル・ダヴリーヌ<sup>4)</sup>

### Beurre d'Aveline

アヴリーヌ 150 g を焙煎して丁寧に皮を剥く。油が浮いてこないよう水を数滴加えてペースト状にすり潰す。これとバター 250 g を混ぜ合わせる。目の細かい網で裏漉しするか、布で漉す。

## ブル・ベルシー<sup>5)</sup>

### Beurre Bercy

白ワイン 2 dl に細かく刻んだエシャロット大さじ 1 杯を加えて半量になるまで煮詰める。生温い程度まで冷ましてから、ポマード状に柔かくしたバター 200 g を混ぜ込む。牛骨髄 500 g をさいの目に切っ<sup>6)</sup>て、沸騰しない程度の湯で火を通し、よく湯ぎりをして加える。パセリのみじん切り大さじ 1 杯と塩 8 g、挽きたてのこしょう 1 つまみ強とレモン 1/2 個分の果汁を加えて仕上げえる。

## キャビアバター

### Beurre de Caviar

圧縮キャビア<sup>7)</sup> 75 g を細かくすり潰す。バター 250 g を加えて、布で漉す。

## ブル・シヴリ<sup>8)</sup> / ブール・ラヴィゴット<sup>9)</sup>

### Beurre Chivry

パセリの葉とセルファイユ、エストラゴン、シヴレット、若摘みのサラダバーネット 100 g を数分間下茹でし、水にさらしてから圧して余分な水気を絞る。エシャロットのみじん切り 25 g も下茹でする。これらを鉢に入れてすり潰す。

バター 125 g を加え、布で漉す。

## ブル・コルペール<sup>10)</sup>

### Beurre Colbert

メートルデルバター 200 g に、溶かした**グラスドヴィアンド**大さじ 2 杯と細かく刻んだエストラゴン 小さじ 2 杯を加える。

## 色付け用の赤いバター

### Beurre Colorant rouge

出来るだけ沢山の甲殻類の殻などの残りをまとめて用意する。殻の内側、外側に張り付いている膜などをきれいに取り除く。よく乾燥させてから、鉢<sup>11)</sup>に入れて細かく粉砕して、同じ重さのバターを加える。これを湯煎にかけてよく混ぜながら溶かす。氷水を入れた陶製の器に、布で漉し入れる。固まったバターをトーション<sup>12)</sup>で包み、余計な水を絞り出す。

【**原注**】この色付け用のバターを作るのに用いる甲殻類の殻がどうしてもない場合は、**パプリカバター**を用いてもいいだろう。だがいづれにせよ、どんなソースであっても、仕上りの色合いを決めるには、出来るだけ、他の植物由来の赤色着色料の使用は避

物質すなわちアレルゲンとなり得ることがわかり、使用は減りつつある。現在は代替品としてピーツから抽出したピートレッドなどの使用が増えてきている。また、この本文でカルミン色素の使用を「くすんだ、情けない色合いを与える」として否定的に扱っているのは、この色素が pH によって色調が変化し、なおかつ蛋白質を多く含む料理に加えると色素自体が紫色に変化する（結果としてソースやポタージュ全体が濁ったような色になる）ことがあるためだろう。

- 1) 原文 au moment（オモモン）その都度、の意。à la minute（アラミニュット）と呼ぶ調理現場もある。
- 2) 生のにんにくには胃腸を刺激する酵素が含まれているが、熱により不活性化するので、よく火を通す必要がある。
- 3) アーモンドには一般的なスウィートアーモンド amandes douces と、苦味のあるビターアーモンド amande amères の二種がある。後者はごく微量の青酸化合物を含むのであまり多く使われることはないが、香りがいいためリキュールなどの香り付けにごく少量が用いられることがある。
- 4) アヴリーヌはヘーゼルナッツの仲間でセイヨウハシバミの大粒な変種。イタリア、ピエモンテ産やシチリア産が有名。
- 5) **ソース・ベルシー** 訳注参照。
- 6) 原文 couper en dés。フランス語のまま「デにする(切る)」と表現することもある。
- 7) もとはロシアで雪の中の樽で保存するために圧縮したもの。キャビアのグレードはベルガ、オセトラ、セヴルガが混ざっているのが多いという。比較的安価に利用できる。
- 8) **ソース・シヴリ** 訳注参照。
- 9) **ソース・ラヴィゴット** 訳注参照。
- 10) **ソース・コルペール** 本文および訳注参照。
- 11) 伝統的には大理石製の鉢が用いられることが多かった。
- 12) **ソース・ヴェルト** 訳注参照。

- 1) この原注は第三版から。原文 le rouge colorant végétal 直訳すると「植物由来の赤色着色料」だが、ここではおそらくカルミン色素（コチニール色素）のことと思われる（**本節「概説」参照**）。他に赤系着色料として、ペニバナ色素、紅麴な

けることを勧める<sup>1)</sup>。

### 色付け用の緑のバター Beurre Colorant vert

ほうれんそうの葉 1kg をよく洗い、しっかり振って水気をきる。これを鉢に入れてすり潰す。トーション<sup>2)</sup>で包んで緑の汁を絞り出す。これをソテー鍋に入れて湯煎をかけ、水分を蒸発させてペースト状にする<sup>3)</sup>。

これを、ぴんと張ったナフキンの上に移し、さらに水気をきる。

パレットナイフを使って緑の色素を集め、鉢に入れてその倍の重さのバターを加えて練り込む。

……布で漉し、冷蔵保存する。

【原注】人工的な色素よりもこの緑の色素を用いたほうが利点大きい。

### クルヴェットバター Beurre de crevettes

クルヴェット・グリーズ<sup>4)</sup> 150g を鉢に入れて細かくすり潰す。バター 150g を加えて、布で漉す。

### エシャロットバター Beurre d'Echalote

エシャロット 125g を鉢に入れてすり潰し、さっと茹でて湯をきり、トーションに包んで圧すようにして水気を取り除く。バター 125g を加えて、布で漉す。

### エクルヴィスバター Beurre d'Ecrevisse

ビスクを作る要領で、**ミルポワ**とともに茹でたエクルヴィス<sup>5)</sup>の胴や殻、尾などを鉢に入れて細かくすり潰す。これと同じ重さのバターを加え、布で漉す。

### エスカルゴ用バター Beurre pour les Escargots

(エスカルゴ 50 個分)

バター 350g に、細かいみじん切りにしたエシャロット 35g と、にんにく 1片をすり潰してペースト状にしたもの、パセリのみじん切り 25g (大さじ 1 杯)、塩 12g、こしょう 2g を加える。捏ねるようにしてよく混ぜ合わせ、冷蔵する。

### エストラゴンバター Beurre d'Estragon

新鮮なエスゴラの葉 125g を 2 分間茹がいてから湯きりして冷水にさらす。圧して余分な水気を絞る。これを鉢に入れてすり潰す。バター 125g を加えて、布で漉す。

### にしんバター Beurre de Hareng

にしんの燻製のフィレ<sup>6)</sup> 3 枚の皮を剥いて、さいの目に切り、鉢に入れて細かくすり潰す。バター 250g を加え、布で漉す。

### オマールバター Beurre de Homard

使える範囲の量のオマールの胴のクリーム状の部分と卵やコライユ<sup>7)</sup>を鉢に入れてすり潰す。それと同じ重さのバターを加え、布で漉す。

### 白子バター Beurre de Laitance

沸騰しない程度の温度で茹で、よく冷ました白子<sup>8)</sup> 125g を鉢に入れてすり潰す。バター 250g とマスタード小さじ 1 杯を加えて、布で漉す。

でもあるが、いずれも中国や日本において発達しことを考慮すると、兩大戦間である 1920 年頃に「避けるべき」というほど普及していたのは、実際には昆虫由来であるコチニール色素と思われる。なお、ベニバナ色素も化学的にはカルミン酸色素。また、甲殻類の殻を茹でると赤くなるが、この色素はアスタキサンチンといい、1938 年に物質として「発見」された。もちろんエスコフィエをはじめとする料理人は経験上、甲殻類の殻を適度に加熱することで、タンパク質と結びついていたアスタキサンチンがタンパク質の熱変性によって遊離して取り出せることを経験的によく知っており、それを利用してこの赤いバターを考案したと考えられる。ちなみにサーモン、鮭の身の赤色もおなじアスタキサンチンによるもので、近縁種の鱒と同様に本来は白身。

- 2) **ソース・ヴェルト** 訳注参照。
- 3) 原文 coaguler 凝固させる、の意。ここでは説明的に意識した。なお、ほうれんそうに限らず、植物の緑色は葉緑素 (クロロフィル) によるものであり、葉緑素はマグネシウム (苦土) を核として窒素が周囲に結びついた構造を持つ化学物質。ほうれんそうの緑が濃いのは土壌からのマグネシウム吸収能力が高いため。食品に含まれるマグネシウムはカルシウムの吸収を促す作用があるとされている。ただし、フランスの伝統的なほうれんそうの栽培方法は、夏の終わってから初秋にかけた種を置き、11 月頃から大きくなった葉を順次き取って収穫するというもの。露地栽培でも 1 株で 3 回程度は春になるまでに収穫できるとされた。いっぽう、日本のほうれんそうはごく一部の地域を除いては、戦後高度成長期に普及した葉菜のひとつであり、じつのところ歴史は浅い。しばしば言われる東洋系、西洋系の違いにしても、普及当初にはその高配品種が使われるようになっていたために、あまり意味はない。日本で青果として流通しているほうれんそうのほとんどは、密植、立性にして比較的若どり (農協などの出荷団体によって違いますが、概ね草丈 25cm 程度で 5 株から 10 株で 200g の規格が平均的) のため、用いている品種がほぼ西洋系のもを交配親としている場合でも、立性に栽培するために、葉の厚みなどは問題とされていない。フランスではかつて、葉以外は可食部として見なされず、軸は切り捨てるのが普通だったことと比べると、食文化の違いの大きさがよくわかる一例だろう。
- 4) フランスで好んで食される小海老の一種。 **ソース・クルヴェット** 訳注参照。
- 5) ヨーロッパざりがに。詳しくは **パイエルン風ソース** 訳注参照。
- 6) 原文 hareng saur (アロンソール)。タイセイウニシンの内臓を抜いて 10 日程塩漬にし、塩抜き後に 24~48 時間乾燥後に 15 時間以上、32℃程度で冷燻にしたもの。強い匂いが特徴。日本のにしんとは種が異なること、スモークサーモンと同様に冷燻であることに注意。
- 7) オマールの胴の背側にある朱色の内子。
- 8) 日本ではスケトウダラの白子が一般的だが、フランスの伝統的高級料理では鯉の白子をもっとも一般的。他に鯖やしんの白子も用いられる。

## メートルドテル<sup>1)</sup>バター<sup>2)</sup> Beurre à la Maître-d'hôtel

バター 250 g をボマード状に柔らかくする。バセリのみじん切り大さじ 1 杯強と塩 8 g、こしょう 1 g、レモン  $\frac{1}{4}$  個分の果汁を加えてよく混ぜ合わせる。

【原注】 このメートルドテルバターに大さじ 1 杯のマスタードを加えるのもバリエーションとしてお勧め。とりわけ牛、羊肉や魚のグリル焼きによく合う。

## ブルマニエ Beurre Manié

これはマトロットの煮汁などに、手早くとろみ付けをするのに用いる。小麦粉 75 g にバター 100 g の割合が原則。

ブルマニエでとろみを付けたソースは、その後は出来るだけ沸騰させないこと。さもないと、生の小麦粉の不快な味が強まる危険性があるからだ。

- 1) メートルドテル maître d'hôtel は直訳すれば「館 [やかた] の主」あるいは「館の指導者」の意だが、時代および王家あるいは貴族やブルジョワの館、近現代のレストランにおいてそれぞれ異なった意味で用いられる職名。(1) 王家においては grand maître グランメートルを補佐する仕事として食卓関連の仕事を取り仕切る職のこと。王と親しくすることが出来るために、有力貴族がこの職に就くことを希望することが多かったという。(2) 大貴族や大ブルジョワの館において、食材の手配やワインの管理、料理人の選抜などの一切を取り仕切り、とりわけ宴席においてはメニュー作りが重要な仕事のひとつとして課される職。コンデ公に仕え、シャンティイ城での大宴席の一切を取り仕切り、最後に手配した魚が届かないと誤解して自害したヴァテル（ソース・シャンティイ 訳注参照）はこの職に相当する。(3) 近代から 20 世紀中葉にかけて、とりわけ料理人がオーナーではないレストランの場合はメニューの決定、ソムリエおよび給仕人の指揮、客の応待などを担当し、その店で最高のサービス技術を誇る者のつく職名とされた。なお、現代ではほとんど「給仕長」程度の意味しか持たなくなってしまった職名といえる。上記を総合すると、この beurre à la maître d'hôtel という名称は「当家（当店）特製のバター」あるいは「当家（当店）自慢のバター」程度の意味ということになる。実際のところ、この名称の由来などは不明だが、たとえばフランソワ・マラン François Marin（生没年不詳）の著書、『モコス神の贈り物』のタイトルページに記された著者の肩書は「スpees元帥のメートルドテル、フランソワ・マラン」となっているように、本来はもっとも料理に精通した者の就く役職であった。このため、maître d'hôtel-cuisinier という語も 18、19 世紀には用いられていた。つまり、直接的に包丁を握り鍋を振ることはなくても、献立を組み、料理のレシピを考えるのもまたメートルドテルの重要な仕事であった。それを踏まえてカレームは 1822 年に、それ以前の主要な宴席の献立を詳細に分析した『フランスのメートルドテル』を出版した。つまり、カレームもまた、食卓外交の裏側でメートルドテル=キュイジニエの役割を果たしていたということになる。カレームをたんなるパティシエや料理人という現代的な狭い職の枠にはめて捉えることの出来ない時代だったとも言えよう。それは、エスコフィエについても言えることであり、初版および第二版の末尾には献立例が掲載され、第三版以降は『メニューの本』として独立させたが、総料理長であるということは即ちかつて貴族の館に仕えたメートルドテルの仕事をもめるに他ならない、ということを示唆しているし、その点は現代の一流ホテルにおいてもあまり変化していないと思われる。
- 2) この合わせバターの名称も含めた原型のひとつとして、注の前項において言及したマラン『モコス神の贈り物』第 2 巻には、「いんげん豆のメートルドテル風」というレシピがある。これは水から茹でたいんげん豆を湯をきってから鍋に入れ、バター、バセリ、エシャロットの細かいみじん切り、塩、こしょうで味付けし、最後にレモン果汁かヴィネガー少々で仕上げるというもの (p.380)。カレームの未完の名著『19 世紀フランス料理』第 3 巻では、「鯖用のメートルドテルバター」として、イジニー産バター 8 オンス（約 250g 弱）と大きめのレモン 1 個分の搾り汁、細かく刻んだバセリ大さじ 2 杯、塩 2 つまみ強、細かく挽いたこしょう 1 つまみ弱を木杓子を使ってよく混ぜ合わせる。食欲がわくような調味を心掛けるべし、とある (pp.128-129)。また、同じくヴィアールの『王国料理の本』（内容は前掲書の改訂版であり、毎年のように改版され続けているために歴史的に貴重な史料となる）1846 年版では、冷製メートルドテルとして、鍋に  $\frac{1}{4}$  ポンドのバターとバセリ少々、エシャロットのみじん切り少々、塩、粗挽きこしょう、レモン果汁を入れ、木杓子でよく練る。これを肉料理あるいは魚料理の下にでも、中にでも、上にも流すといい、とある (p.48)。このように、19 世紀前半にはおおむねこのメートルドテルバターの性格はほぼ決まっていた。

## 索引

ail

Beurre d'—, 53

Aioli

Sauce —, 45

airelle

Sauce aux Airelles  
(Cranberries-Sauce), 40

Albert

Sauce — (Albert-Sauce), 40

Albuféra

Sauce —, 24

allemand

Sauce allemande (— Parisienne),  
11

amande

Beurre d'—, 53

américain

Sauce Américaine, 24

anchois

Beurre d'—, 53

Sauce —, 24

Andalous(e)

Sauce Andalouse, 45

anglais(e)

sauces —es chaudes, 40

Sauce aux Airelles

(Cranberries-Sauce), 40

Sauce Albert (Albert-Sauce), 40

Sauce aux Aromates

(Aromatic-Sauce), 40

Sauce au Beurre à l'anglaise

(Butter Sauce), 41

Sauce brune aux Huîtres

(Brown Oyster Sauce), 42

Sauce aux Câpres

(Capers-Sauce), 41

Sauce au Céleri

(Celery-Sauce), 41

Sauce Chevreuil (Roe-buck

Sauce), 41

Sauce Crème à l'anglaise

(Cream-Sauce), 41

Sauce Crevettes à l'anglaise

(Shrimps-Sauce), 41

Sauce au Fenouil (Fennel

Sauce), 42

Sauce aux Groseilles

(Gooseberry Sauce), 42

Sauce Homard à l'anglaise

(Lobster Sauce), 42

Sauce aux Huîtres (Oyster

Sauce), 42

Jus coloré (Brown Gravy), 42

Sauce aux OEufs à l'anglaise  
(Eggs Sauce), 43Sauce aux OEufs au beurre  
fondue (Eggs and butter

Sauce), 43

Sauce aux Oignons (Onions

Sauce), 43

Sauce au Pain (Bread Sauce),

43

Sauce au Pain frit (Fried bread

Sauce), 43

Sauce Persil (Perseley Sauce),

43

Sauce Persil pour Poissons, 43

Sauce aux Pommes (Apple

Sauce), 43

Sauce au Porto (Porto Wine

Sauce), 44

Sauce au Raifort chaude

(Horse radish Sauce), 44

Sauce Réforme (Reform

Sauce), 44

Sauce Diable (Deville Sauce),

41

Sauce Ecosaise (Scotch eggs

Sauce), 41

Sauce Sauge et Oignons (Sage

and onions Sauce), 44

Sauce Yorkshire, 44

sauces —es froides

Sauce Cambridge

(Cambridge-Sauce), 51

Sauce Cumberland

(Cumberland-Sauce), 51

Sauce Gloucester

(Gloucester-Sauce), 51

Sauce Menthe (Mint-Sauce), 51

Sauce Raifort (Cold

horseradish sauce), 51

sauces froides —es, 51

aromate

Sauce aux Aromates, 40

aurore

Sauce —, 24

Sauce Chaud-froid —, 27

Sauce — maigre, 24

aveline

Beurre d'—, 53

bâtard

Sauce Bâtarde, 26

bavarois(e)

Sauce —(e), 25

béarnais

Sauce Béarnaise à la glace de  
viande, 25

Sauce Béarnaise tomate, 25

béarnais(e)

Sauce —e, 25

Béchamel (sauce), 12

Bercy

Beurre —, 53

Sauce —, 25

beurre

Beurre de Provence (Aioli), 45

Beurres Composés, 52

Beurre Bercy, 53

Beurre de Caviar, 53

Beurre Chivrya, 53

Beurre Colbert, 53

Beurre Colorant rouge, 53

Beurre Colorant vert, 54

Beurre de Crevette, 54

Beurre d'Ail, 53

Beurre d'Amande, 53

Beurre d'Anchois, 53

Beurre d'Aveline, 53

Beurre d'Echalote, 54

Beurre d'Ecrevisse, 54

Beurre pour les Escargots, 54

Beurre d'Estragon, 54

Beurre de Hareng, 54

Beurre de Homard, 54

Beurre de Laitance, 54

Beurre à la Maître d'hôtel, 55

Beurre Manié, 55

Beurre Ravigote, 53

Sauce au Beurre, 26

Sauce au Beurre à l'anglaise

(Butter Sauce), 41

beurre manié, 55

bigarade

Sauce —, 13

bohémien(ne)

Sauce Bohémienne, 45

Bonnefoy

Sauce —, 26

bordelais

Sauce Bordelaise au vin blanc, 26

bordelais(e)

Sauce Bordelaise, 13

bourguignon(ne)

Sauce Bourguignonne, 13

breton

Sauce Bretonne (blanche), 26

breton(ne)

Sauce Bretonne (brune), 13

Cambridge

Sauce — (Cambridge-Sauce), 51

canotier(ère)

Sauce Canotière, 26

- câpre  
Sauce aux Câpres, 26  
Sauce aux Câpres  
(Capers-Sauce), 41
- cardinal  
Sauce —, 26
- caviar  
Beurre de —, 53
- céleri  
Sauce au Céleri (Celery-Sauce), 41
- champignon  
Sauce aux Champignons  
(blanche), 26  
Sauce aux Champignons (brune), 14
- Chantilly  
Sauce — (froide), 45
- Chantilly  
Sauce —, 27
- charcutier(ère)  
Sauce Charcutière, 14
- chasseur  
Sauce —, 14  
Sauce — (Procédé Escoffier), 14
- Chateaubriand  
Sauce —, 27
- chaud-froid  
Sauce — Aurore, 27  
Sauce — blanche ordinaire, 27  
Sauce — blonde, 27  
Sauce — brune, 14  
Sauce — brune pour Canards, 14  
Sauce — brune pour Gibier, 14  
Sauce — maigre, 28  
Sauce — tomate, 15  
Sauce — au Vert-pré, 27
- chevreuil  
Sauce —, 15  
Sauce Chevreuil (Roe-buck Sauce), 41
- Chivry  
Beurre —, 53  
Sauce —, 28
- Choron  
Sauce —, 25
- Colbert  
Beurre —, 53  
Sauce —, 15
- colorant  
Beurre — rouge, 53  
Beurre — vert, 54
- coulis  
Coulis d'oignons Soubise, 37
- cranberry  
Cranberries-Sauce, 40
- crème  
Sauce à la —, 28  
Sauce Crème à l'anglaise  
(Cream-Sauce), 41
- crème aigre  
Sauce Smitane, 36
- crevette  
Beurre de —, 54  
Sauce aux Crevettes, 28  
Sauce Crevettes à l'anglaise  
(Shrimps-Sauce), 41
- Cumberland  
Sauce — (Cumberland-Sauce), 51
- currie  
Sauce —, 28  
Sauce — à l'Indienne, 29
- diable  
Sauce —, 15  
Sauce Diable (Devilled Sauce), 41  
Sauce — Escoffier, 15
- Diane  
Sauce —, 15
- diplomate(e)  
Sauce —e, 29
- duxelles  
Sauce —, 15
- echalote  
Beurre de —, 54
- écossais(e)  
Sauce —e, 29
- ecrevisse  
Beurre d'—, 54  
Sauce Nantua, 33
- escargot  
Beurre pour les —, 54
- espagnol  
Sauce —e, 9  
Sauce Espagnole maigre, 10
- essence  
—s diverses (fonds), 7  
— de poisson, 6
- estouffade  
— (fonds brun), 5
- estragon  
Beurre d'—, 54  
Jus lié à l'Estragon, 18  
Sauce — (blanche), 29  
Sauce — (brune), 16
- fenouil  
Sauce au Fenouil (Fennel Sauce), 42
- financier(ère)  
Sauce Financière, 16
- finest herbes  
Sauce aux —, 16  
Sauce aux — (blanche), 29
- fonds, 1  
— blanc ordinaire, 5  
— brun, 5  
estouffade (fonds brun), 5  
— de gibier, 6  
— de poisson au vin rouge, 6  
— de veau brun, 5  
fumet de poisson, 6  
— de volaille, 5
- Foyot  
Sauce —, 25
- fumet  
— de poisson, 6
- genevois(e)  
Sauce Genevoise, 16
- Génois(e)  
Sauce —e (froide), 45
- gibier  
fonds de —, 6  
glace de —, 7  
glace
- s diverses, 7  
— de gibier, 7  
— de poisson, 7  
— de viande, 7  
— de volaille, 7
- Gloucester  
Sauce — (Gloucester-Sauce), 51
- Godard  
Sauce —, 17
- grand-veneur  
Sauce —, 17  
Sauce — (Procédé Escoffier), 17
- gratin  
Sauce —, 17
- gravy  
Jus coloré (Brown Gravy), 42
- gribiche  
Sauce — (froide), 46
- groseille  
Sauce — au Raifort (froide), 46  
Sauce —s, 30  
Sauce aux Groseilles  
(Gooseberry Sauce), 42
- haché(e)  
Sauce Hachée, 17  
Sauce Hachée maigre, 17
- hareng  
Beurre de —, 54
- hollandais(e)  
Sauce —e, 30
- homard  
Beurre de —, 54  
Sauce —, 30  
Sauce Homard à l'anglaise  
(Lobster Sauce), 42
- hongrois(e)  
Sauce —e, 30
- huitre  
Sauce aux Huitres, 30  
Sauce aux Huitres (Oyster Sauce), 42  
Sauce brune aux Huitres (Brown Oyster Sauce), 42
- Hussard(e)  
Sauce Hussarde, 18
- indien(ne)  
Sauce —ne, 31
- italien(ne)  
Sauce Italienne, 18  
Sauce —ne (froide), 46
- ivoire  
Sauce —, 31
- Joinville  
Sauce —, 31
- jus  
— de veau brun, 5  
— de veau lié, 10  
— lié à l'Estragon, 18  
— lié tomate, 18
- Laguipière  
Sauce —, 31
- laitance  
Beurre de —, 54
- livonien(ne)  
Sauce —ne, 32

- lyonnais(e)  
Sauce Lyonnaise, 18
- madère  
Sauce —, 18
- maître d'hôtel  
Beurre à la —, 55
- maltais(e)  
Sauce —e, 32
- marinier(ère)  
Sauce Marinière, 32
- matelote  
Sauce —, 18  
Sauce — blanche, 32
- mayonnaise  
Sauce —, 46  
Sauce Mayonnaise collée, 47  
Sauce — fouettée à la Russe, 48  
Sauces — diverses, 48
- menthe  
Sauce — (Mint-Sauce), 51
- mirepoix, 9
- moelle  
Sauce —, 18
- Mornay  
Sauce —, 32
- moscovite  
Sauce —, 19
- mousquetaire  
Sauce —, 48
- mousseline  
Sauce —, 32
- mousseux/mousseuse  
Sauce Mousseuse, 33
- mountarde  
Sauce —, 33  
Sauce — à la crème (froide), 48
- Nantua  
Sauce —, 33
- New-burg  
Sauce — avec le homard cru, 33  
Sauce — avec le homard cuit, 34
- noisette  
Sauce —, 34
- noix  
sauce  
Sauce Raifort aux — (froide), 48
- normande  
Sauce —, 34
- oeuf  
Sauce aux OEufs à l'anglaise (Eggs Sauce), 43  
Sauce aux OEufs au beurre fondu (Eggs and butter Sauce), 43
- oignon  
Sauce aux Oignons (Onions Sauce), 43  
Sauce Sage et Oignons (Sage and onions Sauce), 44
- oriental(e)  
Sauce —e, 34
- pain  
Sauce au Pain (Bread Sauce), 43  
Sauce au Pain frit (Fried bread Sauce), 43
- palois  
Sauce Paloise, 35
- parisien  
Sauce Parisienne = Sauce Allemande, 11
- Pau  
Sauce Paloise, 35
- périgourdin(e)  
Sauce Périgourdine, 19
- Périgueux  
Sauce —, 19
- persil  
Sauce Persil (Perseley Sauce), 43  
Sauce Persil pour Poissons, 43
- piquant(e)  
Sauce Piquante, 19
- poivrade  
Sauce — pour Gibier, 20  
Sauce — ordinaire, 19
- pomme  
Sauce aux Pommes (Apple Sauce), 43
- porto  
Sauce au Porto (Porto Wine Sauce), 44
- Porto  
Sauce au —, 20
- portugais(e)  
Sauce Portugaise, 20
- poulette  
Sauce —, 35
- provençal(e)  
Sauce Provençale, 20
- Provence  
Beurre de Provence (Aioli), 45
- raifort  
Sauce Groseilles au — (froide), 46
- raifort  
Sauce — (Cold horseradish sauce), 51  
Sauce au Raifort chaude (Horse radish Sauce), 44  
Sauce — aux noix (froide), 48
- ravigote  
Sauce —, 35  
Sauce —, ou vinaigrette (froide), 48
- ravitote  
Beurre —, 53
- reform  
Sauce Réforme (Reform Sauce), 44
- Régence  
Sauce —, 21  
Sauce — pour garnitures de Volaille, 35
- Sauce — pour Poissons, 35
- rémoulade  
Sauce —, 49
- riche  
Sauce —, 36
- Robert  
Sauce —, 21  
Sauce — Escoffier, 21
- romain(e)  
Sauce Romaine, 21
- rouannais(e)  
Sauce Rouannaise, 21
- roux, 8  
— blanc, 8  
— blond, 8  
— brun, 8  
cuisson du —, 8
- Rubens  
Sauce —, 36
- russe  
Sauce — (froide), 49  
Sauce Mayonnaise fouettée à la —, 48
- Saint-Malo  
Sauce —, 36
- salmis  
Sauce —, 22
- sauce  
\*Grandes —s de Base, 3, 9  
— Allemande, 11  
— Béchamel, 12  
— Demi-glace, 10  
— Espagnole, 9  
— Espagnole maigre, 10  
— de veau lié, 10  
— Suprême, 11  
— tomate, 12  
Velouté, 10  
— Albuféra, 24  
— Américaine, 24  
— Anchois, 24  
— Andalouse, 45  
— anglaise chaude  
— aux Câpres (Capers-Sauce), 41  
—s anglaises chaudes, 40  
— aux Aïrelles (Cranberries-Sauce), 40  
— Albert (Albert-Sauce), 40  
— aux Aromates (Aromatic-Sauce), 40  
— au Beurre à l'anglaise (Butter Sauce), 41  
— brune aux huîtres (Brown Oyster Sauce), 42  
— au Céleri (Celery-Sauce), 41  
— Chevreuil (Roe-buck Sauce), 41  
— Crème à l'anglaise (Cream-Sauce), 41  
— Crevettes à l'anglaise (Shrimps-Sauce), 41  
— Diable (Deville Sauce), 41  
— Ecossaise (Scotch eggs Sauce), 41  
— au Fenouil (Fennel Sauce), 42  
— aux Groseilles (Gooseberry Sauce), 42  
— Homard à l'anglaise (Lobster Sauce), 42  
— aux huîtres (Oyster Sauce), 42  
Jus coloré (Brown Gravy), 42  
— aux OEufs à l'anglaise (Eggs Sauce), 43  
— aux OEufs au Beurre fondu (Eggs and butter Sauce), 43



- aux Oignons (Onions Sauce), 43
- au Pain (Bread Sauce), 43
- au Pain frit (Fried bread Sauce), 43
- Persil (Perseley Sauce), 43
- Persil pour Poissons, 43
- aux Pommes (Apple Sauce), 43
- au Porto (Port Wine Sauce), 44
- au Raifort Chaude (Horse radish Sauce), 44
- Réforme (Reform Sauce), 44
- Sauge et Oignons (Sage and onions Sauce), 44
- Yorkshire, 44
- s anglaises froides
- Cambridge (Cambridge-Sauce), 51
- Cumberland (Cumberland-Sauce), 51
- Gloucester (Gloucester-Sauce), 51
- Menthe (Mint-Sauce), 51
- Raifort (Cold horseradish sauce), 51
- s froides anglaises, 51
- Aurore, 24
- Aurore maigre, 24
- Bâtarde, 26
- Bavaoise, 25
- Béarnaise, 25
- Béarnaise à la glace de viande, 25
- Béarnaise tomate, 25
- Béchamel, 12
- Bercy, 25
- au Beurre, 26
- Bigarade, 13
- Bohémienne, 45
- Bonnefoy, 26
- Bordelaise, 13
- Bordelaise au vin blanc, 26
- Bourguignonne, 13
- Bretonne (blanche), 26
- Bretonne (brune), 13
- Canotière, 26
- aux Câpres, 26
- Cardinal, 26
- aux Cerises, 13
- aux Champignons (brune), 14
- aux Champignons (blanches), 26
- Chantilly, 27
- Chantilly (froide), 45
- Charcutière, 14
- Chasseur, 14
- Chasseur (Procédé Escoffier), 14
- Chateaubriand, 27
- Chaud-froid Aurore, 27
- Chaud-froid blanche ordinaire, 27
- Chaud-froid blonde, 27
- Chaud-froid brune, 14
- Chaud-froid brune pour Canards, 14
- Chaud-froid brune pour Gibier, 14
- Chaud-froid maigre, 28
- Chaud-froid tomate, 15
- Chaud-froid au Vert-pré, 27
- Chevreuil, 15
- Chivry, 28
- Choron, 25
- Colbert, 15
- à la Crème, 28
- aux Crevettes, 28
- Currie, 28
- Currie à l'Indienne, 29
- Demi-glace, 10
- Diable, 15
- Diable Escoffier, 15
- Diane, 15
- Diplomate, 29
- Duxelles, 15
- Ecossaise, 29
- Espagnole, 9
- Espagnole maigre, 10
- Estragon (blanche), 29
- Estragon (brune), 16
- Financière, 16
- aux Fines Herbes, 16
- aux Fines Herbes (blanche), 29
- Foyot, 25
- Genevoise, 16
- Génoise (froide), 45
- Godard, 17
- Grand-Veneur, 17
- Grand-Veneur (Procédé Escoffier), 17
- Gratin, 17
- Gribiche (froide), 46
- Groseilles au Raifort (froide), 46
- Groseilles, 30
- Hachée, 17
- Hachée maigre, 17
- Hollandaise, 30
- Homard, 30
- Hongroise, 30
- aux Huîtres, 30
- Hussarde, 18
- Indienne, 31
- Italienne (froide), 46
- Italienne, 18
- Ivoire, 31
- Joinville, 31
- Jus lié à l'Estragon, 18
- Jus lié tomate, 18
- Laguipière, 31
- Livonienne, 32
- Lyonnaise, 18
- Madère, 18
- Maltaise, 32
- Marinière, 32
- Matelote, 18
- Matelote blanche, 32
- Mayonnaise, 46
- Mayonnaise collée, 47
- Mayonnaise fouettée à la Russe, 48
- s Mayonnaises diverses, 48
- Moelle, 18
- Mornay, 32
- mousseline, 32
- Moscovite, 19
- Mousquetaire, 48
- Mousseuse, 33
- Moutarde, 33
- moutarde à la crème (froide), 48
- Nantua, 33
- New-burg avec le homard cru, 33
- New-burg avec le homard cuit, 34
- Noisette, 34
- Normande, 34
- Orientale, 34
- Paloise, 35
- parisienne (ex-Allemande), 11
- Périgourdine, 19
- Périgueux, 19
- Petites —s Blanches Composées, 24
- Albuféra, 24
- Américaine, 24
- Anchois, 24
- Aurore maigre, 24
- Bavaoise, 25
- Béarnaise, 25
- à la glace de viande, 25
- Béarnaise tomate, 25
- Bercy, 25
- au Beurre, 26
- Bonnefoy, 26
- Bretonne, 26
- Canotière, 26
- qux Câpres, 26
- Cardinal, 26
- aux Champignons, 26
- Chantilly, 27
- Chateaubriand, 27
- Chaud-froid Aurore, 27
- Chaud-froid blanche ordinaire, 27
- Chaud-froid blonde, 27
- Chaud-froid maigre, 28
- Chaud-froid au Vert-pré, 27
- Chivry, 28
- à la Crème, 28
- aux Crevettes, 28
- Currie, 28
- Currie à l'Indienne, 29
- Diplomate, 29
- Ecossaise, 29
- Estragon, 29
- aux Fines Herbes, 29
- Groseilles, 30
- Hollandaise, 30
- HOMard, 30
- Hongroise, 30
- aux Huîtres, 30
- Indienne, 31
- Ivoire, 31
- Joinville, 31
- Laguipière, 31
- Livonienne, 32
- Maltaise, 32
- Marinière, 32
- Matelote blanche, 32
- Mornay, 32

- Mousseline, 32
- Mousseuse, 33
- Moutarde, 33
- Nantua, 33
- New-burg avec le homard cru, 33
- New-burg avec le homard cuit, 34
- NOisette, 34
- NOrmande, 34
- Orientale, 34
- paloise, 35
- Poulette, 35
- Ravigote, 35
- Régence pour garnitures de Volaille, 35
- Régence pour Poissons, 35
- Riche, 36
- Rubens, 36, 38
- Solférino, 36
- Saint-Malo, 36
- Smitane, 36
- Soubise, 37
- Soubise tomate, 37
- Souchet, 37
- Tyrolienne, 37
- Tyrolienne à l'ancienne, 38
- Valois, 38
- Vénitienne, 38
- Véron, 38
- Villeroy, 38
- Villeroy Soubisée, 38
- Villeroy tomate, 38
- Vin blanc, 39
- Petites —s Brunes Composées, 13
  - Bigarade, 13
  - Bordelaise, 13
  - bourguignonne, 13
  - Bretonne, 13
  - aux Cerises, 13
  - aux Champignons, 14
  - Charcutière, 14
  - Chasseur, 14
  - Chasseur (Procédé Escoffier), 14
  - Chaud-froid brune, 14
  - Chaud-froid tomate, 15
  - Chaud-froid pour Canards, 14
  - Chaud-froid pour Gibier, 14
  - Chevreuil, 15
  - Colbert, 15
  - Diable, 15
  - Diable Escoffier, 15
  - Diane, 15
  - Duxelles, 15
  - Estragon, 16
  - Financière, 16
  - aux Fines Herbes, 16
  - Genevoise, 16
  - Godard, 17
  - Grand-Veneur, 17
  - Grand-Veneur (Procédé Escoffier), 17
  - Gratin, 17
  - Hachée, 17
  - Hachée maigre, 17
  - Hussarde, 18
  - Italienne, 18
  - Jus lié à l'estragon, 18
  - Jus lié tomate, 18
  - Lyonnaise, 18
  - Madère, 18
  - Matelote, 18
  - Moelle, 18
  - Moscovite, 19
  - Périgourdine, 19
  - Périgueux, 19
  - piquante, 19
  - Poivrade pour Gibier, 20
  - Poivrade, 19
  - Porto, 20
  - Portugaise, 20
  - Provençale, 20
  - Régence, 21
  - Robert, 21
  - Robert Escoffier, 21
  - Romaine, 21
  - Rouannaise, 21
  - Salmis, 22
  - Tortue, 22
  - Venaïson, 23
  - au Vin rouge, 23
  - Zingara A, 23
  - Zingara B, 23
- Piquante, 19
- Poivrade pour Gibier, 20
- Poivrade ordinaire, 19
- au Porto, 20
- Portugaise, 20
- Poulette, 35
- Provençale, 20
- Raifort aux noix (froide), 48
- Ravigote, 35
- Ravigote, ou Vinaigrette (froide), 48
- Régence, 21
- Régence pour garnitures de Volaille, 35
- Régence pour Poissons, 35
- Rémoulade, 49
- Riche, 36
- Robert, 21
- Robert Escoffier, 21
- Romaine, 21
- Rouannaise, 21
- Rubens, 36
- Russe (froide), 49
- Saint-Malo, 36
- Salmis, 22
- sauce froide
  - Aioli, 45
  - Andalouse, 45
  - Beurre de Provence, 45
  - Bohémienne, 45
  - Chantilly, 45
  - Génoise, 45
  - Gribiche, 46
  - Groseilles au Rifort, 46
  - Italienne, 46
  - Mayonnaise, 46
  - Mayonnaise collée, 47
  - fouettée à la Russe, 48
  - Mayonnaise diverses, 48
  - Mousquetaire, 48
  - moutarde à la crème, 48
- Raifort aux noix, 48
- ravigote, ou vinaigrette, 48
- Rémoulade, 49
- Russe, 49
- Suédoise, 50
- Tartare, 49
- Verte, 50
- Vincent, 50
- saucés froides, 45
  - Smitane, 36
  - Solférino, 36
  - Soubise, 37
  - Soubise tomate, 37
  - Souchet, 37
  - Suédoise (froide), 50
  - Suprême, 11
  - Tartare (froide), 49
  - tomate, 12
  - Tortue, 22
- Traitement des Éléments de Base dans le Travail des —s, 5
  - Tyrolienne, 37
  - Tyrolienne à l'ancienne, 38
  - Valois, 25, 38
- Velouté de Poisson, 11
- Velouté de Volaille, 11
  - Venaïson, 23
  - Vénitienne, 38
  - Véron, 38
  - Verte, 50
  - Villageoise, 38
  - Villeroy, 38
  - Villeroy Soubisée, 38
  - Villeroy tomate, 38
  - vin blanc, 39
  - au Vin rouge, 23
  - Vincent, 50
  - Zingara A, 23
  - Zingara B, 23
- sauge
  - Sauce Sauge et Oignons (Sage and onions Sauce), 44
- Scotland
  - Sauce Ecossaise (Scotch eggs Sauce), 41
- smitane
  - Sauce —, 36
- Solférino
  - Sauce —, 36
- Soubise
  - Sauce —, 37
  - Sauce — tomate, 37
- Souchet
  - Sauce —, 37
- suédois(e)
  - Sauce —e (froide), 50
- suprême
  - Sauce —, 11
- tartare
  - Sauce — (froide), 49
- tomate
  - Jus lié tomate, 18
  - Sauce —, 12
- tortue
  - Sauce —, 22
- Tyrolien
  - Sauce Tyrolienne à l'ancienne, 38

tyrolien(ne)  
Sauce —ne, 37

Valois  
Sauce —, 25, 38

veau  
fonds ou jus de — brun, 5  
jus de — lié, 10

velouté, 10  
— de Poisson, 11  
sauce blanche grasse, 10  
— de Volaille, 11

venaison  
Sauce —, 23

vénitien(ne)  
Sauce —ne, 38

Véron  
Sauce —, 38

vert(e)  
Sauce —e, 50

vert-pré  
Sauce Chaud-froid au —, 27

villageois  
Sauce Villageoise, 38

Villeroy  
Sauce —, 38  
Sauce — Soubisée, 38  
Sauce — tomate, 38

vin  
Sauce au — rouge, 23  
Sauce vin blanc, 39

vinaigrette ⇒ sauce ravigote (froide), 48

Vincent  
Sauce —, 50

Yorkshire  
Sauce Yorkshire, 44

Zingara  
Sauce — A, 23  
Sauce — B, 23

アーモンド  
—バター, 53

アイヨリ, 45

アヴリース  
ブルー・—, 53

赤ワイン  
—ソース, 23

悪魔 ⇒ ディアブル  
ソース  
ソース・ディアブル・エス  
コフィエ, 15  
ソース・ディアブル, 15  
デビルソース (イギリス風), 41

アメリカ風  
ソース・アメリカス, 24

アルバート  
—ソース, 40

アルビュフェラ  
ソース・—, 24

アルマン (ド)  
ソース・アルマン, 11

合わせバター, 52  
アーモンドバター, 53  
アンチョビバター, 53  
色付け用の赤いバター, 53

色付け用の緑のバター, 54  
エクルヴィスバター, 54  
エシャロットバター, 54  
エスカルゴ用バター, 54  
エストラゴンバター, 54  
オマールバター, 54  
キャビアバター, 53  
クルヴェットバター, 54  
ブルー・シヴリ, 53  
白子バター, 54  
にしんバター, 54  
にんにくバター, 53  
ブルー・コルベール, 53  
ブルー・ダヴリース, 53  
ブルー・ベルシー, 53  
ブルマニエ, 55  
メートルドテルバター, 55  
ブルー・ラヴィゴット, 53

アンダルシア  
—風ソース, 45

アンチョビ  
—ソース, 24

アンチョビ  
—バター, 53

イヴォワール  
ソース・—, 31

イギリス風  
—ソース (冷製), 51  
—ソース (温製), 40  
アップルソース, 43  
アルバートソース, 40  
アロマティックソース, 40  
エッグアンドバターソース, 43  
エッグソース, 43  
オニオンソース, 43  
牡蠣入りソース, 42  
牡蠣入りブラウンソース, 42  
グーズベリーソース, 42  
クランベリーソース, 40  
クリームソース, 41  
ケイパーソース, 41  
シュリンプソース, 41  
スコッチエッグソース, 41  
セージと玉ねぎのソース, 44  
セロリソース, 41  
デビルソース, 41  
バセリソース, 43  
バセリソース (魚料理用), 43  
バターソース, 41  
フェネルソース, 42  
フライドブレッドソース, 43  
ブラウングレイビヴィー, 42  
ブレッドソース, 43  
ホースラディッシュソース, 44  
ポートワインソース, 44  
ヨークシャーソース, 44  
リフォームソース, 44  
ロバックソース, 41  
ロブスターソース, 42

—ソース (冷製)  
カンバーランドソース, 51  
グロスターソース, 51  
ケンブリッジソース, 51  
ホースラディッシュソース, 51  
ミントソース, 51

イタリア風  
—ソース, 18

—ソース (冷製), 46

インド風  
—ソース, 31

ヴァロワ  
ソース・—, 25, 38

ヴァンサン  
ソース・—, 50

ヴィネグレット ⇒ ソース・ラヴィ  
ゴット (冷製), 48

ヴィルロワ  
ソース・—, 38  
スビーズ入りソース・—, 38  
トマト入りソース・—, 38

ヴェール/ヴェルト  
ソース・ヴェルト, 50

ヴェールブレ  
ソース・ショーフロワ・—, 27

ヴェネツィア風  
—ソース, 38

ヴェロン  
ソース・—, 38

ヴォライユ  
ヴルテドヴォライユ (鶏のヴ  
ルテ), 11  
フォンドヴォライユ, 5

ヴネゾン  
ソース・—, 23

海亀 ⇒ トルチュ  
ソース・トルチュ, 22

ヴルテ  
魚料理用—, 11  
鶏の— (ヴルテドヴォライユ), 11  
標準的なソース・—, 10

エクルヴィス  
ソース・ナンチュア, 33  
—バター, 54

エシャロット  
—バター, 54

エスカルゴ  
—用バター, 54

エストラゴン  
ソース・— (ホワイト系), 29  
ソース・— (ブラウン系), 16  
—バター, 54

エスパニョール  
ソース・—, 9  
ソース・— (魚料理用), 10

エッセンス  
—について (フォン), 7  
魚の—, 6

オーロール  
ソース・—, 24  
魚料理用ソース・—, 24  
ソース・ショーフロワ・—, 27

大型ジビエ ⇒ ヴネゾン  
ソース・ヴネゾン, 23

オマール  
ソース  
ロブスターソース (イギリ  
ス風), 42  
ソース・—, 30  
—バター, 54

オランダ風  
オランダズソース, 30

- オランダーズ  
ーソース, 30
- オリエント風  
ーソース, 34
- 牡蠣  
牡蠣入りソース, 30  
牡蠣入りソース (イギリス風), 42  
牡蠣入りブラウンソース (イギリス風), 42
- 家禽  
鶏のヴルテ, 11  
鶏のフォン, 5
- カノティエール  
ソース・ー, 26
- 狩人風⇒ソース・シャスール, 14
- 狩人風⇒ソース・シャスール (エスコフィエ流), 14
- カルディナル  
ソース・ー, 26
- カレー  
ーソース, 28  
インドソース, 29
- カンパーランド  
ーソース, 51
- 基本ソース  
ー・アルマンド, 11  
ヴルテ (標準的な), 10  
ー・エスパニョール, 9  
魚料理用ー・エスパニョール, 10  
魚料理用ヴルテ, 11  
ー・シュブレード, 11  
ー・ドゥミグラス, 10  
トマトー, 12  
鶏のヴルテ, 11  
とろみを付けた仔牛のジュ, 10  
ベシャメル, 12
- キャビア  
ーバター, 53
- グーズベリー  
グーズベリーソース (イギリス風), 42
- グラス  
ードヴィアンド, 7  
魚のー, 7  
ジビエのー, 7  
鶏のー (ードヴォライユ), 7
- グラス  
ーについて, 7
- グラタン  
ソース・ー, 17
- グランヴスール  
ソース・ー, 17  
ソース・ー (エスコフィエ流), 17
- 克蘭ベリー  
ーソース, 40
- クリ  
玉ねぎのクリ・スピーズ, 37
- クリーム  
ソース・クレーム, 28  
ーソース (イギリス風), 41
- グリビッシュ  
ソース・ー (冷製), 46
- クルヴェット  
ソース・ー, 28
- シュリンプソース (イギリス風), 41
- クルヴェット  
ーバター, 54
- くるみ  
ー入りソース・レフォール, 48
- グレイヴィー  
ブラウングレイヴィー (イギリス風ソース), 42
- グロスター  
ーソース, 51
- グロゼイユ  
ソース  
グーズベリーソース (イギリス風), 42  
ー・スリーズ, 13  
ソース・ー, 30  
レフォール風味のソース・ー (冷製), 46
- ケイパー  
ー入りソース, 26  
ーソース (イギリス風), 41
- ケンブリッジ  
ーソース, 51
- 仔牛  
ーの茶色いフォン (ジュ), 5  
とろみを付けたーのジュ, 10
- 香草  
アロマティックソース, 40  
ーソース (ホワイ系), 29  
ーソース (ブラウン系), 16
- ゴダール  
ソース・ー, 17
- 骨髓⇒モワル  
ソース・モワル, 18
- コルベール  
ソース・ー, 15  
ブル・ー, 53
- サ克蘭ボ  
ソース  
ー・スリーズ, 13
- サルミ  
ソース・ー, 22
- サワークリーム  
ソース・スミタース, 36
- ザンガラ  
ソース・ーA, 23  
ソース・ーB, 23
- サンマル風  
ーソース, 36
- シヴリ  
ソース・ー, 28  
ブル・ー, 53
- ジェノヴァ風  
ソース・ー (冷製), 45
- ジビエ  
ーのグラス, 7  
ーのフォン, 6
- ジブシー風  
ソース・ザンガラA, 23  
ソース・ザンガラB, 23
- シャスール  
ソース・ー, 14  
シャスール
- ソース・ー (エスコフィエ流), 14
- シャトーブリヤン  
ソース・ー, 27
- シャルキュトリ風  
ーソース⇒ソース・シャルキュティエール, 14
- シャンティイ  
ソース・ー, 27  
ソース・ー (冷製), 45
- ジュ  
仔牛のー(とろみを付けた), 10  
仔牛の茶色いー, 5  
とろみを付けたー エストラゴン風味, 18  
とろみを付けたー トマト風味, 18
- シュールイユ  
ソース・ー, 15  
ローバックソース (イギリス風), 41
- ジュネーヴ風  
ーソース, 16
- シュブレード  
ソース・ー, 11
- ショフロワ  
ソース・ー・ヴェールブレ, 27  
ソース・ー・オーロール, 27  
ブロードのソースー, 27
- ショフロワ  
魚料理用ソースー, 28  
茶色いソース・ー (ジビエ用), 14  
白いソースー (標準), 27  
トマト入りソース・ー, 15  
茶色いソース・ー, 14  
茶色いソース・ー (鴨用), 14
- ショロン  
ソース・ー, 25
- ジョワンヴィル  
ソース・ー, 31
- 白子  
ーバター, 54
- 白ワイン  
ーソース, 39
- スーシェ  
ソース・ー, 37
- スウェーデン風  
ーソース (冷製), 50
- すぐり  
ソース  
グーズベリーソース (イギリス風), 42
- スコットランド  
スコッチエッグソース (イギリス風), 41
- スコットランド風  
ーソース, 29
- スピーズ  
トマト入りソース・ー, 37
- スピーズ  
ソース・ー, 37
- スペイン風 (エスパニョール)  
ソース・エスパニョール (魚料理用), 10
- スペイン風 (エスパニョール)  
ソース・エスパニョール, 9

スミターヌ  
   ソース・ー, 36  
  
 セージ  
   セージと玉ねぎのソース (イギリス風), 44  
  
 セロリ  
   ーソース (イギリス風), 41  
  
 ソース  
   赤ワイン-, 23  
   ー・アシェ, 17  
   魚料理用ー・アシェ, 17  
   ー・アメリカス, 24  
   ー・アルビュフェラ, 24  
   アンダルシア風-, 45  
   アンチョビー, 24  
   ー・イヴォワール, 31  
   イギリス風ー (温製), 40  
   アップルソース, 43  
   アルパート-, 40  
   アロマティック-, 40  
   エッグアンドバターソース, 43  
   エッグソース, 43  
   オニオンソース (イギリス風), 43  
   牡蠣入り-, 42  
   牡蠣入りブラウン-, 42  
   グーズベリー-, 42  
   クランベリー-, 40  
   クリーム-, 41  
   ケイパー-, 41  
   魚料理用パセリソース, 43  
   シュリンプ-, 41  
   スコッチエッグ-, 41  
   セージと玉ねぎのソース, 44  
   セロリ-, 41  
   デビル-, 41  
   パセリソース, 43  
   バター-, 41  
   フェンネル-, 42  
   フライドブレッドソース, 43  
   ブラウングレイヴィー (イギリス風), 42  
   ブレッドソース, 43  
   ホースラディッシュソース, 44  
   ポートワインソース, 44  
   ヨークシャーソース, 44  
   リフォームソース, 44  
   ローバック-, 41  
   ロブスター-, 42  
   イギリス風ー (冷製), 51  
   カンパランド-, 51  
   グロスター-, 51  
   ケンブリッジ-, 51  
   ホースラディッシュ-, 51  
   ミント-, 51  
   イタリア風-, 18  
   イタリア風ー (冷製), 46  
   インド風-, 31  
   インドカレー-, 29  
   ー・ヴァロワ, 25, 38  
   ー・ヴァンサン, 50  
   ー・ヴィルロワ, 38  
   スピーズ入り・ヴィルロワ, 38  
   トマト入り・ヴィルロワ, 38  
   ヴェネツィア風-, 38  
   ー・ヴェルト, 50  
   ー・ヴェロン, 38

ー・ヴェネゾン, 23  
 ヴルテ (魚料理用), 11  
 ヴルテ (鶏), 11  
 ヴルテ (標準的な), 10  
 ー・エストラゴン (ホワイ  
   ト系), 29  
 ー・エストラゴン (ブラウ  
   ン系), 16  
 ー・エスパニョール, 9  
 ー・エスパニョール (魚料理用), 10  
 ー・オーロール, 24  
 魚料理用ー・オーロール, 24  
 ー・オマール, 30  
 オランダーズ-, 30  
 オリエント風-, 34  
 牡蠣入り-, 30  
 ー・カノティエール, 26  
 ー・カルディナル, 26  
 カレー-, 28  
 基本-, 3, 9  
   ー・アルマンド, 11  
   ヴルテ (標準的な), 10  
   ー・エスパニョール, 9  
   魚料理用ー・エスパニョール, 10  
   魚料理用ヴルテ, 11  
   ー・シュブレーム, 11  
   ー・ドゥミグラス, 10  
   トマト-, 12  
   鶏のヴルテ, 11  
   とろみを付けた仔牛のジュ, 10  
   ベシャメル-, 12  
 ー・グラタン, 17  
 ー・グランヴヌール, 17  
 ー・グランヴヌール (エスコフィ  
   エ流), 17  
 ー・グリビッシュ, 46  
 ー・クルヴェット, 28  
 くるみ入りー・レフォール  
   (冷製), 48  
 ー・クレーム, 28  
 ー・グロゼイユ, 30  
 ケイパー入り-, 26  
 コーティング用マヨネーズ, 47  
 香草ー (ホワイト系), 29  
 香草ー (ブラウン系), 16  
 ー・ゴダール, 17  
 ー・コルベール, 15  
 魚料理用ー・ショフロワ, 28  
 ー・サルミ, 22  
 ー・ザンガラ A, 23  
 ー・ザンガラ B, 23  
 サンマル風-, 36  
 ー・シヴリ, 28  
 ジェノヴァ風-, 45  
 ー・シャスール, 14  
 ー・シャスール (エスコフィ  
   エ流), 14  
 ー・シャトーブリヤン, 27  
 シャルキュトリ風⇨ー・シャル  
   キュティエール, 14  
 ー・シャンティイ, 27, 45  
 ー・シュヴァリエ, 15  
 ジュネーヴ風-, 16  
 ー・ショフロワ・ヴェール  
   ブレ, 27  
 ー・ショフロワ・オーロール,  
   27  
 白いー・ショフロワ (標準), 27

茶色いー・ショフロワ (鴨用),  
   14  
 茶色いー・ショフロワ, 14  
 茶色いー・ショフロワ (ジビ  
   エ用), 14  
 トマト入りー・ショフロワ, 15  
 ブロンドのー・ショフロワ, 27  
 ー・ショロン, 25  
 ー・ジョワンヴィル, 31  
 白ワイン-, 39  
 ー・スーシェ, 37  
 スウェーデン風ー (冷製), 50  
 スコットランド風-, 29  
 ー・スピーズ, 37  
 トマト入り・スピーズ, 37  
 ー・スミターヌ, 36  
 ー・スリーズ, 13  
 ー・シュブレーム, 11  
 ーのベース作り, 5  
 ー・ソルフェリノ, 36  
 タルタルー (冷製), 49  
 チロル風-, 37  
 チロル風ー クラシック, 38  
 ー・ディアース, 15  
 ー・ディアブル, 15  
 ー・ディアブル・エスコ  
   フィエ, 15  
 ー・ディプロマット, 29  
 ー・デュクセル, 15  
 ー・ドゥミグラス, 10  
 トマト-, 12  
 ー・トルチュ, 22  
 とろみを付けた仔牛のジュ, 10  
 とろみを付けたジュエストラゴ  
   ン風味, 18  
 とろみを付けたジュ トマト  
   風味, 18  
 ー・ナンチュア, 33  
 活けオマールを使うー・ニュー  
   バーグ, 33  
 茹でたオマールを使うー・  
   ニューバーグ, 34  
 ノルマンディ風-, 34  
 バイエルン風-, 25  
 ー・バタルド, 26  
 バリ風⇨ー・アルマンド, 11  
 ハンガリー風-, 30  
 ー・ビガラド, 13  
 ー・ピカント, 19  
 ー・オ・ブル, 26  
 ー・フィアンシエール, 16  
 ー・フィヨイ, 25  
 ブラウン系の派生-, 13  
 赤ワイン-, 23  
 ー・アシェ, 17  
 魚料理用ー・アシェ, 17  
   -, 18  
 ー・ヴェネゾン, 23  
 ー・エストラゴン, 16  
 ー・グラタン, 17  
 ー・グランヴヌール, 17  
 ー・グランヴヌール (エスコ  
   フィエ流), 17  
 香草-, 16  
 ー・ゴダール, 17  
 ー・コルベール, 15  
 ー・サルミ, 22  
 ー・ザンガラ A, 23

- ー・ザンガラ B, 23
- ー・シャスール, 14
- ー・シャスール (エスコフィエ流), 14
- ー・シャルキュティエール, 14
- ー・シャンピニオン, 14
- ー・シュヴルイユ, 15
- ジュネーヴ風-, 16
- 茶色いー・ショフロワ (エスコフィエ流), 14
- 茶色いー・ショフロワ (鴨用), 14
- 茶色いー・ショフロワ (ジビエ用), 14
- 茶色いー・ショフロワ, 14
- ー・スリーズ, 13
- ー・ディアース, 15
- ー・ディアブル, 15
- ー・ディアブル・エスコフィエ, 15
- ー・デュクセル, 15
- トマト入りー・ショフロワ, 15
- ー・トルチュ, 22
- とろみを付けたジュ エストラゴン風味, 18
- とろみを付けたジュ トマト風味, 18
- ー・ビガラード, 13
- ー・ピカント, 19
- ー・フィナンシエール, 16
- ブルゴーニュ風-, 13
- ブルターニュ風-, 13
- プロヴァンス風-, 20
- ー・ペリグー, 19
- ー・ペリグールディーズ, 19
- ー・ポルト, 20
- ポルドー風-, 13
- ポルトガル風-, 20
- ー・ボワヴラード (標準), 19
- ー・ボワヴラード (ジビエ用), 20
- マッシュルーム→ー・シャンピニオン, 14
- ー・マデール, 18
- ー・マトロット, 18
- モスクワ-, 19
- ー・モワル, 18
- ー・ユサルド, 18
- リヨン風-, 18
- ルーアン風-, 21
- ー・レジャンス, 21
- ローマ風-, 21
- ー・ロペール, 21
- ー・ロペール・エスコフィエ, 21
- ブルゴーニュ風-, 13
- ブルターニュ風- (ホワイト系), 26
- ブルターニュ風- (ブラウン系), 13
- ー・プレット, 35
- プロヴァンス風-, 20
- ー・ノワゼット, 34
- ー・ペアルネーズ, 25
- ー・ペアルネーズ (グラス・ド・ヴィアンド入り), 25
- トマト入りー・ペアルネーズ, 25
- ベシャメル-, 12
- ー・ペリグー, 19
- ー・ペリグールディーズ, 19
- ー・ベルシー, 25
- ポー風-, 35
- ー・ボスフォワ, 26
- ー・ボヘミアの娘, 45
- ー・ポルト, 20
- ポルドー風-, 13
- ポルトガル風-, 20
- ホワイト系の派生-, 24
- ー・アメリカース, 24
- ー・アルビュフェラ, 24
- アンチョビー, 24
- ー・イヴォワール, 31
- インド風-, 31
- インド風カレー-, 29
- ー・ヴィルロワ, 38
- ー・ヴィルロワ, 38
- トマト入りー・ヴィルロワ, 38
- ヴェネツィア風-, 38
- ー・ヴェロン, 38
- ー・ヴァロワ, 38
- ー・エストラゴン, 29
- ー・オーロール, 24
- 魚料理用ー・オーロール, 24
- ー・オマール, 30
- オランダーズ-, 30
- オリエント風-, 34
- 牡蠣入り-, 30
- ー・カノティエール, 26
- ー・カルディナル, 26
- カレー-, 28
- ー・クルヴェット, 28
- ー・クレーム, 28
- ー・グロセイユ, 30
- ケイパー入り-, 26
- 香草-, 29
- サンマロ風-, 36
- ー・シヴリ, 28
- ー・シャトーブリヤン, 27
- ー・シャンティイ, 27
- ー・ショフロワ・ヴェールブレ, 27
- ー・ショフロワ・オーロール, 27
- 魚料理用ー・ショフロワ, 28
- 白いー・ショフロワ (標準), 27
- ブロンドのー・ショフロワ, 27
- ー・ジョワンヴィル, 31
- 白ワイン-, 39
- ー・スーシェ, 37
- スコットランド風-, 29
- ー・スビーズ, 37
- トマト入りー・スビーズ, 37
- ー・スミタース, 36
- ー・ソルフェリノ, 36
- チロル風-, 37
- チロル風- クラシック, 38
- ー・ディプロマット, 29
- ー・ナンチュア, 33
- 活けオマールで作るー・ニューバーグ, 33
- 茹でたオマールで作るー・ニューバーグ, 34
- ノルマンディ風-, 34
- ー・ノワゼット, 34
- バイエルン風-, 25
- ハンガリー風-, 30
- ー・オ・プール, 26
- ブルターニュ風-, 26
- ー・プレット, 35
- ー・ペアルネーズ, 25
- ー・アルビュフェラ, 25
- トマト入りー・ペアルネーズ, 25
- ー・ベルシー, 25
- ポー風-, 35
- ー・ボスフォワ, 26
- マッシュルーム入り-, 26
- ー・マトロット, 32
- ー・マリニエール, 32
- マルタ風-, 32
- ー・ムスーズ, 33
- ー・ムスリース, 32
- ー・ムタルド, 33
- ー・モルネー, 32
- ー・ラヴィゴット, 35
- ー・ラギビエール, 31
- リヴォニア風-, 32
- ー・リッシュ, 36
- ー・ルーベンス, 36, 38
- 魚料理用ー・レジャンス, 35
- 鶏料理のガルニチュール用ー・レジャンス, 35
- ー・ボワヴラード (標準), 19
- ー・ボワヴラード (ジビエ用), 20
- マッシュルーム→ー・シャンピニオン, 14
- マッシュルーム- (ホワイト系), 26
- ー・マデール, 18
- ー・マトロット, 18
- 白いー・マトロット, 32
- マヨネーズ, 46
- マヨネーズのバリエーション, 48
- ー・マリニエール, 32
- マルタ風-, 32
- ー・ムスーズ, 33
- ー・ムスクテル, 48
- ー・ムスリース, 32
- ー・ムタルド, 33
- クリーム入りー・ムタルド (冷製), 48
- 村人風-, 38
- モスクワ風-, 19
- ー・モルネー, 32
- ー・モワル, 18
- ー・ユサルド, 18
- ー・ラヴィゴット, 35
- ー・ラヴィゴット (冷製), 48
- ー・ラギビエール, 31
- リヴォニア風-, 32
- ー・リッシュ, 36
- リヨン風-, 18
- ルーアン風-, 21
- ー・ルーベンス, 36
- 冷製-
  - アイヨリ, 45
  - アンタルシア風-, 45
  - イタリア風-, 46
  - ー・ヴァンサン, 50
  - ー・ヴェルト, 50
  - クリーム入りー・ムタルド, 48



ー・グリビッシュ, 46  
 くるみ入り・レフォール, 48  
 コーティング用マヨネーズ, 47  
 ジェノヴァ風ー, 45  
 ー・シャンティイ, 45  
 スウェーデン風ー, 50  
 タルタルー, 49  
 プロヴァンスバター, 45  
 ーボヘミアの娘, 45  
 マヨネーズ, 46  
 マヨネーズのバリエーション, 48  
 ー・ムスクテル, 48  
 ラヴィゴット (ヴィネグレット), 48  
 レフォール風味のー・グロゼイユ, 46  
 ー・レムラード, 49  
 ロシア風ー, 49  
 ロシア風ホイップマヨネーズ, 48  
 冷製ソース, 45  
 ー・レジャンス, 21  
 魚料理用ー・レジャンス, 35  
 鶏料理のガルニチュール用ー・レジャンス, 35  
 レフォール風味のー・グロゼイユ, 46  
 ー・レムラード, 49  
 ローマ風ー, 21  
 ロシア風ホイップマヨネーズ, 48  
 ロシア風ー (冷製), 49  
 ー・ロベール, 21  
 ー・ロベール・エスコフィエ, 21  
 ソルフェリノ  
 ソースー, 36

卵  
 エッグソース (イギリス風), 43  
 エッグアンドバターソース (イギリス風), 43

玉ねぎ  
 セージと玉ねぎのソース (イギリス風), 44  
 オニオンソース (イギリス風), 43

タルタル  
 ーソース (冷製), 49

着色素材  
 色付け用の赤いバター, 53  
 色付け用の緑のバター, 54

徴税官風⇒フィナンシエール  
 ソース・フィナンシエール, 16

チロル風  
 ーソース, 37  
 ーソース クラシック, 38

ディアース  
 ソースー, 15

ディアーブル  
 ソース  
 ソースー・エスコフィエ, 15  
 ソースー, 15  
 デビルソース (イギリス風), 41

ディプロマット  
 ソースー, 29

デュセル  
 ソースー, 15

ドイツ風  
 ソース・アルマンド (ドイツ風ソース), 11

東方風  
 オリент風ソース, 34

トマト  
 ーソース, 12

トルチュ  
 ソースー, 22

ナンチュア  
 ソースー, 33

にしん  
 ーバター, 54

ニューバーグ  
 活けオマルを使うソースー, 33  
 茹でたオマルを使うソースー, 34

にんにく  
 ーバター, 53

ノルマンディ風  
 ーソース, 34

ノロ鹿⇒シュヴルイユ  
 ソース  
 ソース・シュヴルイユ, 15  
 ローバックソース (イギリス風), 41

ノワゼット  
 ヘーゼルナッツソース, 34

ハーブ⇒香草  
 香草ソース (ホワイト系), 29  
 香草ソース (ブラウン系), 16

バイエルン風  
 ーソース, 25

バセリ  
 バセリソース (イギリス風), 43  
 バセリソース (魚料理用、イギリス風), 43

バター  
 合わせバター  
 アーモンドバター, 53  
 アンチョビバター, 53  
 色付け用の赤いバター, 53  
 色付け用の緑のバター, 54  
 エクルヴィスバター, 54  
 エシャロットバター, 54  
 エスカルゴ用バター, 54  
 エストラゴンバター, 54  
 オマルバター, 54  
 キャビアバター, 53  
 クルヴェットバター, 54  
 ブール・シヴリ, 53  
 白子バター, 54  
 にしんバター, 54  
 にんにくバター, 53  
 ブール・コルベール, 53  
 ブール・ダヴリーヌ, 53  
 ブール・ベルシー, 53  
 ブールマニエ, 55  
 メートルドテルバター, 55  
 ブール・ラヴィゴット, 53  
 エッグアンドバターソース (イギリス風), 43  
 ソース・オ・ブール, 26  
 ーソース (イギリス風), 41

プロヴァンスバター, 45  
 バター⇒合わせバター, 52

バタルド  
 ソースー, 26

パリ風  
 ーソース⇒ー・アルマンド, 11

パン  
 フライドブレッドソース (イギリス風), 43  
 ブレッドソース (イギリス風), 43

ハンガリー風  
 ーソース, 30

ビガラード  
 ソースー, 13

ブル・コンボゼ⇒合わせバター, 52

ブルマニエ, 55  
 フィナンシエール  
 ソースー, 16

フェンネル  
 フェンネルソース (イギリス風), 42

フォイヨ  
 ソースー, 25

フォン, 1  
 赤ワインを用いた魚のー, 6  
 仔牛の茶色いー, 5  
 魚のー, 6  
 ジビエのー, 6  
 白いー, 5  
 茶色いー, 5  
 鶏のー, 5

フュメ  
 魚のー, 6  
 フェメドボワゾン, 6

ブルーテ⇒ヴルテ, 10  
 ブルーテ⇒ヴルテ, 11  
 ブルゴーニュ風  
 ーソース, 13  
 ブルターニュ風  
 ーソース (ホワイト系), 26  
 ーソース (ブラウン系), 13

ブレット  
 ソースー, 35

プロヴァンス風  
 ーソース, 20

プロヴァンス  
 プロヴァンスバター, 45

ヘーゼルナッツ  
 ソース・ノワゼット, 34  
 ブール・ダヴリーヌ, 53

ベアルヌ風  
 ソースー, 25  
 グラスドヴィアン入りソース・ベアルネーズ, 25  
 トマト入りソース・ベアルネーズ, 25

ベアルネーズ  
 ソースー, 25

バシヤメル  
 ーソース, 12

ペリグー  
 ソースー, 19

ペリゴール風⇒ペリグルダン/ペリグルディース

ソース・ペリグルディース, 19  
 ベルシー  
 ソース・ー, 25  
 ブール・ー, 53

ホースラディッシュ  
 ーソース, 51

ポー風  
 ーソース, 35

ボヌフォワ  
 ソース・ー, 26

ボヘミア  
 ソース・ーの娘, 45

ボルドー風  
 ーソース, 13  
 ーソース(白), 26

ボルトガル風  
 ーソース, 20

ボルト酒  
 ボートワインソース(イギリス風), 44

ボルト酒⇒ボルト  
 ソース・ー, 20

ボワヴラード  
 ソース・ー(標準), 19  
 ソース・ー(ジビエ用), 20

マスタード(ムタルド)  
 ソース・ムタルド, 33  
 クリーム入りソース・ムタルド, 48

マッシュルーム⇒シャンピニオン, 14

マッシュルーム  
 ーソース(ホワイト系), 26

マデラ酒⇒マデール  
 ソース・マデール, 18

マトロット  
 ソース・ー, 18  
 白いソース・ー, 32

マヨネーズ, 46  
 コーティング用ー, 47  
 ーのバリエーション, 48  
 ロシア風ホイップー, 48

マリニエール  
 ソース・ー, 32

マルタ風  
 ーソース, 32

ミックスバター⇒合わせバター, 52  
 ミルボワ, 9  
 ミント  
 ーソース, 51

ムスー(ズ)  
 ソース・ムスーズ, 33

ムスクテール  
 ソース・ー, 48

ムスリーヌモルネー  
 ーソース, 32

ムタルド(マスタード)  
 ソース・ムタルド, 33  
 クリーム入りソース・ー(冷製), 48

村人風  
 ーソース, 38

メートルドテル  
 ーバター, 55

モスクワ風  
 ーソース, 19

モルネー  
 ーソース, 32

ユサルド  
 ソース・ー, 18

ヨークシャー  
 ヨークシャーソース(イギリス風), 44

ラヴィゴット  
 ソース・ー, 35  
 ソース・ー(冷製), 48  
 ブール・ー, 53

ラギビエール  
 ソース・ー, 31

リヴォニア風  
 ーソース, 32

リッシュ  
 ソース・ー, 36

リフォーム  
 リフォームソース(イギリス風), 44

リヨン風

ーソース, 18  
 リンゴ  
 アップルソース(イギリス風), 43

ルー, 8  
 白いー, 8  
 茶色いー, 8  
 ーの火入れについて, 8  
 ブロンドのー, 8

ルーアン風  
 ーソース, 21

ルーベンス  
 ソース・ー, 36

レジャンス  
 ソース・ー, 21  
 魚料理用ソース・ー, 35  
 鶏料理のガルニチュール用ソース・ー, 35

レフォール  
 ー風味のソース・グロゼイユ, 46  
 ホースラディッシュソース(イギリス風), 44  
 レフォール(ホーシュラディッシュ)くるみ入りソース・ー(冷製), 48

レムラード  
 ソース・ー, 49

ローバック  
 ーソース(イギリス風), 41

ローマ風  
 ーソース, 21

ロシア風  
 ーソース(冷製), 49  
 ーホイップマヨネーズ, 48

ロブスター  
 ロブスターソース(イギリス風), 42

ロベール  
 ソース・ー, 21  
 ソース・ー・エスコフィエ, 21

ワイン  
 白ワイン  
 ーソース, 39